

仙台市文化財調査報告書第232集

神明社窯跡ほか 発掘調査報告書

1998年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第232集

神明社窯跡ほか 発掘調査報告書

1998年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市には約700ヶ所の遺跡が存在し、年間にそれらの遺跡に関する開発や建築は320件以上あります。それらの行為に対して、文化財保護法の定めにより、それぞれの工事内容を審査したうえで、立会調査や発掘調査の対応をすることになっております。

本調査には時間がかかり、調査着手を待っておられる申請者も多い状況にありますが、当教育委員会文化財課では一日でも早く調査に着手できるよう、また一件でも多く調査が終了するよう努めておりますので、今後ともご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成9年度は49遺跡75ヵ所の確認調査、本調査を実施しましたが、前段で触れましたように、調査の効率化を図るために調査体制の見直しを行ったうえでの実施となりました。具体的には小規模調査は別に調査班を組んで機動的に対応できるようにしたものであり、相当の成果をあげたものと考えております。

その小規模調査班の担当した遺跡のうち、6件をまとめてここに報告することになりました。

ここで報告できなかったものも含め、仙台市の各区で確認調査、小規模な本調査を実施しました折り、多くの皆様のご協力、ご指導を賜りましたことに対しまして、心より感謝申し上げます。

小規模調査の報告ではございますが各地域の情報を提供しておりますので、ぜひ参考資料としてご活用いただければ幸いです。

1998年3月

仙台市教育委員会

教育長 堀 篠 克 彦

例　　言

1 本書は、民間開発事業に関わる神明社窯跡（第2次調査）・富沢遺跡（第105・107・108・109次調査）・陸奥国分尼寺跡（第7次調査）・愛宕山横穴墓群（第4次調査）の発掘調査報告書と、仙台市関連事業に関わる荒井館跡・押口遺跡、仙台東郊条里跡の確認調査報告書である。本書はすでに公表されている記者発表資料等より優先するものである。

2 本書の編集は、仙台市教育委員会文化財課 篠原信彦・根本光一が担当し、本文の執筆等については下記のとおり分担した。

本文執筆 神明社窯跡………3・4 結城慎一 1・2・5・6・7・8 篠原信彦

富沢遺跡・陸奥国分尼寺跡・愛宕山横穴墓群………根本光一

押口遺跡・荒井館跡・仙台東郊条里跡………根本光一

遺構図・遺物図作成………工藤哲司・根本光一

遺物写真撮影………根本光一

3 本書に関わる整理作業には下記の方々の参加を得た。

相沢 守 相沢美佐子 青山諒子 秋葉泰徳 泉 美恵子 伊藤房江 加藤美紀 熊谷きぬ子
小林由美 斎藤美恵子 境 一美 佐藤愛子 佐藤悦子 佐藤久栄 佐藤麻弥 佐藤由美子
佐藤よし子 雪石良子 鈴木邦彦 鈴木峰子 鈴木美代子 鈴木広子 高橋勝恵 高橋弘子
高橋美香 只野宋一 千葉恭子 中里とわ子 根岸ゆみ 水戸 智 米森博子 山田やす子
山並明夫 若生洋子 渡辺純子 渡辺まき子

4 発掘調査・報告書作成にあたり次の御指導、御助言、御協力を賜った。（敬称略・順不同）

古窯跡研究会 仙台育英学園高等学校考古学研究部

今泉隆雄 渡邊泰伸 藤原二郎

5 本書に関わる図面・写真・遺物は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本書中の土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）を使用した。

2. 本書に使用した地形図は国土地理院発行の1：50,000「仙台」の一部を縮小して転載した。

3. 本書で使用している方位は磁北で統一している。

4. 本書中の遺構略号は以下のとおり表している。

S D : 溝　　跡 S I : 壁穴住居跡・壁穴遺構 S K : 土　　坑

S O : 窯　　跡 S X : その他の遺構

5. 本書中の遺物略号は以下のとおり表している。

C : ロクロ不使用の土師器 D : ロクロ使用の土師器・赤焼土器

E : 須 恵 器 F : 軒丸瓦・丸瓦 G : 軒平瓦・平瓦

6. 本調査に関わる実測図・写真・出土遺物等は仙台市教育委員会が一括して保管している。

目 次

序 文

例 言

凡 例

I 神明社窯跡（第2次調査）

1 調査要項	1
2 調査に至る経過	1
3 遺跡の位置と環境	1
4 神明社窯跡発掘調査史	3
5 調査の方法と基本層序	5
6 発見された遺構と遺物	5
(1) 窯跡	5
(2) 土坑	18
(3) 溝跡	18
(4) その他の遺構	18
7 出土遺物について	18
8 調査成果とまとめ	26
(1) 窯跡出土の遺物の年代	26
(2) 遺構	27
(3) まとめ	27

II 富沢遺跡（第105・107・108・109次調査）

1 調査要項	35
2 遺跡の位置と環境	36
3 調査概要	36
(1) 第105次調査(泉崎浦遺跡)	36
(2) 第107次調査	37
(3) 第108次調査	39
(4) 第109次調査	40

III 陸奥国分尼寺跡（第7次調査）

1 調査要項	44
2 遺跡の位置と環境	44
3 調査方法と基本層序	45
4 発見遺構と出土遺物	46
5 調査成果のまとめと考察	53
(1) SD-1・2溝跡の性格について	53
(2) まとめ	53

IV 愛宕山横穴墓群（第4次調査）

1 調査要項	59
2 遺跡の位置と環境	59

3 調査の方法	60
4 発見遺構と出土遺物	60
5 調査成果のまとめと考察	60
(1) 19号横穴墓の年代について	60
(2) まとめ	61

V 荒井館跡・押口遺跡確認調査

1 調査要項	64
2 遺跡の位置と環境	64
3 調査の方法	65
4 発見遺構と出土遺物	65
5 調査成果のまとめ	67

VI 仙台東郊条里跡確認調査

1 調査要項	69
2 遺跡の位置と環境	69
3 調査の方法と基本層序	70
4 発見遺構と出土遺物	70
5 調査成果のまとめと今後の課題	71

挿 図 目 次

I 神明社窯跡（第2次調査）

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 調査地点と周辺の地形	3
第3図 遺構配置図	4
第4図 SO-1窯跡実測図	6
第5図 SO-1窯跡出土遺物(1)	7
第6図 SO-1窯跡出土遺物(2)	8
第7図 SO-1窯跡出土遺物(3)	9
第8図 SO-1窯跡出土遺物(4)	10
第9図 SO-2窯跡実測図	11
第10図 SO-2窯跡出土遺物(1)	12
第11図 SO-2窯跡出土遺物(2)	13
第12図 SO-2窯跡出土遺物(3)	14
第13図 SO-2窯跡出土遺物(4)	15
第14図 SO-2窯跡出土遺物(5)	16
第15図 SO-2窯跡出土遺物(6)	17
第16図 土坑・溝跡・その他の遺構実測図	19

第17図 SD-1 溝跡出土遺物	20
第18図 SX-1 その他の遺構出土遺物	21
第19図 切断調整瓦	24
第20図 文字瓦	25

II 富沢遺跡（第105・107・108・109次調査）

第21図 調査地点と周辺の地形	35
第22図 第105次調査区配置図	36
第23図 第105次調査区北壁断面図	37
第24図 第107次調査区配置図・南壁断面図	38
第25図 第108次調査区配置図・東壁断面図	39
第26図 第109次調査区配置図・西壁断面図	41

III 陸奥国分尼寺跡（第7次調査）

第27図 調査地点と周辺の地形	44
第28図 調査区配置図	45
第29図 第1トレンチ遺構配置図・北壁断面図・SI-2断面図	47
第30図 第2トレンチ遺構配置図・SD-2断面図	48
第31図 第3トレンチ遺構配置図・西壁断面図・SI-3断面図・SX-1断面図	49
第32図 出土遺物(1)	51
第33図 出土遺物(2)	52

IV 愛宕山横穴墓群（第4次調査）

第34図 調査地点と周辺の地形	59
第35図 19号横穴墓実測図	61

V 荒井館跡・押口遺跡確認調査

第36図 調査地点と周辺の地形	65
第37図 荒井館跡遺構配置図・SD-2断面図	66
第38図 押口遺跡調査区配置図	66

VI 仙台東郊条里跡確認調査

第39図 調査地点と周辺の地形	69
第40図 第1トレンチ調査区・東壁断面図	71

写真図版目次

I	神明社窯跡（第2次調査）	
図版1	調査前状況、SO-1・2 窯跡	29
図版2	SO-2 窯跡、SK-1 土坑、SD-1 溝跡	30
図版3	SO-1・2 窯跡出土遺物(1)	31
図版4	SO-1・2 窯跡出土遺物(2)	32
図版5	SO-2 窯跡、SD-1 溝跡、SX-1 その他の遺構出土遺物	33
図版6	文字瓦	34
II	富沢遺跡（第105・107・108・109次調査）	
図版7	調査状況・土層断面	43
III	陸奥国分尼寺跡（第7次調査）	
図版8	第1・2 トレンチ調査状況	55
図版9	第3 トレンチ調査状況	56
図版10	出土遺物(1)	57
図版11	出土遺物(2)	58
IV	愛宕山横穴墓群（第4次調査）	
図版12	19号横穴墓調査状況	63
V	荒井館跡・押口遺跡確認調査	
図版13	荒井館跡・押口遺跡調査状況	68
VI	仙台東郊条里跡確認調査	
図版14	第1 トレンチ調査状況	73
図版15	第1 トレンチ疑似畦畔・第5 トレンチ土層断面	74

I 神明社窯跡（第2次調査）

I 調査要項

遺跡名	神明社窯跡（宮城県遺跡番号 01044）
調査原因	小規模な宅地造成
所在地	仙台市宮城野区桟江8-2、8-6
対象面積	700m ²
調査面積	104m ²
調査期間	平成8年7月24日～8月20日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	篠原信彦 竹田幸司
調査補助員	渡邊泰伸
調査参加者	秋葉泰徳 高橋恵子 只野宗一 土井 清 鈴木邦彦
調査協力	仙台育英学園高等学校考古学研究部 藤原二郎

2 調査に至る経過

神明社窯跡は、仙台市街地の北部を東西に延びる通称「台原・小田原丘陵」と呼ばれる丘陵の東側、仙台市宮城野区桟江地内に所在している。

平成8年5月に木皿栄蔵氏より小規模な宅地造成に伴う埋蔵文化財の発掘届が提出された。この場所は木皿氏宅へ入る道路により丘陵斜面の一部が削平を受けており、その崖面に2基の窯跡の断面が露出していることが文化財課にも報告され、その位置をすでに確認していた場所であった。今回の開発は、窯跡断面のある丘陵部分を宅地造成して住宅を建築する計画であることから、事前の発掘調査を実施することで協議を進め、平成8年7月24日から調査に着手した。

3 遺跡の位置と環境

仙台市北部に、泉区と青葉区・宮城野区を画すように東西に延びる七北田丘陵がある。この丘陵は北側が七北田川、南側が広瀬川によって形成された河岸段丘で、当窯跡を含む窯跡群はこの丘陵のうち南側になる、通称「台原・小田原丘陵」の小枝丘に発見されている。これらの窯跡群も台原・小田原窯跡群と総称され、古代の多賀城、陸奥国分寺・尼寺に瓦を供給したところとして知られている。

そのうち今まで発掘調査された窯跡は、安養寺中畠瓦窯跡、庚申前窯跡、安養寺下瓦窯跡、大蓮寺窯跡、五本松窯跡、桟江遺跡（桟江窯跡）、堤町窯跡、五城中学校北窯跡、そして神明社窯跡がある。

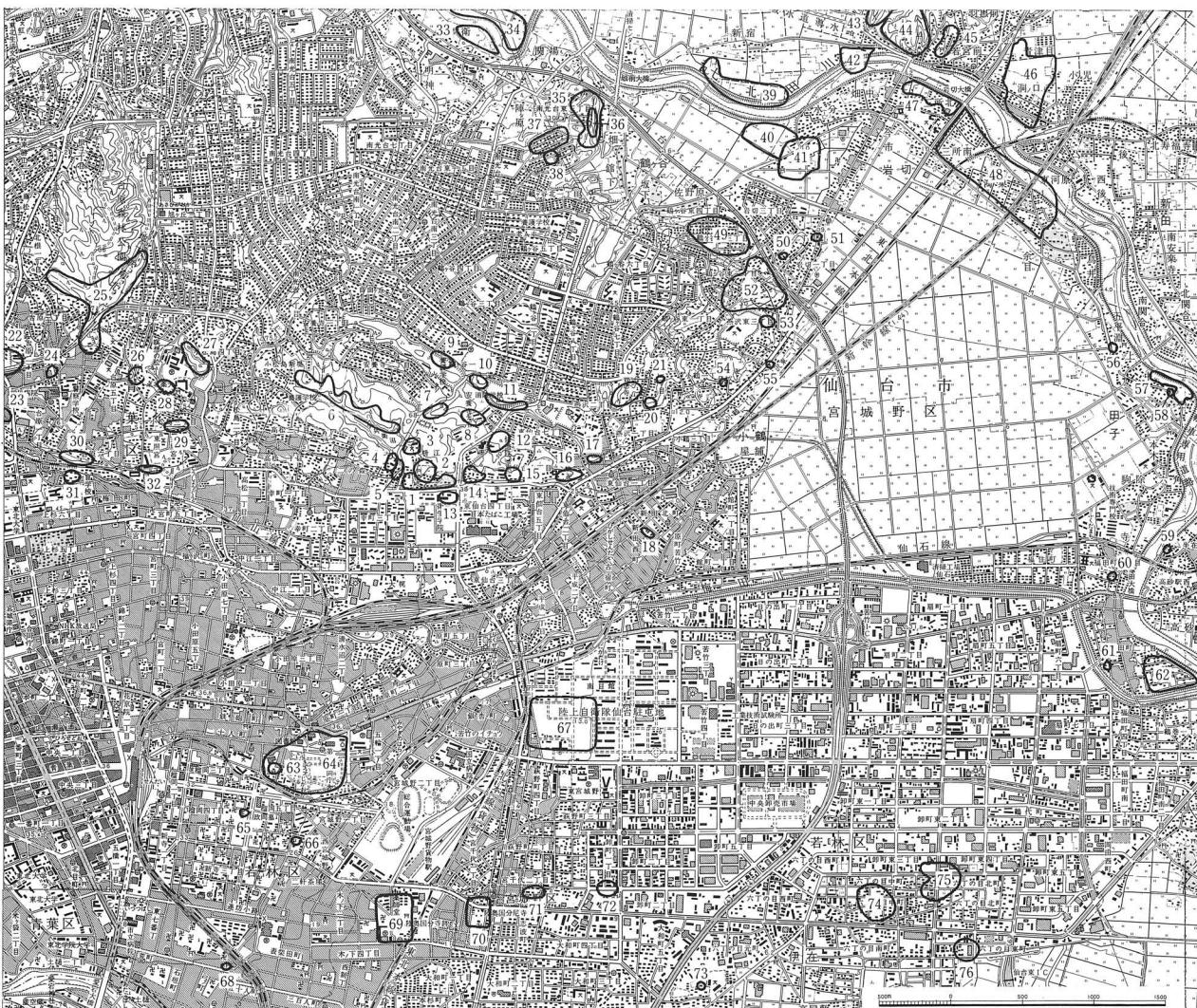
神明社窯跡はA、B、C地点からなる。南側に仙台平野を一望し、古代の陸奥国分寺・尼寺の伽藍も南方約3.5kmに目にできた位置になる。

A地点は以前に神明社西南麓窯跡、蟹沢中瓦窯跡、神明社東南麓窯跡と言っていた箇所を含む、標高40m前後のほぼ南向きの傾斜面である。今回の調査位置はこの地点の東端に当たる。

B地点はA地点の北側に連なる標高約45mの上部平坦地で、窯跡関連の工房跡と考えられる竪穴住居跡、掘立柱建物跡が発見されたところであり、多量の軒丸瓦、軒平瓦などが出土した。

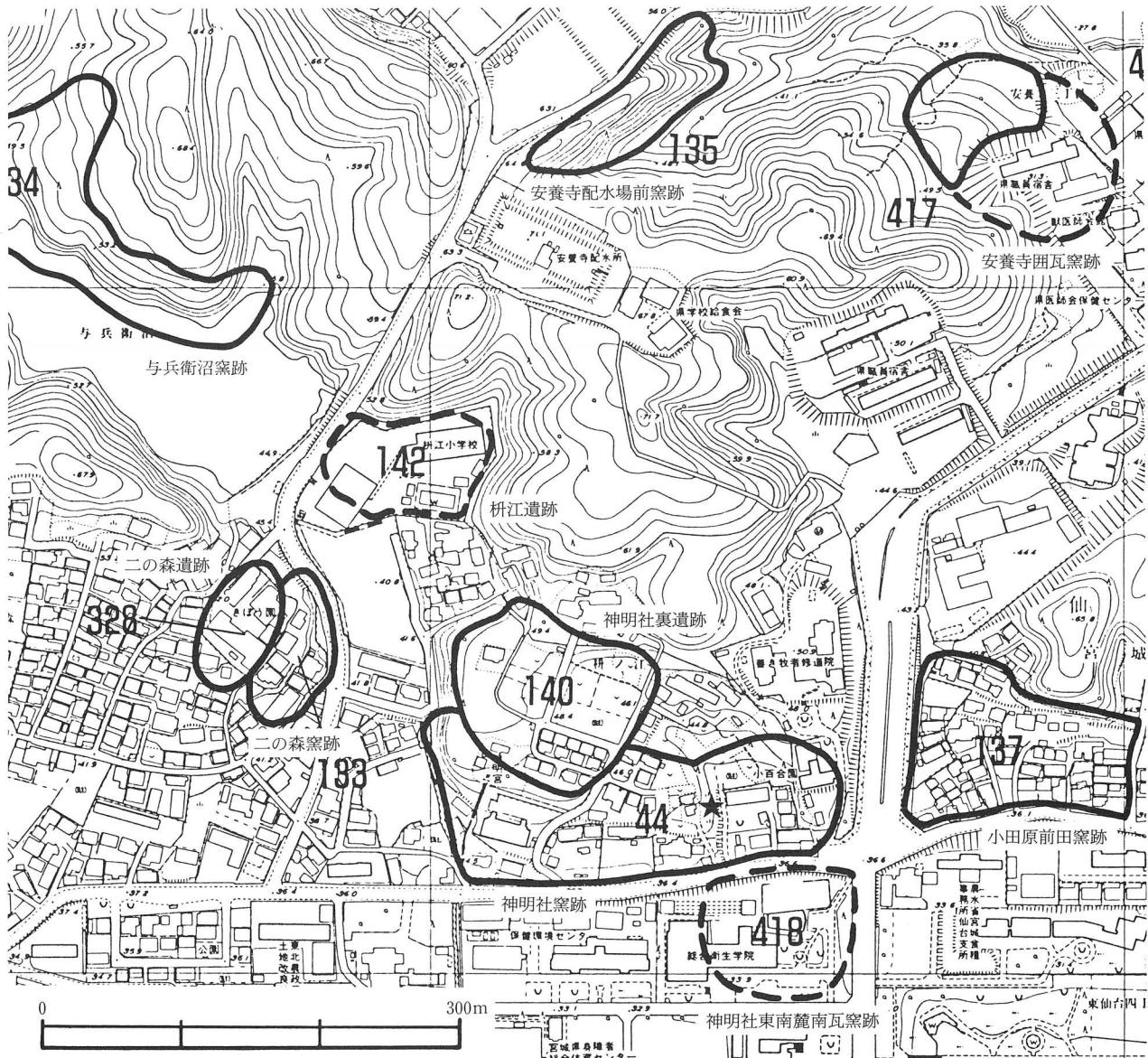
C地点はA・B地点の東側で、丘陵上部より修道院にかけてである。表採遺物としては細弁蓮華文軒丸瓦、連珠

I 神明社窯跡（第2次調査）



No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
1	神明社窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	39	大正囲遺跡	自然堤防	平安
2	神明社裏遺跡	丘陵	奈良・平安	40	岩切畑中遺跡	自然堤防	繩文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世
3	桟江遺跡	丘陵斜面	奈良・平安	41	稻荷館跡	自然堤防	中世
4	二の森遺跡	丘陵斜面	平安	42	新宿囲遺跡	自然堤防	平安
5	二の森窯跡	丘陵斜面	平安	43	岩切城跡	丘陵	中世
6	与兵衛沼窯跡	丘陵斜面	奈良・平安・近世	44	東光寺遺跡	丘陵斜面	中世
7	安養寺配水場前窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	45	若宮前遺跡	丘陵斜面	繩文、古墳、平安、中世、近世
8	安養寺囲瓦窯跡	丘陵斜面	平安	46	洞ノ口遺跡	自然堤防	古墳、奈良、平安、中世、近世
9	三高西側斜面窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	47	今市遺跡	自然堤防	平安、中世
10	安養寺中囲瓦窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	48	鴻ノ巣遺跡	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安、中世
11	安養寺下囲瓦窯跡	丘陵斜面	平安	49	菖蒲沢遺跡	丘陵	繩文、奈良、平安
12	安養寺下窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	50	千人塚古墳	丘陵	古墳
13	神明社東南麓南瓦窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	51	山崎囲遺跡	丘陵麓	繩文
14	小田原前田窯跡	丘陵斜面	奈良	52	燕沢遺跡	丘陵	繩文、弥生、古墳、奈良、平安
15	土手内瓦窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	53	吉沢遺跡	丘陵	平安
16	大蓮寺窯跡	丘陵斜面	古墳・奈良	54	五郎兵衛古墳	丘陵	古墳
17	燕沢公園窯跡	丘陵斜面	古墳・奈良	55	糠塚古墳	丘陵麓	古墳
18	新田北町遺跡	自然堤防	平安	56	五平淵板碑群	自然堤防	中世
19	善応寺横穴墓跡	丘陵斜面	古墳	57	堰下遺跡	自然堤防	平安
20	善応寺東横穴墓跡	丘陵斜面	古墳	58	堰下板碑群	自然堤防	中世
21	比丘尼塚古墳	丘陵	古墳	59	福室庚板碑	自然堤防	中世
22	荒巻一本杉瓦窯跡	丘陵斜面	平安	60	雲洞院板碑	自然堤防	中世
23	荒巻杉添窯跡	丘陵斜面	平安、江戸	61	四野観音堂板碑	自然堤防	中世
24	台原二丁目遺跡	丘陵斜面	平安	62	福田町遺跡	自然堤防	平安
25	五本松窯跡	丘陵斜面	平安	63	天神社遺跡	段丘	繩文(晩)
26	台原七丁目五番窯跡	丘陵斜面	平安	64	国分鞭館跡	段丘	中世
27	南光沢窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	65	孝勝寺境内古墳	段丘	古墳
28	小田原長命坂窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	66	正雲寺遺跡	段丘	平安
29	長命荘窯跡	丘陵斜面	平安	67	南目城跡	自然堤防	中世
30	杉添東窯跡	丘陵斜面	近世	68	三宝荒神社板碑群	段丘	中世
31	上杉六丁目遺跡	自然堤防	平安	69	陸奥国分寺跡	段丘	奈良、平安
32	五城中学校北窯跡	丘陵斜面	平安	70	陸奥国分尼寺跡	段丘	奈良、平安
33	新庄遺跡	沖積地	平安	71	志波遺跡	自然堤防	奈良、平安
34	館遺跡	沖積地	古代、中世	72	谷地館跡	自然堤防	中世
35	住吉遺跡	段丘	旧石器、繩文(早)、近世	73	曾利松明神古墳	自然堤防	古墳
36	住吉塚群	段丘	不明	74	北屋敷遺跡	自然堤防	平安、中世、近世
37	長岫遺跡	丘陵	旧石器、繩文、弥生、古代	75	明屋敷遺跡	自然堤防	平安
38	松森焰硝藏跡	丘陵	平安、江戸	76	地蔵浦遺跡	自然堤防	中世

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 調査地点（★印）と周辺の地形

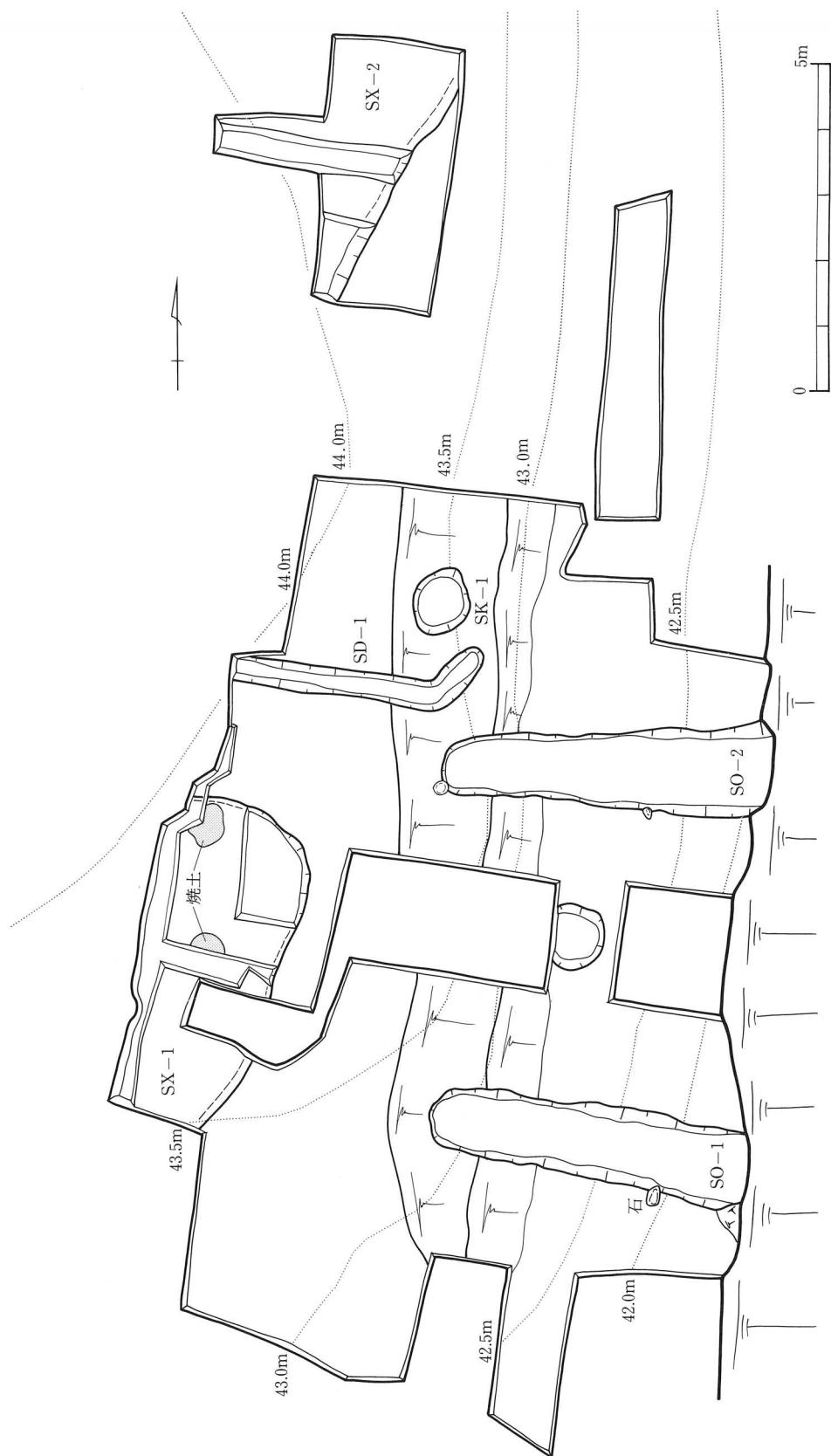
文軒平瓦、須恵器片などがある。

4 神明社窯跡発掘調査史

神明社窯跡の存在は、昭和14年の内藤政恒氏の『宮城県利府村春日瓦焼場大澤瓦窯址研究調査』「仙台近郊に於ける瓦窯址の概観」や昭和38~40年の同氏による『歴史考古 9~13』「仙台市台ノ原・小田原窯址群と出土の古瓦」という分布調査報告により、広く知られるようになった。

その後、東北学院大学考古学研究部や古窯跡研究会などがこの丘陵の分布調査を継続的に行っていた。昭和46年、A地点蟹沢中瓦窯跡の調査が古窯跡研究会によって実施され、半地下式ロストル付平窯跡が発見され、重圧文軒丸瓦、単弧文軒平瓦、多量の刻印文字瓦などが出土した。現在でも東北地方に於ける古代の平窯跡の発見例はここだけである。蟹沢中瓦窯跡は昭和58年にも第2次調査が実施された。

昭和55年には宅地造成に伴い仙台市教育委員会がB地点の調査を行っている。ここでは瓦工人の工房あるいは住居とみられる堅穴住居跡、管理施設とみられる掘立柱建物跡、粘土溜などが発見された。遺物としては重弁蓮華文鬼板片、重弁蓮華文・細弁蓮華文・重圧文軒丸瓦、単弧文・重弧文軒平瓦、刻印文字瓦、土師器、須恵器、硯片な



第3図 遺構配置図

どが出土している。

これらの調査から北西隣に位置する枡江遺跡（枡江窯跡）と同様、神明社窯跡全体を造瓦所として把握できることになった。

5 調査の方法と基本層序

今回の調査箇所は小規模な宅地造成部分を対象として実施した。すでに丘陵の一部が削平されており、また隣接の住宅地、あるいは急斜面等のために機械力は使用できないことから人力で調査を行った。

試掘トレンチは、ほぼ平坦な部分と傾斜面の2ヶ所に等高線に沿うように幅約1mで設定した。調査の結果、傾斜面で窯跡の一部と考えられる焼土の広がりが2ヶ所で検出され、さらに平坦部でも平瓦・単弧文軒平瓦などが出土して遺構の存在が予想されたことから調査区を拡張して遺構検出に努めた。当初、窯跡の断面が報告されていたが、傾斜面が僅かなことから窯跡の奥壁部分が残存するだけと考えられていた。けれども予想に反して窯跡の残存状況は比較的良好で、残存長が約5mの半地下式窯窓2基がほぼ平行して検出された。調査は窯跡部分を中心として平坦部分も含めた範囲まで広げて実施した。

基本層は2層に分けられ、表土からなるI層と地山からなるII層である。I層は暗褐色シルトでしまりがなく軟らかである。II層は丘陵部平坦部と斜面では黄褐色粘土質シルトであり、崖面付近では砂礫層・礫層・粘土層となる。

6 発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、窯跡2基、土坑1基、溝跡1条、性格不明遺構2基がある。

(I) 窯 跡

SO-1 窯跡（第4～8図）

〔遺構の確認〕 東側斜面の調査区中央南側で検出され、北側に約5m離れてほぼ平行してSO-2窯跡が検出されている。

〔構造・規模〕 残存長約4.8m、上幅90～120cmの半地下式無段窯窓で、深さ15～40cmを測る。長軸中心線上の主軸方向はW-11°-Nである。

〔堆積土〕 表土層直下で検出されている。堆積土は10層に細分され、スサ入り粘土の窯体崩落土や炭化物・焼土層からなる。

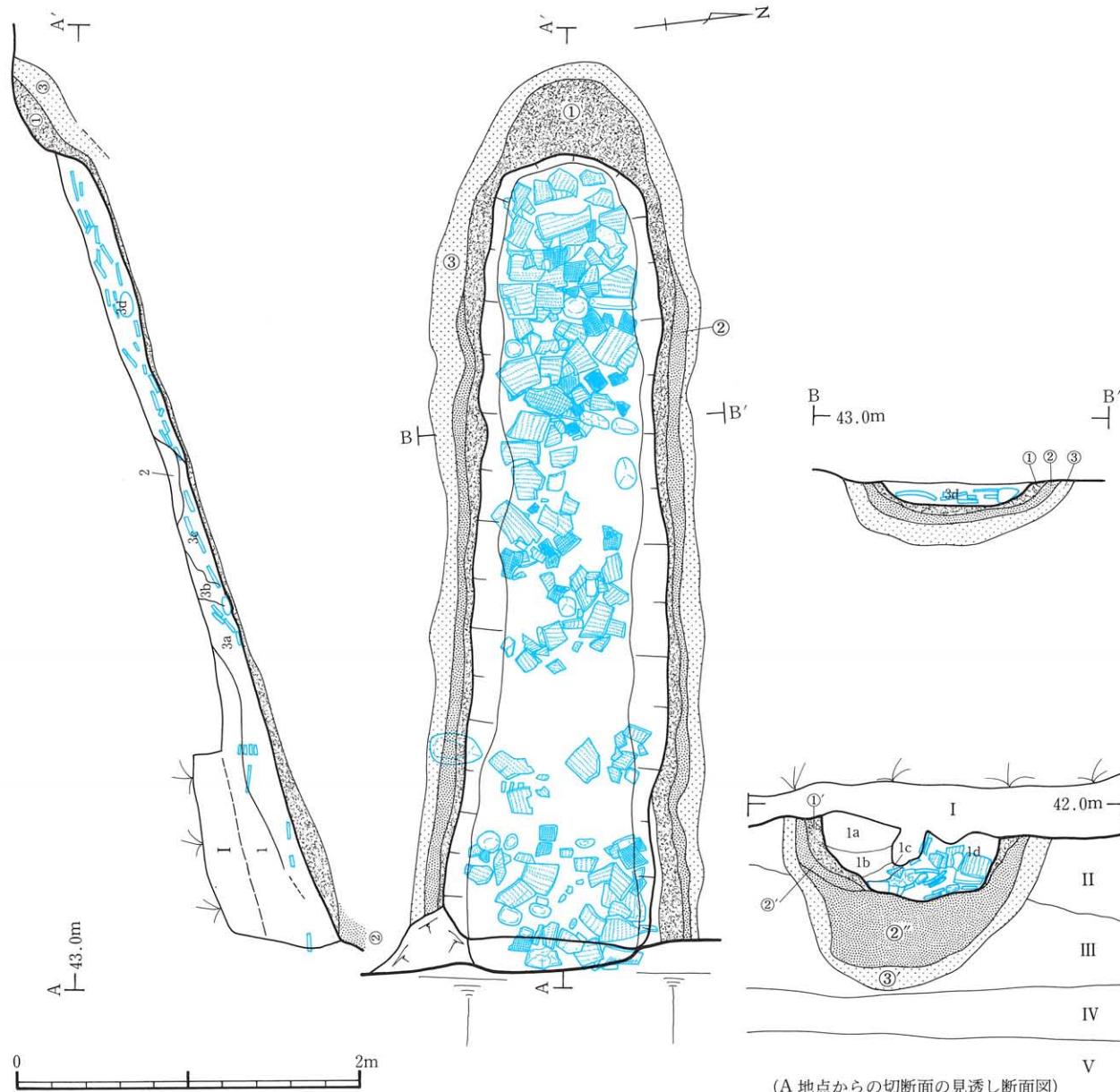
〔焼成部・燃焼部〕 燃焼部・焚口・灰原はすでに削平され、焼成部から奥壁にかけて検出された。崖面に段状となる部分が認められ燃焼部と焼成部の境と考えられるが詳細は不明である。焼成部は壁下端部と床面が検出され、床面は多少凹凸があるものの大部分平坦で、その傾斜角度は約17～18°である。焼成部の幅は最大部で100cm、中央部付近で75～80cm、奥壁で60～70cmを測る。奥壁はやや丸味を帯び、床面より72°で立ち上がる。

壁及び床面は非常に堅く、還元焰焼成により灰色に変色しているが、一部剥落して赤褐色を呈している部分もある。床面の枚数は1枚だけである。さらに壁面・床面については熱変化のため次第に赤褐色・橙色となっている。

〔遺物の出土状況〕 窯中より多数の瓦類が廃棄された状態で出土している。主に平瓦であり、焼台として使用された施設瓦もあるが、廃棄された状態で出土しているため段を形成しているかどうか不明である。

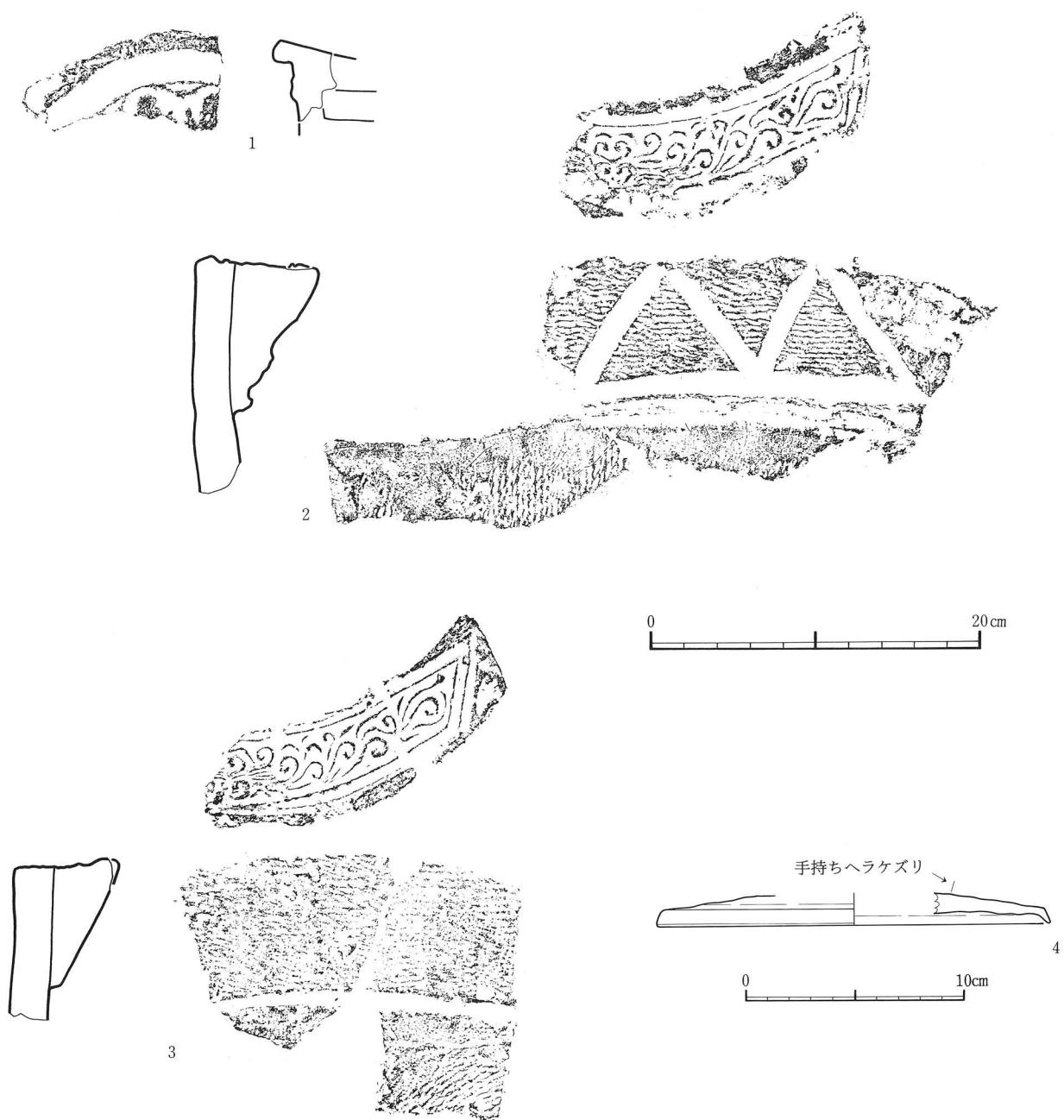
〔出土遺物〕 窯中より出土した遺物は軒丸瓦4点、軒平瓦2点、丸瓦11点、平瓦281点、須恵器蓋1点で、そのほとんどは平瓦が占めている。軒丸瓦はいずれも小破片であり、宝相花文軒丸瓦2点と瓦当文様が不明の軒丸瓦2点が出土し、軒平瓦は均整唐草文軒平瓦2点が出土している。

I 神明社窯跡（第2次調査）



遺構名	層位	土色	土質	その他の
SO-1	1	7.5YR4/4 褐色	シルト	窯崩壊後の流入土
	1a	5 YR4/6 赤褐色	シルト	窯体崩落土
	1b	7.5YR5/6 明褐色	シルト	赤色焼土の2次堆積
	1c	2.5YR5/4 にぶい赤褐色	シルト	赤色焼土と灰色窯体の崩落土
	1d	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	赤色焼土の2次堆積
	2	7.5YR4/4 褐色	シルト	赤色と灰色の焼土をブロック状に多量に混入
	3a	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	スサ入り窯体の崩落土
	3b	7.5YR4/4 褐色	砂質シルト	灰色の窯体の小ブロックを混入
	3c	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	スサ入り窯体の崩落土
	3d	7.5YR4/1 褐灰色	砂質シルト	窯体の崩落土
	①	10YR7/1 灰白色	砂	還元されている
	②	5 YR6/8 橙色	砂	熱変化により橙色に変化
	③	2.5YR4/8 赤褐色	砂	熱変化により赤褐色に変化
	①'	5 Y4/2 灰オーブン色	粘土	熱変化により灰オーブン色に変化
	②'	10YR6/1 褐灰色	粘土	熱変化により灰色に変化
②''	7.5YR7/1 灰白色	砂	熱変化により灰白色に変化	
③'	10R3/4 暗赤褐色	砂礫	熱変化により暗赤色に変化	
基本層	I	10YR3/3 暗褐色	シルト	表土
	II	10YR5/4 にぶい黄褐色	礫	
	III	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂	礫
	IV	7.5YR5/4 にぶい褐色	砂	礫
	V	2.5Y8/3 淡黄色	粘土	

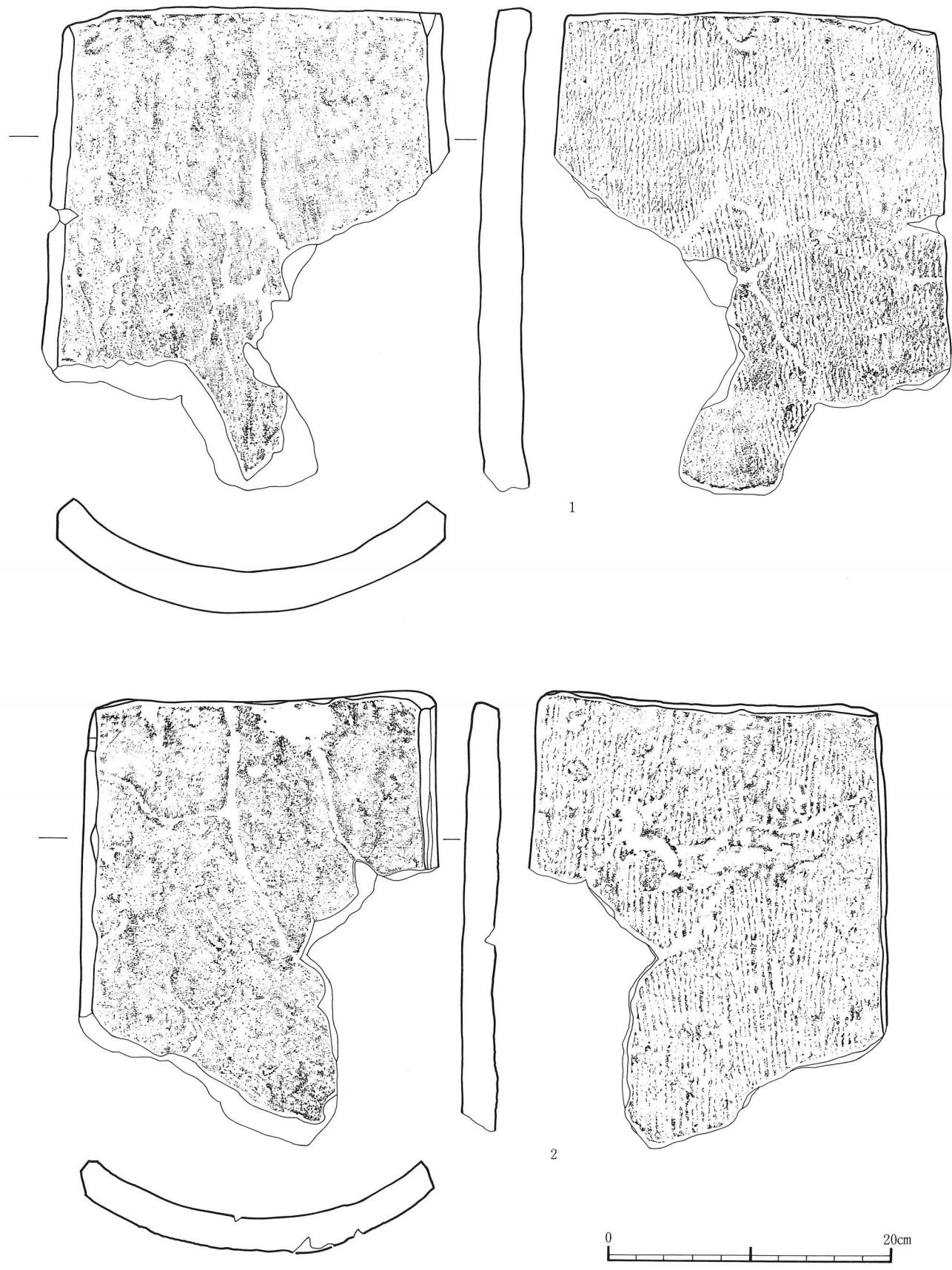
第4図 SO-1 窯跡実測図



番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	瓦当径	内区径	中房径	瓦当厚	最大長	特 徴	写真図版
1	F-13	宝相花文軒丸瓦	SO-1 埋土	-	-	-	1.8	-		
	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	最大長	広端幅	狭端幅	厚さ		特 徴	写真図版
2	G-21	均整唐草文軒平瓦	SO-1 埋土	(14.3)	(18.7)	-	6.3	凹面：布目・ナデ 凸面：縦位繩叩き 頸面：無文・横位繩叩き	3-6	
3	G-20	均整唐草文軒平瓦	SO-1・2 埋土	(15.2)	(18.4)	-	7.4	凹面：布目・糸切り痕・ナデ 凸面：縦位繩叩き 頸面：鋸歯文・横位繩叩き	3-7	
	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	器 高	口 径			特 徴	写真図版	
4	E-2	須恵器 蓋	SO-1 埋土	(0.7)	推定17.3			内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ・天井部手持ちヘラケズリ		

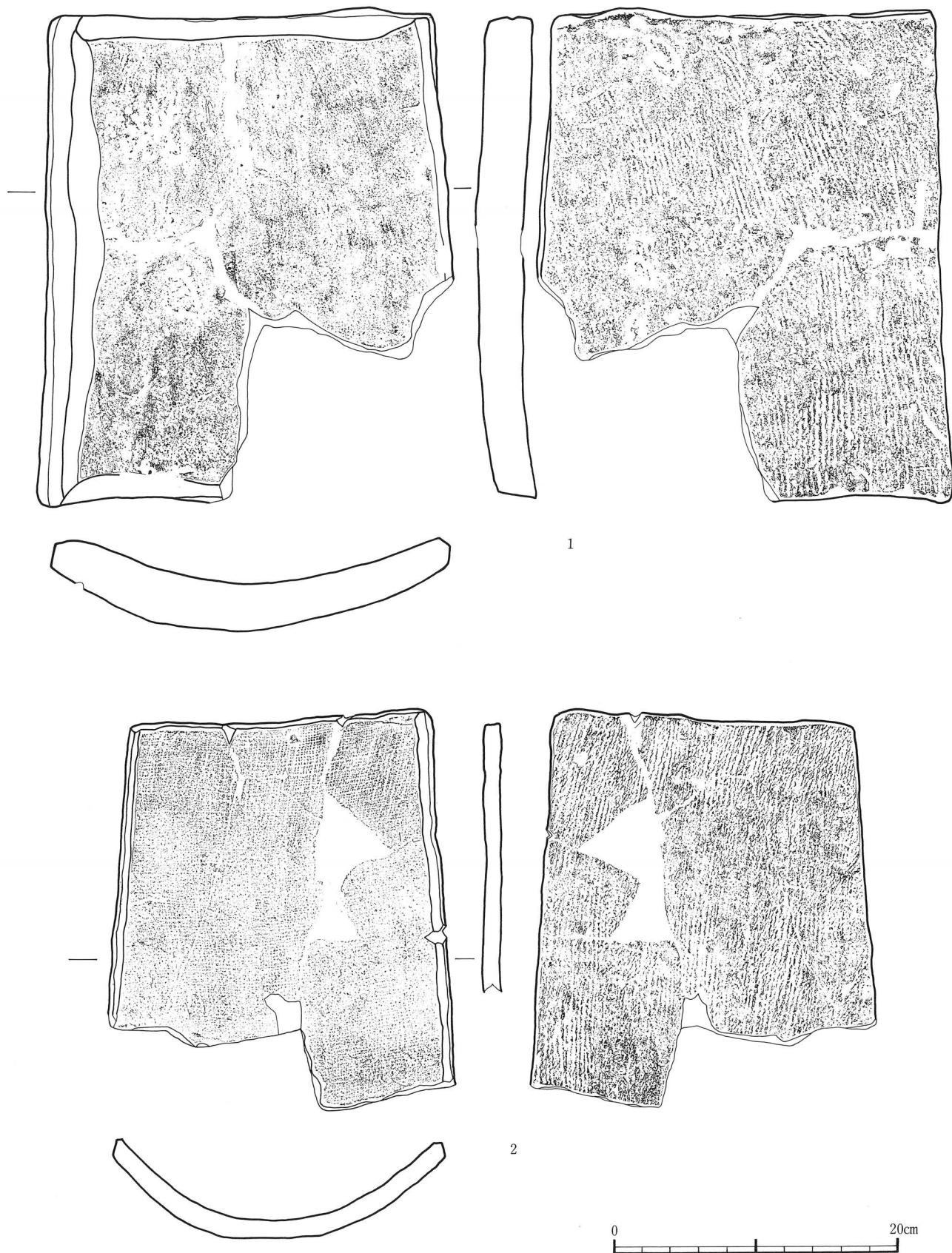
第5図 SO-1 窯跡出土遺物(1)

I 神明社窯跡（第2次調査）



番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	最大長	広端幅	狭端厚	厚さ	特 徴	写真図版
1	G-5	平瓦	SO-1 埋土	(34.3)	—	26.8	3.0	凹面：布目 凸面：縦位繩叩き	
2	G-6	平瓦	SO-1 埋土	(31.7)	—	24.0	2.5	凹面：布目 凸面：縦位繩叩き	

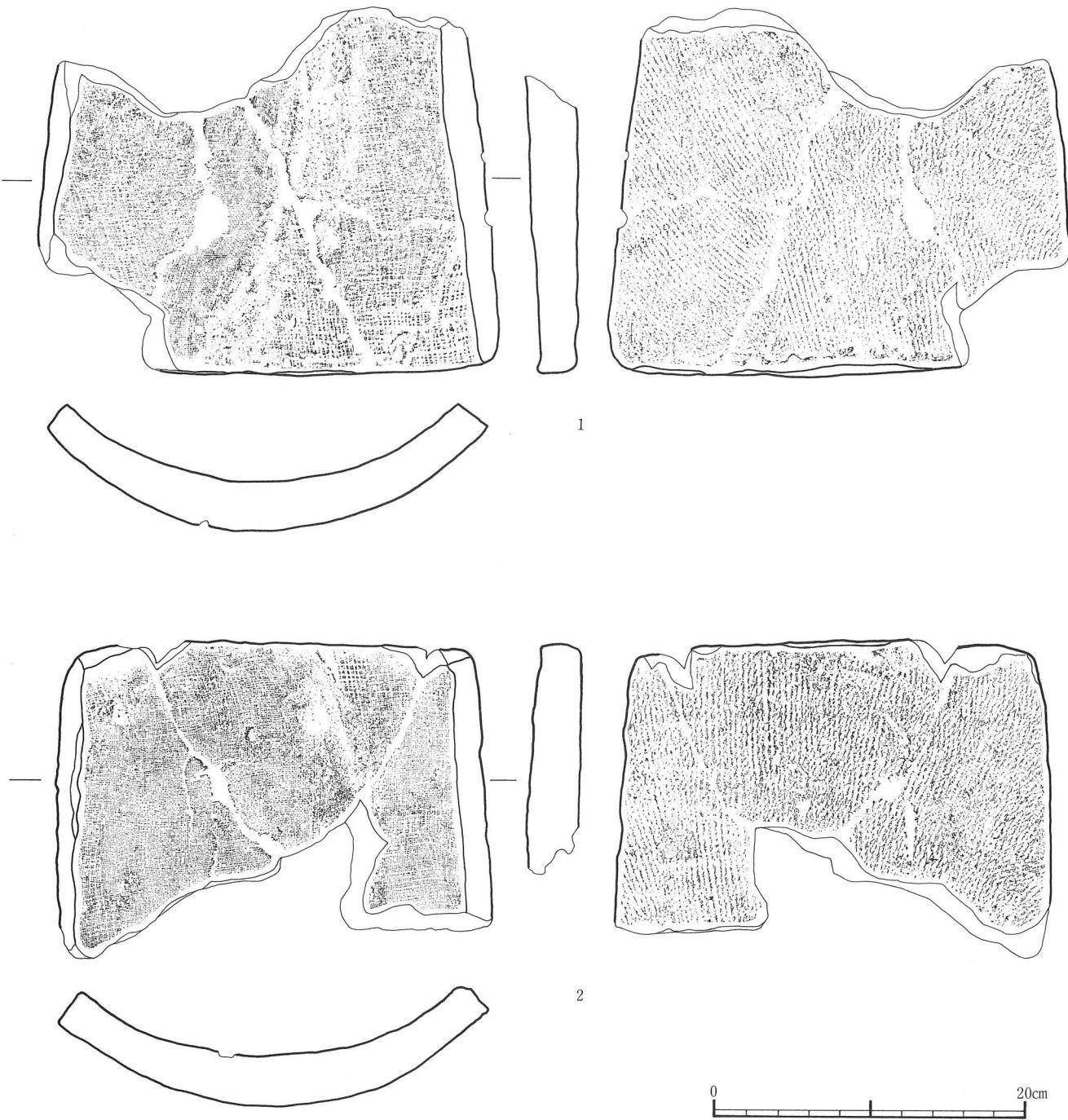
第6図 SO-1 窯跡出土遺物(2)



番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	最大長	広端幅	狭端厚	厚さ	特 徴	写真図版
1	G-8	平瓦	SO-1 埋土	35.0	—	26.9	3.7	凹面：布目・ナデ 凸面：縦位繩叩き	4-1
2	G-9	平瓦	SO-1 埋土	(27.9)	—	21.2	1.5	凹面：布目・ナデ 凸面：縦位繩叩き	4-2

第7図 SO-1 窯跡出土遺物(3)

I 神明社窯跡（第2次調査）



番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	最大長	広端幅	狭端厚	厚さ	特徴	写真図版
1	G-2	平瓦	SO-1 埋土	(23.5)	推定 29.0	—	3.2	凹面：布目・ナデ 凸面：縦位繩叩き	
2	G-3	平瓦	SO-1 埋土	(20.2)	—	25.8	3.4	凹面：布目・ナデ 凸面：縦位繩叩き	

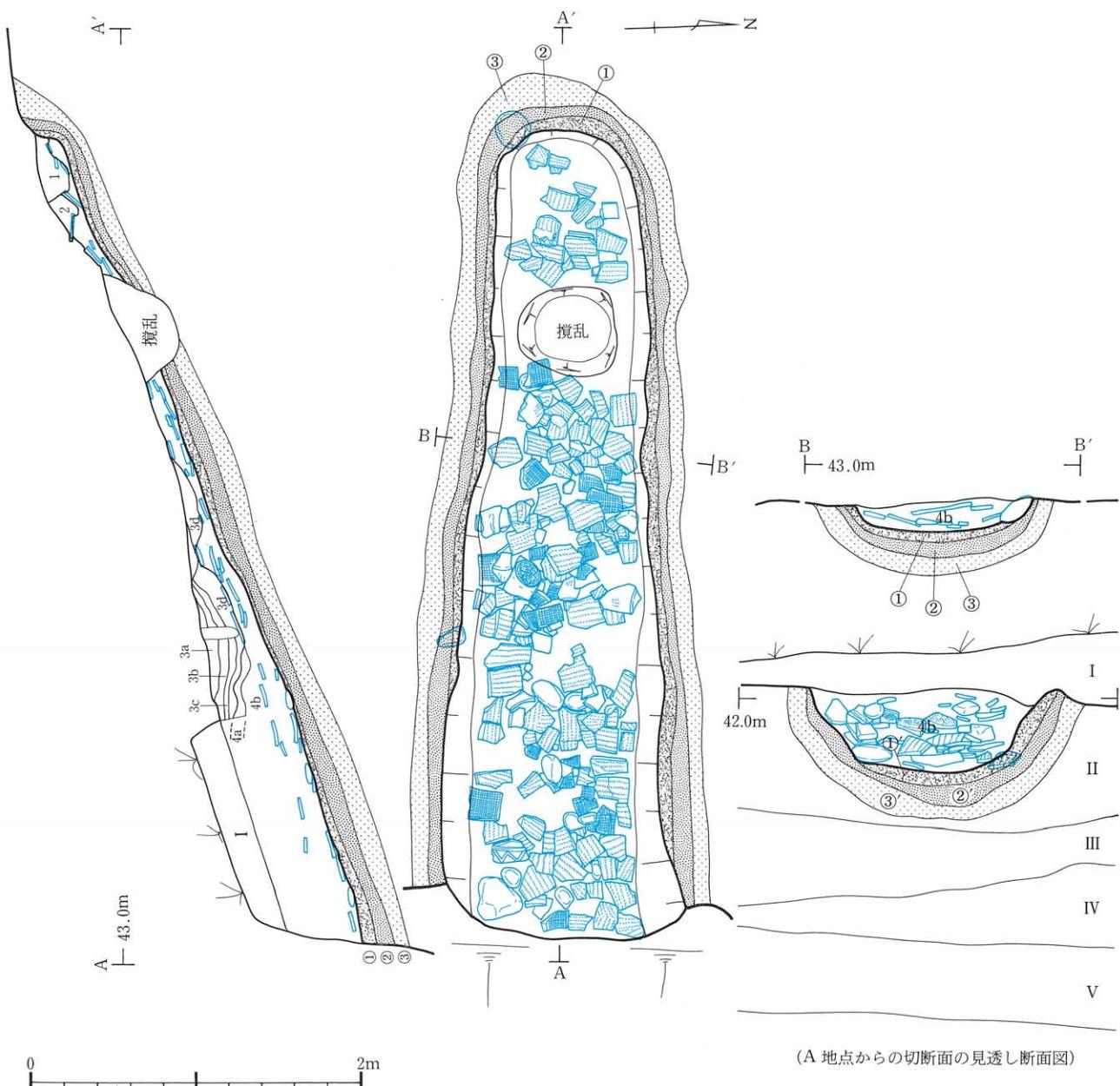
第8図 SO-1 窯跡出土遺物(4)

SO-2 窯跡（第9～15図）

〔遺構の確認〕 SO-1 窯跡の北側約 5 m 離れてほぼ平行して検出されている。

〔構造・規模〕 残存長約 4.9m、上幅 80～140cm の半地下式無段窯で、深さ 15～50cm を測る。長軸中心線上の主軸方向は W-1°-N である。

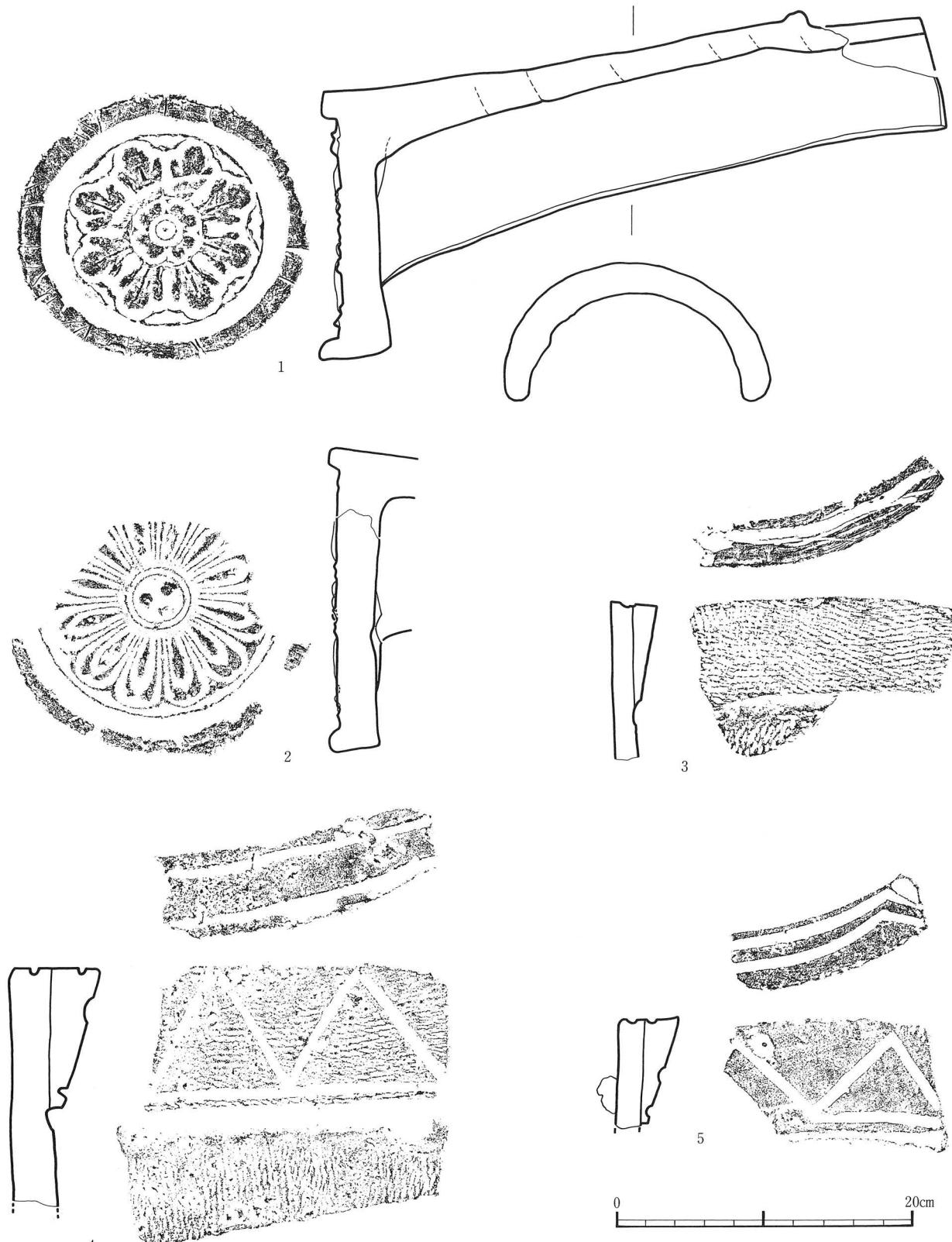
〔堆積土〕 表土層直下で検出されている。堆積土は 8 層に細分され、スサ入り粘土の窯体崩落土や炭化物・焼土



遺構名	層位	土色	土質	その他の
SO-2	1	7.5YR4/4 褐色	シルト	窯崩壊後の流入土
	2	7.5YR4/4 褐色	シルト	赤色と灰色の焼土をブロック状に多量に混入
	3a	5 YR5/8 明赤褐色	砂質シルト	赤色焼土の2次堆積
	3b	7.5YR7/6 橙色	砂質シルト	赤色焼土の2次堆積
	3c	7.5YR5/6 明褐色	砂質シルト	赤色焼土の2次堆積
	3d	7.5YR4/1 灰色	砂質シルト	灰色焼土の2次堆積
	4a	7.5YR7/6 橙色	砂質シルト	赤色焼土多量
	4b	7.5YR5/6 明褐色	砂質シルト	赤色焼土多量
	①	10YR7/1 灰白色	砂礫	還元されている
	②	5 YR6/8 橙色	砂礫	熱変化により橙色に変化
	③	2.5YR4/8 赤褐色	砂礫	熱変化により赤褐色に変化
	①'	2.5YR5/3 にぶい赤褐色	粘土	熱変化によりにぶい赤褐色に変化
	②'	7.5YR5/8 明褐色	シルト	熱変化により明褐色に変化
	③'	2.5YR4/8 赤褐色	シルト	熱変化により赤褐色に変化
基本層	I	10YR3/3 暗褐色	シルト	表土
	II	10YR5/4 にぶい黄褐色	礫	
	III	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂礫	
	IV	7.5YR5/4 にぶい褐色	砂礫	IIIより礫が大
	V	2.5YR8/3 淡黄色	粘土	

第9図 SO-2 窯跡実測図

I 神明社窯跡（第2次調査）

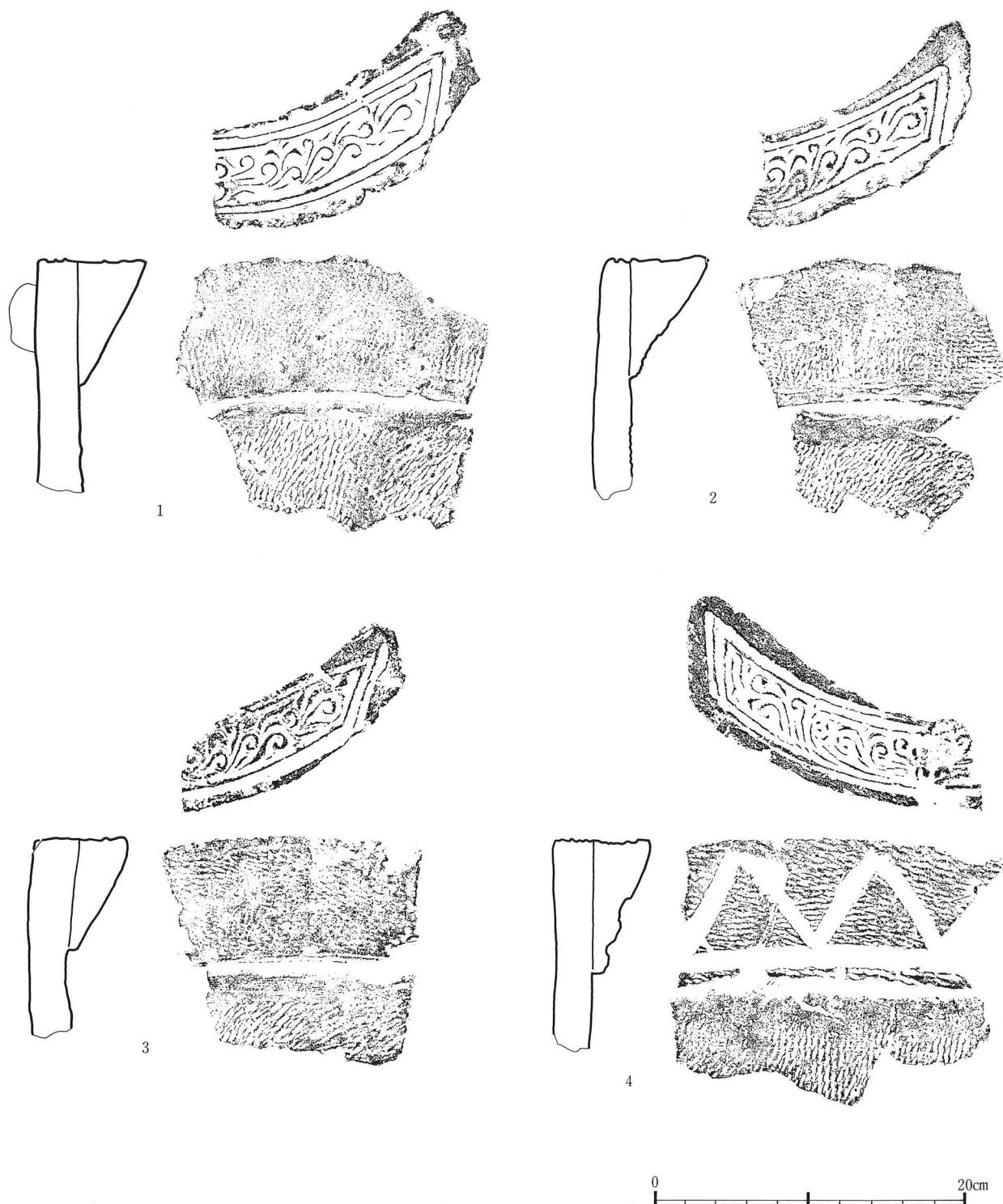


番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	瓦当径	内区径	中房径	瓦当厚	最大長	特 徴	写真図版
1	F-3	宝相花文軒丸瓦	SO-2 埋土	18.5	13.2	4.8	4.7	42.0	8葉宝相花文 凹面：布目・ナデ 凸面：縦位繩叩き・ナデ	3-1
2	F-6	細弁蓮華文軒丸瓦	SO-2 床面	(21.0)	(16.0)	4.4	3.4	—	8葉細弁蓮華文 蓮子(0+3)	3-2
番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	最大長	広端幅	狭端幅	厚さ		特 徴	写真図版
3	G-22	単弧文軒平瓦	SO-2 埋土	(10.7)	(15.6)	—	3.2	—	凹面：布目・ナデ 凸面：縦位繩叩き 頸面：無文・横位繩叩き	3-3
4	G-28	重弧文軒平瓦	SO-2 埋土	(18.2)	(22.6)	—	6.0	—	凹面：布目・糸切り痕 凸面：縦位繩叩き 頸面：鋸歯文・横位繩叩き	3-5
5	G-32	重弧文軒平瓦	SO-2 埋土	(8.2)	(13.8)	—	4.0	—	凹面：布目・ナデ 頸面：鋸歯文・ナデ	3-4

第10図 SO-2 窯跡出土遺物 (1)

層からなる。

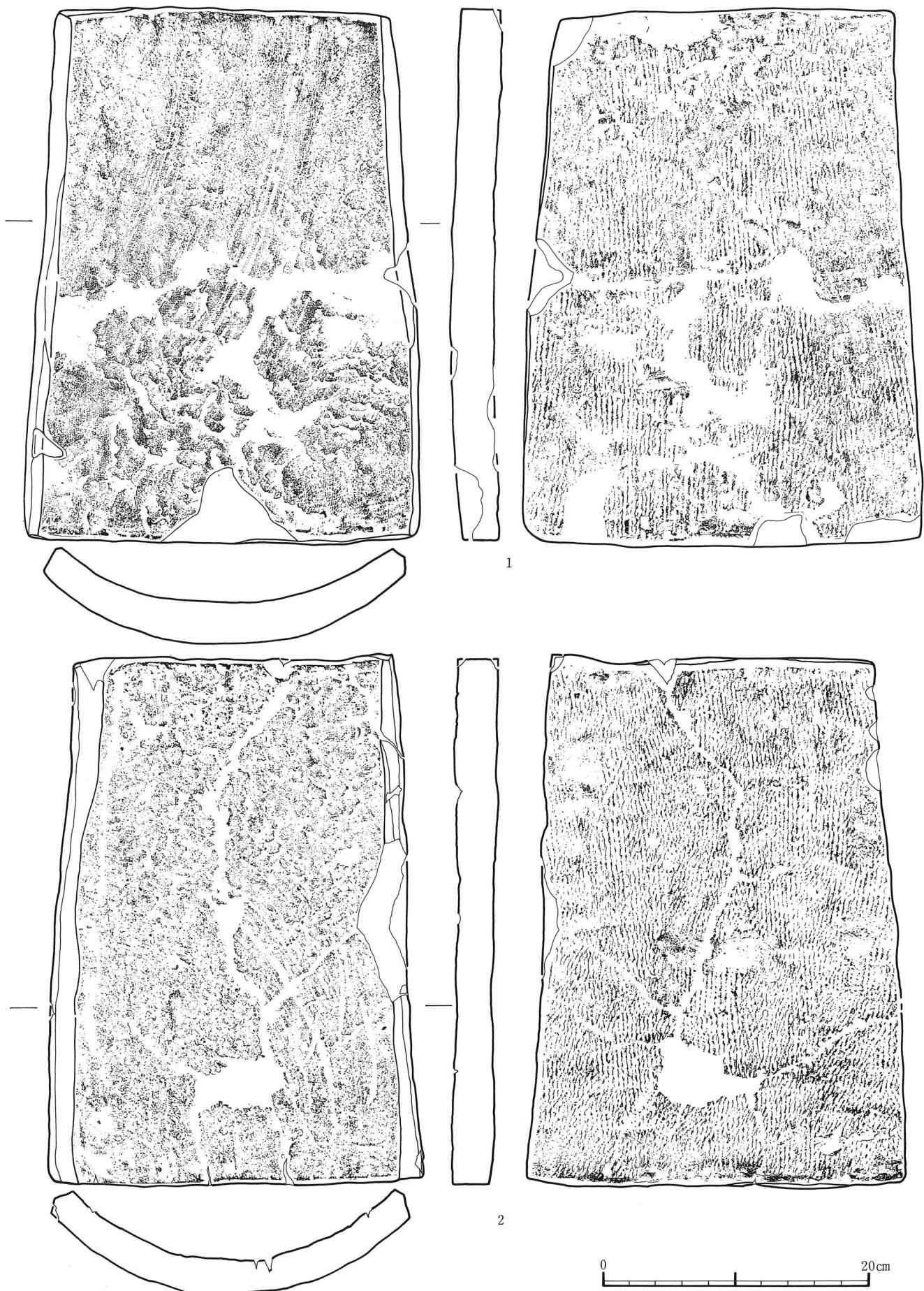
〔焼成部〕 燃焼部・焚口・灰原はすでに削平され、焼成部から奥壁にかけて検出された。焼成部は壁下端部と床面が検出され、床面は攪乱穴で壊されている以外ほぼ平坦で、その傾斜角度は約20°である。焼成部の幅は最大部で



番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	最大長	広端幅	狭端厚	厚さ	特徴	写真図版
1	G-25	均整唐草文軒平瓦	SO-2 埋土	(17.5)	(17.5)	—	6.9	凹面：布目・糸切り痕 凸面：縦位繩叩き 頸面：無文・横位繩叩き・ナデ	3-10
2	G-24	均整唐草文軒平瓦	SO-2 埋土	(18.4)	(13.2)	—	6.4	凹面：布目・糸切り痕 凸面：縦位繩叩き 頸面：無文・横位繩叩き・ナデ	3-8
3	G-26	均整唐草文軒平瓦	SO-2 埋土	(14.0)	(15.4)	—	6.0	凹面：布目・糸切り痕 凸面：縦位繩叩き 頸面：無文・横位繩叩き・ナデ	3-11
4	G-29	均整唐草文軒平瓦	SO-2 埋土	(17.5)	(18.7)	—	6.4	凹面：布目・糸切り痕 凸面：縦位繩叩き 頸面：鋸歯文・横位繩叩き	3-9

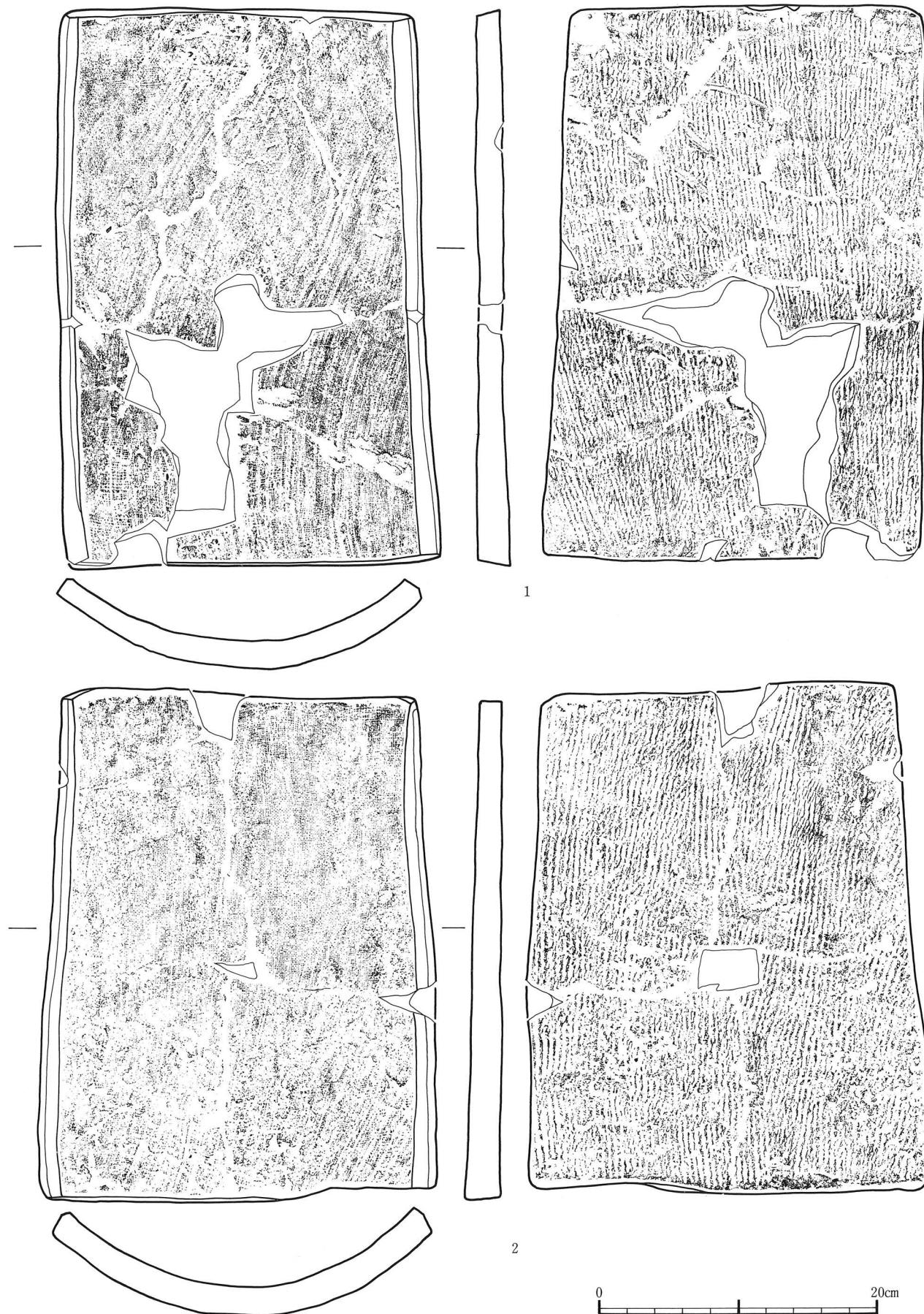
第11図 SO-2 窯跡出土遺物 (2)

I 神明社窯跡（第2次調査）



第12図 SO-2 窯跡出土遺物 (3)

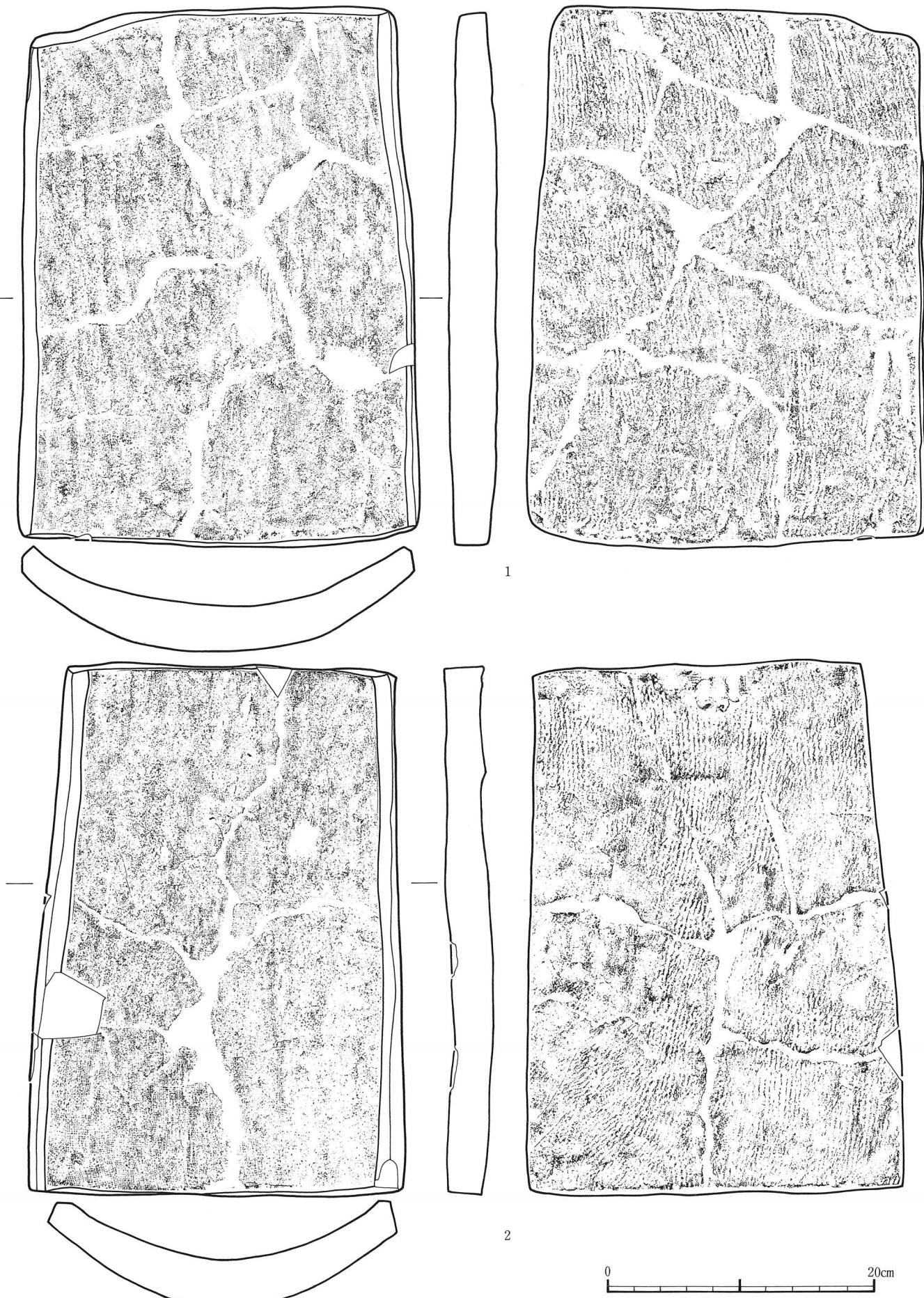
番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	最大長	広端幅	狭端厚	厚さ	特徴	写真図版
1	G-11	平瓦	SO-2 3層	40.3	29.4	24.8	3.2	凹面：布目・糸切り痕 凸面：縦位繩叩き	4-3
2	G-12	平瓦	SO-2 3層	39.8	28.2	24.0	2.8	凹面：布目・糸切り痕 凸面：縦位繩叩き	4-4



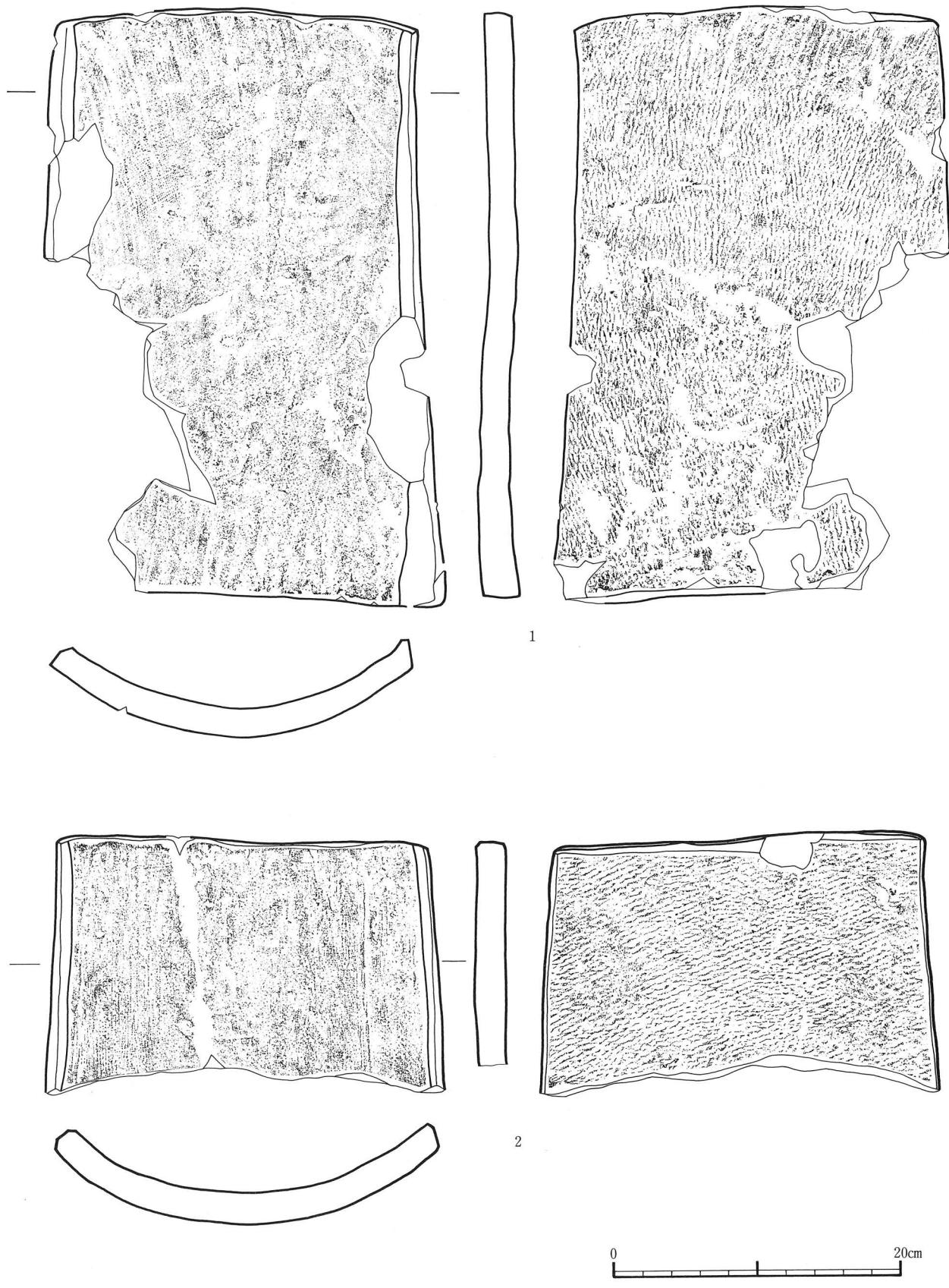
第13図 SO-2 窯跡出土遺物 (4)

番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	最大長	広端幅	狭端厚	厚さ	特 徴	写真図版
1	G-14	平瓦	SO-2 3層	40.1	26.7	25.0	2.5	凹面：布目・糸切り痕 凸面：縦位繩叩き	4-5
2	G-19	平瓦	SO-2 3層	36.8	28.5	25.3	2.5	凹面：布目・糸切り痕 凸面：縦位繩叩き	4-6

I 神明社窯跡（第2次調査）



番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	最大長	広端幅	狭端厚	厚さ	特	微	写真図版
1	G-60	平瓦	SO-2 埋土	40.8	29.8	27.2	3.7	凹面：布目 凸面：縦位繩叩き、凹形台突出痕		4-7
2	G-61	平瓦	SO-2 埋土	40.2	28.0	24.5	3.4	凹面：布目・ナデ 凸面：縦位繩叩き		4-8



第15図 SO-2 窯跡出土遺物 (6)

番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	最大長	広端幅	狭端厚	厚さ	特 徴	写真図版
1	G-13	平瓦	SO-2 埋土	40.7	—	25.2	2.5	凹面：布目・糸切り痕 凸面：縦位繩叩き	
2	G-16	平瓦	SO-2 埋土	(17.5)	—	25.7	2.2	凹面：布目・スジ状の凸型台圧痕 凸面：縦位繩叩き→横位繩叩き	5-7

I 神明社窯跡（第2次調査）

100cm、中央部付近で徐々に狭くなり幅約75cm、奥壁付近で幅約60cmを測る。奥壁はやや丸味を帯び、床面より80°で立ち上がる。

壁及び床面は非常に堅く、還元焰焼成により灰色に変色しているが、一部剥落して赤褐色を呈している部分もある。床面の枚数は1枚だけである。SO-1窯跡同様壁面・床面については熱変化のため次第に赤褐色・橙色となっている。

〔遺物の出土状態〕 SO-1窯跡同様に窯中より多数の瓦類が廃棄された状態で出土している。主に平瓦の破片が多く、焼成されたものもあるが焼台として使用された施設瓦も出土している。宝相花文軒丸瓦は焼成部中央付近で出土しており、細弁蓮華文軒丸瓦は崖部に近い焼成部の床面直上から出土している。

〔出土遺物〕 窯中より出土した遺物は、軒丸瓦3点、軒平瓦11点、丸瓦30点、平瓦627点の合計671点が出土し、出土した瓦類の62.4%を占めている。軒丸瓦は宝相花文軒丸瓦1点、細弁蓮華文軒丸瓦1点、瓦当文様の不明な軒丸瓦1点が出土し、宝相花文・細弁蓮華文軒丸瓦は瓦当文様が明らかなものである。軒平瓦は単弧文軒平瓦3点、重弧文軒平瓦3点、均整唐草文軒平瓦5点がある。

(2) 土坑

SK-1 土坑（第16図）

SD-1溝跡の北側に位置し、長軸105cm、短軸88cmの橢円形を呈する土坑で、断面形は舟底形を呈し、深さ約15cmを測る。堆積土は焼土・炭化物が多量に混入され、4層に細分される。

(3) 溝跡

SD-1溝跡（第16・17図）

SO-2窯跡とSK-1土坑の間で検出され、調査区平坦部から傾斜面にかけて東西方向に走る溝跡である。上幅40~45cm、残存長3.7m、深さ約10cmを測る。溝跡は直線上に延び、傾斜面で北側に屈曲して止まっている。溝跡長軸の主軸方向はE-8°-Sである。堆積土は1層であり、暗灰黄色粘土である。遺物は検出面及び堆積土より平瓦が2点出土している。第17図1は凹面に「物」の刻印が押印されている。

(4) その他の遺構

SX-1 その他の遺構（第16・18図）

調査区平坦部で検出され、SO-1・2窯跡の西側、SD-1溝跡の南側に位置している。長軸4.8m以上、短軸2.3m以上の隅丸方形状を呈するものと考えられるが、調査区外へと延びているため不明である。

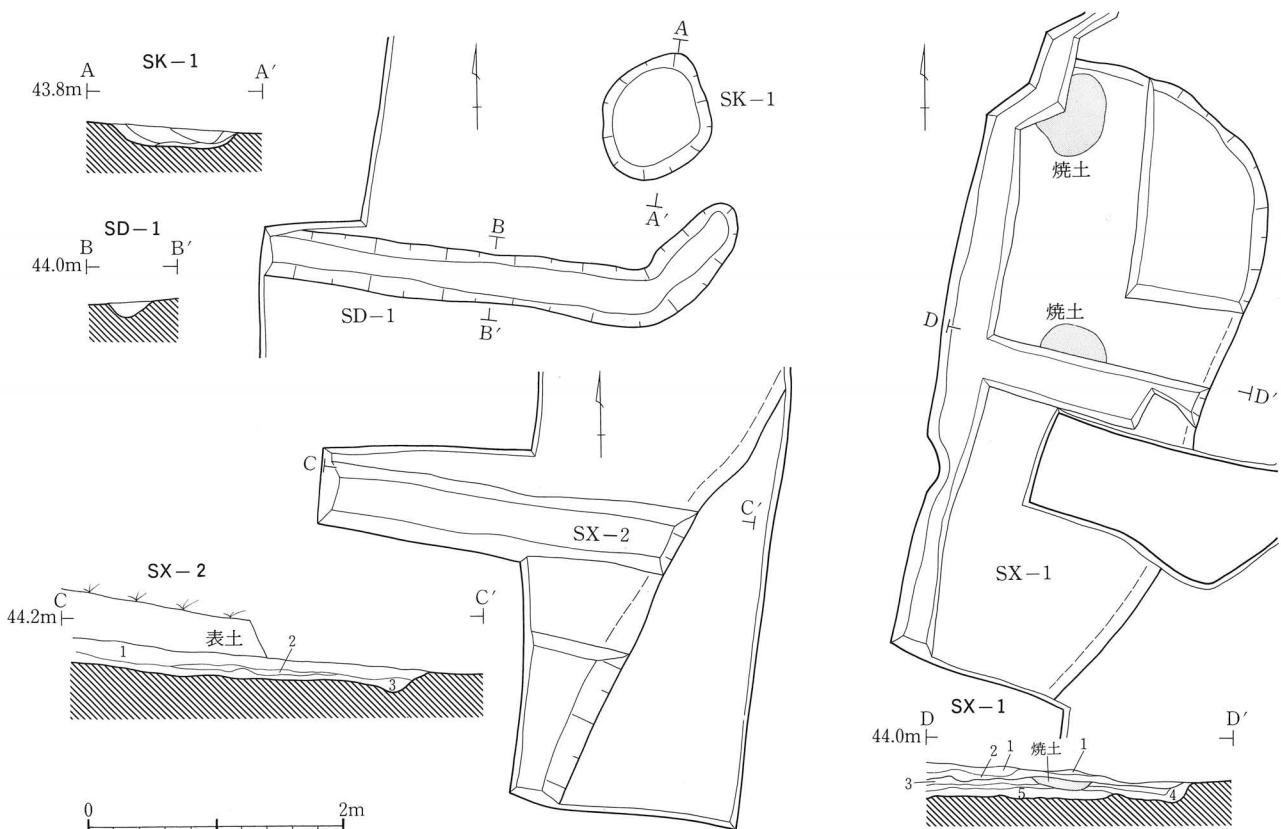
堆積土は4層に分けられ、焼土、白色粘土が多く入る層で、瓦を製作する工房跡あるいは作業場などの施設と考えられる。遺物としては重弁蓮華文軒丸瓦、単弧文軒平瓦、平瓦、須恵器壊が出土している。

SX-2 その他の遺構（第16図）

調査区平坦部で検出された遺構で、その規模は長軸4m以上、短軸2.9m以上の方形を呈すると考えられるが、部分調査のため全体は不明である。堆積土は5層に分けられ、白色粘土が入っている。遺物としては「伊」の刻印された丸瓦、平瓦、須恵器甕片、土師器壊片が出土している。

7 出土遺物について

調査により出土した遺物は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の瓦類と須恵器、土師器がある。瓦類は軒丸瓦9点、



遺構名	層位	土色	土質	その他の
SK-1	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物、焼土を混入
	2	10YR5/6 黄褐色	シルト質粘土	炭化物、焼土をまばらに混入
	3a	7.5YR4/3 褐色	シルト質粘土	焼土を多量に混入
	3b	7.5YR4/3 褐色	シルト質粘土	炭化物、焼土を多量に混入
	4	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	
SD-1	1	2.5YR4/2 暗灰黄色	粘土	明黄褐色粘土の小ブロックを混入
SX-1	1	10YR6/6 明黄褐色	シルト質粘土	炭化物、焼土をまばらに混入
	2	2.5Y7/4 浅黄色	粘土	
	3	10YR4/6 褐色	シルト質粘土	浅黄色粘土の小ブロックを混入、単弧文軒平瓦出土
	4	10YR4/4 褐色	粘土	炭化物を縞状に混入
	5	2.5Y7/4 浅黄色	粘土	
SX-2	1	2.5Y7/4 浅黄色	粘土	炭化物、焼土を縞状に混入、暗灰黄色粘土のブロックを混入
	2	10YR6/6 明黄褐色	シルト質粘土	炭化物、焼土をまばらに混入
	3	2.5Y7/2 灰黄色	粘土	明黄褐色シルト質粘土をまばらに混入

第16図 土坑・溝跡・その他の遺構実測図

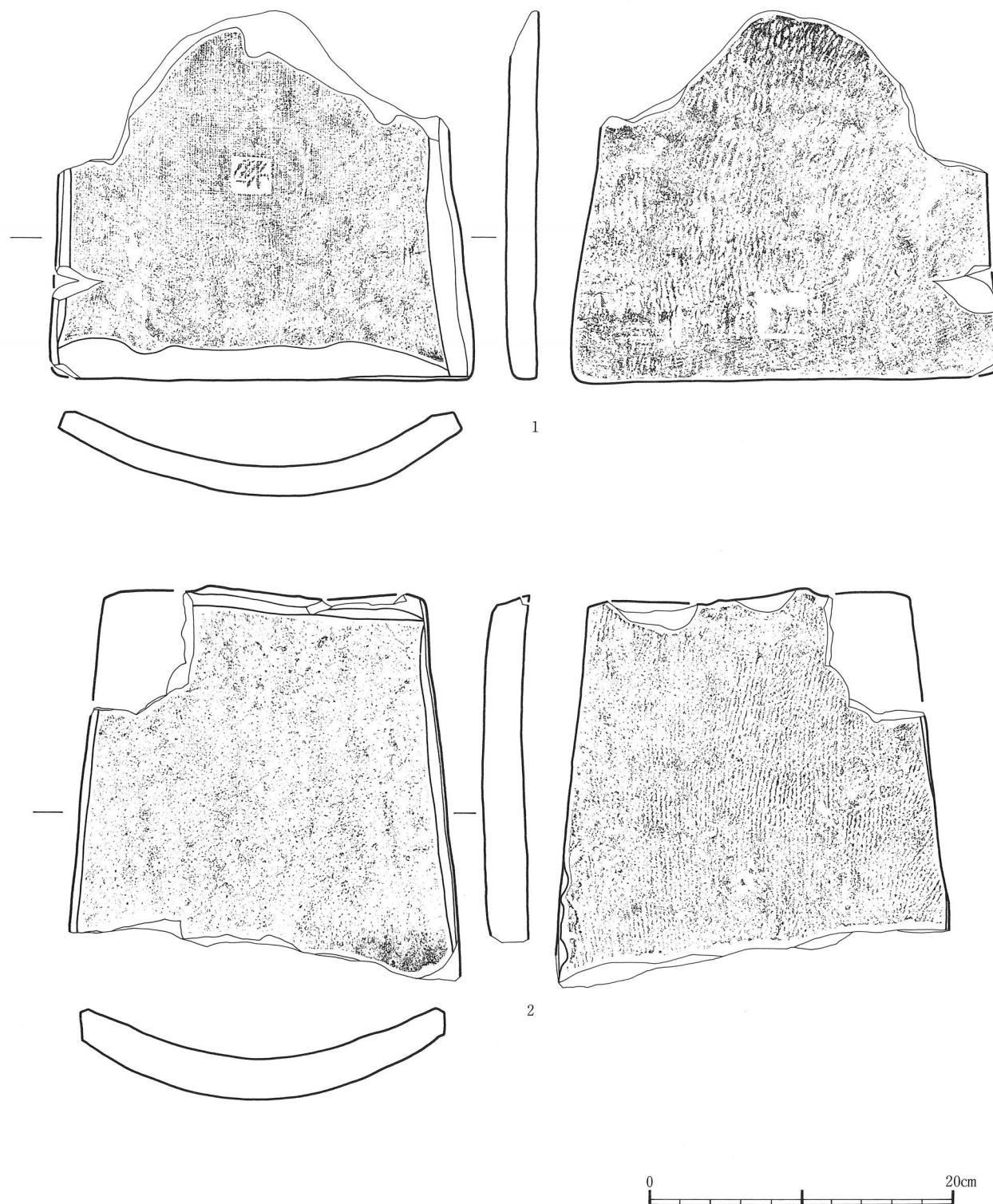
軒平瓦17点、丸瓦43点、平瓦1,006点の合計1,075点が出土している。そのうち平瓦の出土量が圧倒的に多く、全体の93.6%を占めている。これらの瓦類は主にSO-1・2窯跡から出土しており、出土総数969点で全体の90.1%を占めている。

軒丸瓦

軒丸瓦は9点が出土し、瓦類全体の0.8%を占めている。ほとんど小破片のものであるが、SO-2窯跡出土の1点が唯一完形品である。瓦当面の文様により3類に分類される。

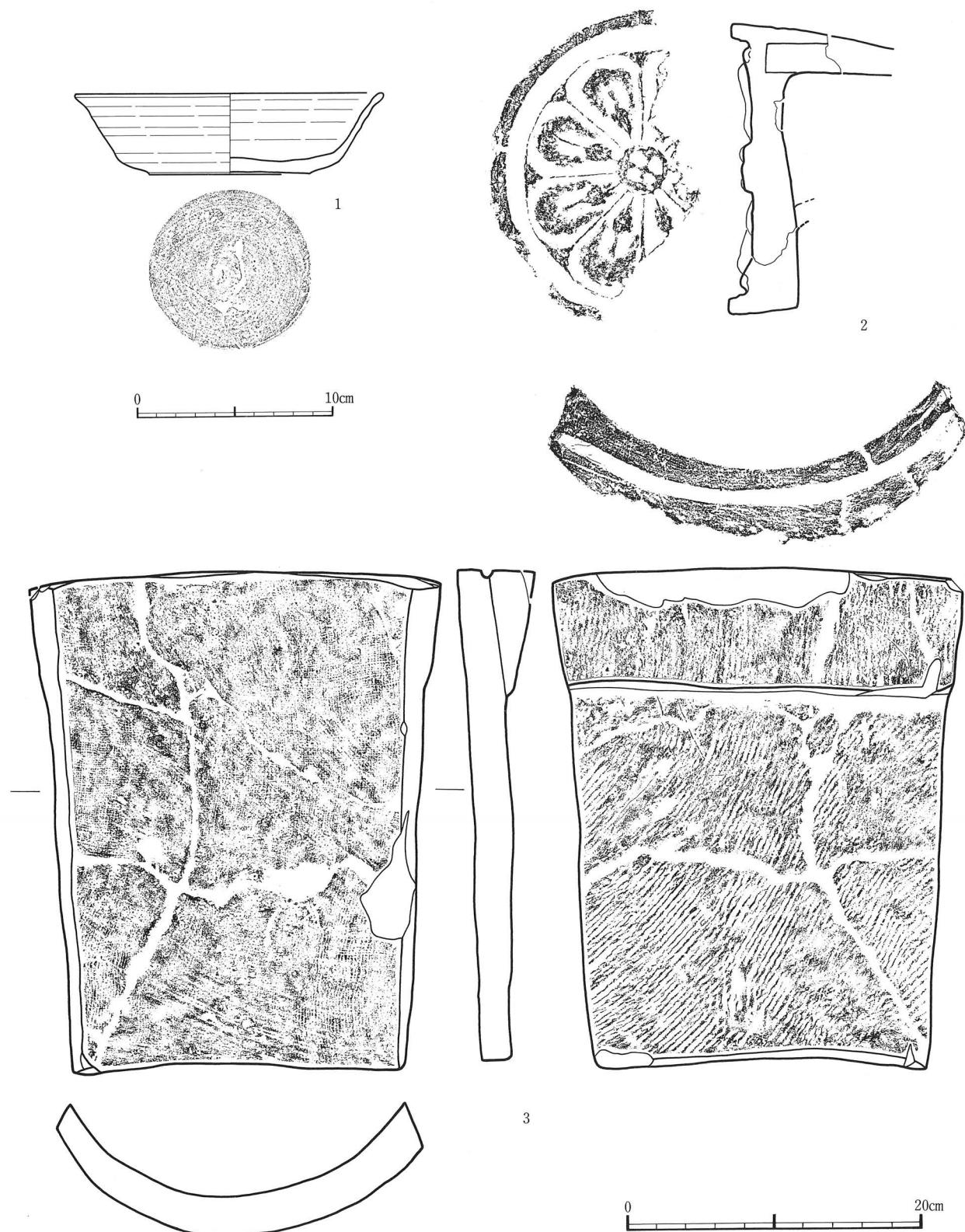
軒丸瓦 I類

8葉重弁蓮華文軒丸瓦である。SX-1 その他の遺構・SD-1溝跡からそれぞれ1点ずつ出土している。2点のうち比較的瓦当文様が明らかなのはSX-1 その他の遺構確認面出土のもの（第18図2）で、瓦当径は推定19.8cm、内区径が推定16.4cmで、中房は円板状を呈し、周辺蓮子は円形を呈する。周辺蓮子間の区画はなく、その方向は蓮弁



第17図 SD-1 溝跡出土遺物

の方向を指している。蓮弁、小蓮弁はやや丸味を帯び、弁の中央線は明瞭である。間弁は銀杏形の端部と隆線部からなり、蓮弁を包むように連なっている。多賀城跡で分類されている重弁蓮華文軒丸瓦222に該当するもので多賀城II期に位置づけられる。



番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	器 高	口 径	底 径	特 微				写真図版
1	E-1	須恵器 壊	SX-1 埋土	4.2	15.8	8.2	内外面：ロクロナデ	底部：回転ヘラケズリ			5-1
番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	瓦当径	内区径	中房径	瓦当厚	最大長	特	微	写真図版
2	F-5	重弁蓮華文軒丸瓦	SX-1 確認面	(19.8)	(16.4)	3.4	4.7	-	8葉重弁蓮華文		5-2
番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	最大長	広端幅	狭端幅	厚さ		特	微	写真図版
3	G-35	単弧文軒平瓦	SX-1 3層	33.4	27.9	22.4	5.2	凹面：布目・糸切り痕	凸面：縦位繩叩き	額面：無文・縦位繩叩き	5-3

第18図 SX-1 その他の遺構出土遺物

軒丸瓦II類

12葉細弁蓮華文軒丸瓦でSO-2窯跡床面直上出土の1点がある（第10図2）。瓦当面の直径は推定21cmで、蓮弁の外側は一重の圏線が巡り、蓮弁は細長いハート形で子葉は先端が尖っている。間弁は銀杏形に隆起する端部と隆線からなる。中房は細い二重の圏線で画され、内側は0+3の円形蓮子である。この軒丸瓦II類は多賀城跡で分類されている細弁蓮華文軒丸瓦311に該当するもので多賀城III期に位置づけられている。

軒丸瓦III類

宝相花文軒丸瓦で、SO-1・2窯跡より3点が出土している。そのうち2点は小破片であるが、圏線と蝙蝠状隆線がみられ、宝相花文軒丸瓦と判断された。

瓦当面の直径18.5cmの8葉宝相花文軒丸瓦（第10図1）で、花弁の外側は一重の圏線が巡り、花弁は葛葉状のものである。花弁は鋭く端部で稜線が明瞭である。間弁は蝙蝠状の隆線となり圏線と接続している。中房は細い一重の圏線で画され、中心に1個の円形蓮子、その外側に2個1対の4葉の花弁がある。丸瓦部は瓦当面との接続は不明であるが、粘土紐巻き作りの有段丸瓦が使用されている。凸面は縦位の縄叩き後スリ消しされており、凹面は細かい布目が施されている。

この軒丸瓦III類は多賀城跡、陸奥国分寺跡・同尼寺跡からは出土しておらず、これまでの出土例は燕沢遺跡から4点が出土しているのみであり、今回窯跡より出土した初めての例である。

軒平瓦

軒平瓦はSO-1・2窯跡、SD-1溝跡、SX-1その他の遺構、基本層より17点が出土し、瓦類全体の1.6%を占めている。瓦当文様の施文方法には、手描きによる施文と範による施文の二種があり、その瓦当文様の種類によって4類に分類される。

軒平瓦I類

瓦当面にヘラ描きあるいは半裁竹管状の工具で施文された単弧文軒平瓦であり、SO-2窯跡、SD-1溝跡、SX-1その他の遺構、基本層より6点が出土している。SO-2窯跡からは3点が出土しているが、すべて破片である。SX-1その他の遺構出土のものが唯一完形品である。

いずれも頸部を形成しており、頸面は無文のものである。頸部の断面形は三角形を呈し、平瓦との境はナデ調整されている。頸部の接合方法としては平瓦凸面に2本1単位の斜方向のヘラキザミを施すものが認められており（第20図2）、縄を巻いた原体で叩き締めている。頸面の叩きには、縦位の縄叩きのもの（第18図3）、縦位の縄叩き後横位の縄叩きのもの（第10図3）の二種がある。

軒平瓦I類は多賀城II期に位置づけられており、重圈文軒丸瓦とセットとなる。神明社窯跡に包括されているA地点の蟹沢中窯跡からセットで出土している。

軒平瓦II類

瓦当面にヘラ描きあるいは半裁竹管状の工具で施文された重弧文軒平瓦であり、SO-2窯跡より3点出土している。すべて破片であり、完形のものはない。

II a類：重弧文の両端部が下方へ屈曲しているもの（第10図5）

II b類：重弧文の両端部が屈曲しないもの（第10図4）

いずれも頸部を形成し、頸面は半裁竹管状の工具により鋸歯文、直線文が施文されている。頸部の断面形は三角形を呈し、平瓦との境はナデ調整される。頸面の叩きには縦位の縄叩きのもの、横位の縄叩きのもの（第10図4）、縄叩き後全面ナデ調整されるもの（第10図5）の三種がある。

II a類は多賀城跡で分類されている重弧文軒平瓦710に該当するもので多賀城III期に位置づけられている。II b

類については使用されている平瓦は一枚づくりのものであり、I期のものとは区別されるものと考えられる。

軒平瓦III類

範によって製作されたもので、瓦当文様が均整唐草文軒平瓦のものである。瓦当面に施文された均整唐草文の文様を区画する隆線の本数により二種類に細分される。

III a類：均整唐草文の外側を区画する区画線は上下・左右側端部とも2本のもの（第11図1）

III b類：均整唐草文の外側を区画する区画線は上下が1本、左右側端部が2本のもの（第5図2・3、第11図2～4）

III類は7点が出土しており、III a類が1点、III b類が6点である。SO-1窯跡からはIII b類が2点、SO-2窯跡からはIII a類1点、III b類が4点出土し、6点が図示されている。いずれも頸部を形成し、その断面形は三角形を呈している。

頸面の文様については、III a類が無文であり、平瓦との接合部分はナデ調整される。III b類は、無文のものと半裁竹管状の工具により幅の広い鋸歯文・直線文が施文されるものとがある。前者が4点（第5図3、第11図2・3）、後者が2点（第5図2、第11図4）出土している。頸面の叩きは、縦位の繩叩き後に横位の繩叩きされるもの、縦位の繩叩きのものとがある。頸部の接合方法は、平瓦凸面に斜格子のヘラキザミを施して接合し、繩を巻いた原体で叩き締めているものが出土している。

III a類は多賀城跡で分類されている均整唐草文軒平瓦720に該当するものである。またIII b類も同様に均整唐草文軒平瓦721Bに該当し、いずれも多賀城III期に位置づけられている。

軒平瓦IV類

範によって製作された偏行唐草文軒平瓦の破片が基本層より僅か1点出土している。平瓦部・頸部はなく瓦当部のみの小破片であり、右から左の方向へ展開する陽刻の偏行唐草文軒平瓦である。唐草文の上下を画するように細い隆線で結ばれた珠文が配されている。瓦当部は範に入れて製作し平瓦部と接合しているもので、瓦当部が平瓦部と剥がれたものである。接合方法は瓦当部接合面にヘラキザミ等は観察されない。

丸瓦

丸瓦は43点出土し、瓦類全体の4.0%を占めている。SO-1・2窯跡より合計41点が出土している。粘土紐巻きづくりの有段丸瓦であり、凸面は縦位・斜方向の繩叩き後スリ消しされるものがほとんどで、凹面は粘土紐巻きの痕跡、布目痕、ヘラケズリ・ナデ調整が観察される。

平瓦

平瓦は総数1,006点と最も多く出土し、瓦類全体の93.6%を占めている。これらの平瓦は主にSO-1・2窯跡から出土しており、その出土量はSO-1窯跡が272点、SO-2窯跡が627点で、両窯跡出土のものが平瓦全体の89.4%を占める899点出土している。

平瓦の大部分は破片であり、焼台として使用されているものは、歪みが著しく、また、窯壁などが溶けて何枚も接合した状態で出土しているものもある。

平瓦は完形に近いもの7点を含めて合計51点が登録されている。中には平瓦を製作し、ヘラによる切り込みを入れて割った後に焼成しているもの等も10点含んでいる。

平瓦の製作は一枚づくりのもので、一枚の大きさは、長さが35～43.4cm、広端幅が26.7～29.8cm、狭端幅が21.2～28.7cmを測る。平面形は長方形に近いものと台形に近いものとがあり、断面形は円弧形を呈する。これらの平瓦は、長さが測定された16点中10点が38.5～40.8cmの間に集中し、また広端幅も11点中8点が28.0～29.8cmに、

狭端幅が24点中21点が23.5~27.2cmの間にそれぞれ集中している。

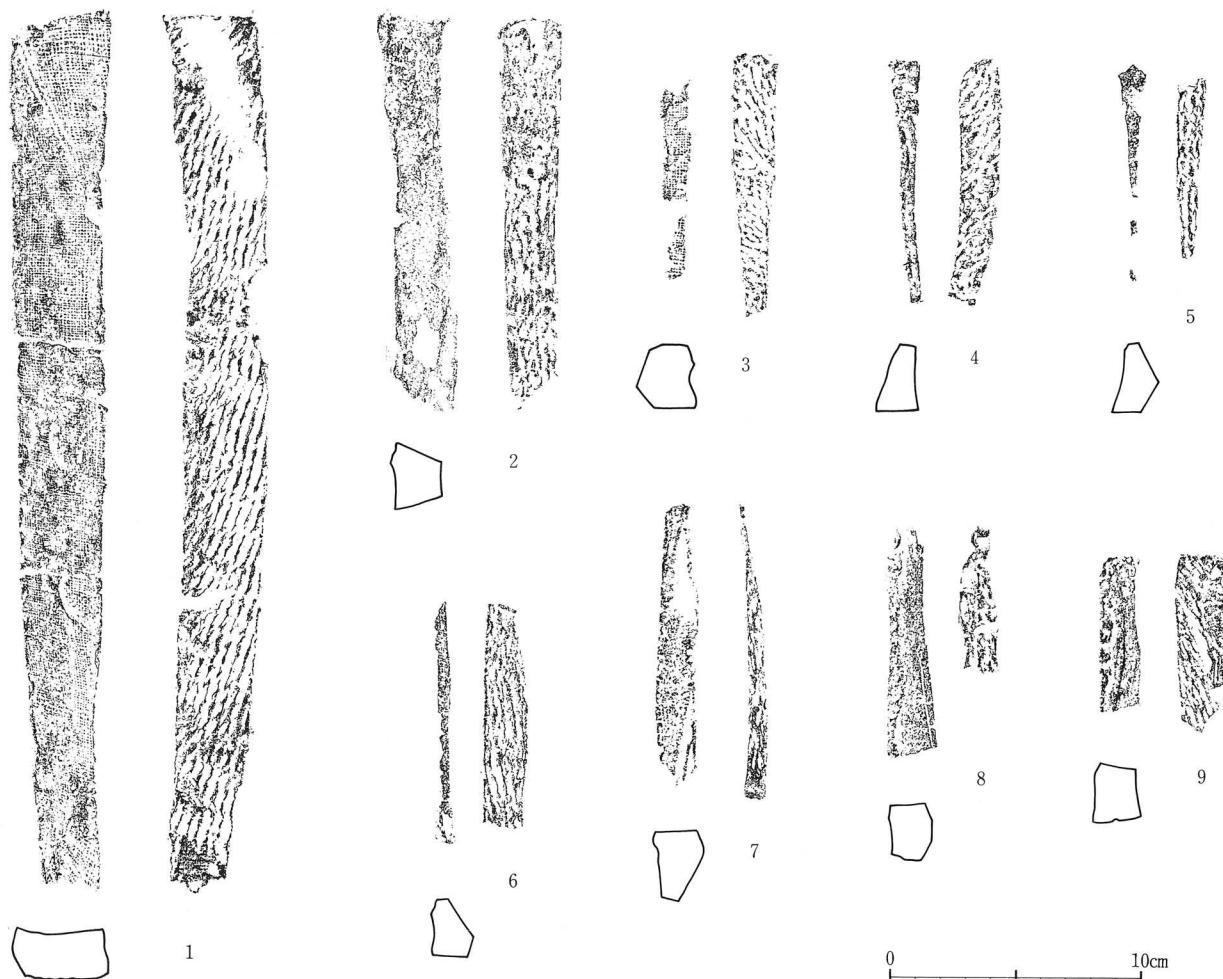
平瓦の凹面には布目痕、糸切り痕、側面・小口面に見られるヘラケズリ・ナデ調整などの2次調整、凸面には縄叩き痕、凹型台側端圧痕、凹型台突出圧痕などの痕跡が観察される。

凹面の製作痕・調整痕

布目痕：凸型台の上にほぼ全体に布を敷いて製作されており、平瓦凹面の全体に布目痕が観察されている。布目痕は1cm四方に約11~12本と細かい布目のもの、同様に1cm四方に約6~7本と中位の布目のもの、1cm四方に4本と粗い布目のものがある。出土した平瓦は細かい布目が圧倒的に多く出土しているが、第7図2のように粗い布目のものもある。また、細かい布目と粗い布目の二種類が認められるもの（第8図1・2）もある。

糸切り痕：登録された平瓦44点中26点の平瓦凹面に観察され、糸切りの方向は右上部から左下部にかけて反時計まわりのもの6点、同方向で時計まわりのもの8点、左上部から右下部にかけて時計まわりのもの4点、同方向で反時計まわりのもの8点がある。

凸型台圧痕：凹面の痕跡として布目の他に、布を敷かずにそのまま凸型台に乗せて凸面を2次叩きした際に凹面



番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	最大長	最大幅	厚さ	特徴	写真図版
1	G-43	切断調整平瓦	SO-2 埋土	35.1	4.3	2.5	凹面：布目・糸切り痕 凸面：縦位縄叩き 凹面よりヘラで切る	5-8
2	G-44	切断調整平瓦	SO-2 3層	16.2	2.9	2.7	凹面：縦位縄叩き 凸面よりヘラで切る	5-12
3	G-45	切断調整平瓦	SO-2 埋土	10.7	2.5	2.5	凹面：布目 凸面：斜方向縄叩き 凸面よりヘラで切る	5-10
4	G-46	切断調整平瓦	SO-2 3層	10.4	1.8	2.8	凹面：布目 凸面：斜方向縄叩き 凸面よりヘラで切る	5-14
5	G-47	切断調整平瓦	SO-2 3層	8.7	1.4	2.8	凹面：縦位縄叩き 凸面よりヘラで切る	5-15
6	G-48	切断調整平瓦	SO-2 埋土	10.6	1.9	2.4	凹面：布目 凸面：縦位縄叩き 凸面よりヘラで切る	5-9
7	G-49	切断調整平瓦	SO-2 3層	12.4	2.0	2.6	凹面：布目・糸切り痕 凸面：縦位縄叩き 凸面よりヘラで切る	5-13
8	G-50	切断調整平瓦	SO-2 3層	7.1	2.4	2.3	凸面：縦位縄叩き 凸面よりヘラで切る	
9	G-51	切断調整平瓦	SO-2 1層	7.3	2.1	2.3	凸面：縦位縄叩き 凸面よりヘラで切る	

第19図 切断調整瓦

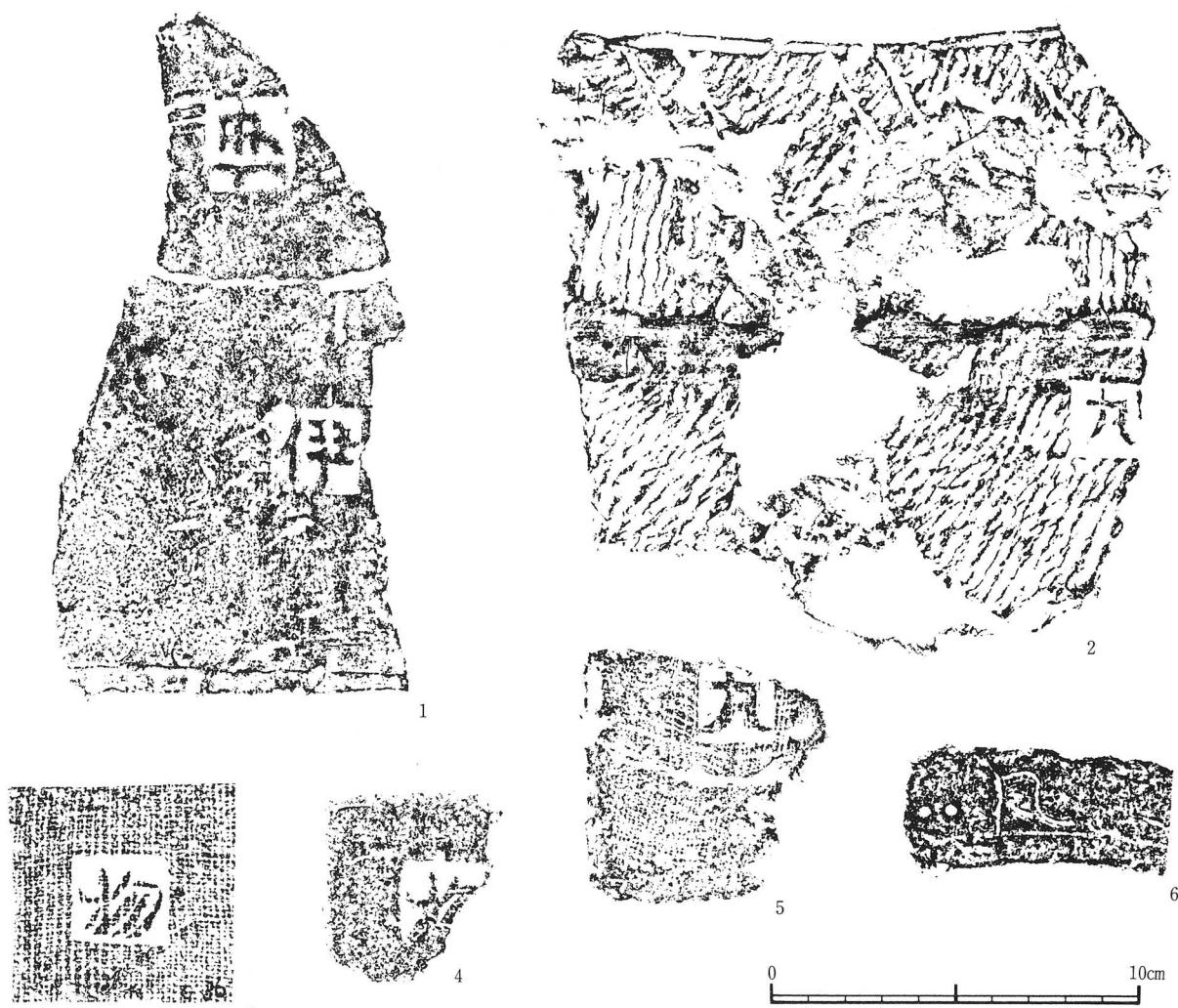
に残る木目状圧痕が観察されているもの（第15図2）が出土している。

側面・小口面の面取り：側面の面取りは殆ど両端に認められ、ヘラケズリされている。ヘラケズリの方向は広端部から狭端部、その逆の方向に行われている。側面部にのみ面取りされるものが登録資料44点中38点出土し、また小口面に面取りされるものも8点出土している。

凸面の製作痕・調整痕

叩き目：すべて縦位及び斜位の繩叩き痕が施されている。繩叩きはL撚糸を巻いた原体で直線上に叩き締めたものとやや弧を描いて叩き締めたものがある。弧を描いたものは、時計まわりのものと反時計まわりのものの両者がある。その他叩きが縦位の1次叩き後横位の2次叩きされているもの（第15図2）もある。

凹型台圧痕：凸面の側端部には、平瓦の凹面の2次調整等により凹型台の圧痕が観察されているものが登録資料中9点出土している。また、凹型台突出部圧痕のあるもの（第14図1、第17図1）もある。また平瓦の中には、凹型台側端圧痕や突出部圧痕が観察されないが、凸面の繩叩き目がつぶれているものが多く見られることから凹型台を使用して調整されているものと考えられる。



番号	登録番号	種別・器種	出土地点・層位	文 字	部位	特 徴	写真図版
1	F-2	丸瓦	SX-2 確認面	刻印「伊」2ヶ所	凸面	凸面：繩叩き後ナデ 四面：布目	6-1・2
2	G-27	単弧文軒平瓦	SO-2 埋土	刻印「丸」	凸面	四面：布目 凸面：縦位繩叩き 領面：剥離している ヘラキザミあり	6-3
3	G-36	平瓦	SD-1 埋土	刻印「物」	凹面	四面：布目 凸面：縦位繩叩き	6-5
4	G-52	平瓦	SO-2 埋土	刻印「物」	凹面	四面：布目・ナデ 凸面：縦位繩叩き	6-6
5	G-38	平瓦	SX-1 確認面	刻印「丸」	凹面	四面：布目 凸面：縦位繩叩き	6-4
6	G-4	平瓦	SO-1 埋土	ヘラ書き「瓦」	小口面	四面：布目・ナデ 凸面：縦位繩叩き	6-7

第20図 文字瓦

切断調整瓦

平瓦を乾燥段階で側端部をヘラで切り取った後に焼成したもの（第19図4）と、平瓦を製作し、ヘラで切り込みを入れて割った後に焼成したもの（第19図1～3、5～9）とがあり、すべてSO-2窯跡から10点が出土している。完形のものがないため大きさは不明であるが、最も大きいものは長さ35.1cmを測る。割った後焼成したものは凸面側から切り込みを入れたもの1点（第19図1）と凹面側から切り込みを入れたもの7点（第19図2・3・5～9）が出土している。これらの切断調整瓦はすべて平瓦の側端部を選んで切断されているものであり、意識的に焼成されたものである。今回出土した切断調整瓦は窯跡において必要として焼成されたものと考えられ、瓦を焼成するために焼台あるいは窯道具として使用されたものと推察されるが、他の類例を知り得ないため今後の課題としておきたい。

文字瓦

文字のある瓦は、刻印のものとヘラで書いたものの二種がある。

刻印文字瓦：「伊」・「丸」・「物」の三種類の刻印文字瓦が出土し、5点の瓦に6文字が押印されている。刻印はほぼ正方形を呈し、すべて文字部分が陽刻で輪郭線のないものである（第20図1～5）。1は丸瓦凸面に「伊」の文字が2ヶ所に押印されており、同一の刻印を押印している。2は単弧文軒平瓦の凸面に押印された「丸」の刻印であり、3も同様の「丸」の刻印が平瓦凹面に押印されている。4・5は「物」の刻印が平瓦凹面に押印されている。

ヘラ書き文字瓦：僅か1点が出土している（第20図6）。6は平瓦の小口面に細いヘラで書かれたもので、「瓦」の崩し字と考えられる。多賀城政府跡図版のPL.100-3の文字「瓦瓦」と類似している。

須恵器

壺・蓋・甕破片などが出土している。

壺：SX-1その他の遺構より1点（第18図1）が出土しているだけである。ロクロ調整され、底部の切り離し技法は不明で、底部全面に回転ヘラケズリ調整されている。

蓋：SO-1窯跡出土の小破片1点があるだけで、つまみはなく天井部から口縁部にかけての破片である（第5図4）。天井部は平坦で、口縁部が下方に折り返されて端部は鋭い。

その他、SX-2その他の遺構1層から甕体部片4点とSO-1窯跡・SD-1溝跡検出面の基本層より甕の口縁部・体部片が25点出土しただけである。

土師器

調査区より土師器壺の小破片が9点出土しただけであり、非ロクロの内面黒色処理されたものである。

8 調査成果とまとめ

(I) 窯跡出土の遺物の年代

2基の窯跡から出土した瓦類は以下のとおりである。

SO-1窯跡：軒丸瓦III類、軒平瓦III b類、丸瓦、平瓦、須恵器蓋

SO-2窯跡：軒丸瓦II類、軒丸瓦III類、軒平瓦 I・II a・II b・III a・III b類、丸瓦、平瓦

2基の窯跡からは文様瓦が多く出土しており、多賀城跡で分類されている細弁蓮華文軒丸瓦311、均整唐草文軒平瓦720・721A、二重弧文軒平瓦710などが出土している。多賀城II期に位置づけられている単弧文軒平瓦640を除けば、

その殆どが多賀城III期に位置づけられる軒丸瓦・軒平瓦であり、それ以外では軒丸瓦III類の宝相花文軒丸瓦が出土している。この宝相花文軒丸瓦はこれまで多賀城跡や陸奥国分寺跡・同尼寺跡などから出土しておらず、僅かに燕沢遺跡で4例が知られているにすぎない。宝相花文軒丸瓦については、貞觀11年（869年）の陸奥国大地震により大量の修復瓦が必要とされた復興瓦であると言われており、多賀城IV期に位置づけられている。しかし今回出土した軒丸瓦III類の宝相花文軒丸瓦は、すでに工藤雅樹氏が指摘しているように多賀城跡や陸奥国分寺跡で出土している宝相花文軒丸瓦の素形と考えられており、これまでの重弁蓮華文軒丸瓦等の系統を受け継がない新羅系の軒丸瓦としている。

今回出土した宝相花文軒丸瓦は最終段階に焼成されたものと考えられ、軒丸瓦II類の細弁蓮華文軒丸瓦や軒平瓦IIa類の重弧文軒平瓦、同IIIa・b類の均整唐草文軒平瓦と共に出土している。これらの細弁蓮華文軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦等は、焼台として使用されたことも否定できないが、窯跡から宝相花文軒丸瓦と共に伴して出土したことを考えすれば大きな時間差があるとは考えがたく、あえて多賀城IV期に位置づけるよりはIII期の中に位置づけることも可能かと考えられる。また、陸奥国大地震による復興瓦とされる陸奥国分寺跡や多賀城跡出土の宝相花文軒丸瓦には、軒丸瓦III類の宝相花文軒丸瓦は含まれていないことも復興瓦よりも先行することを予想させる。これらのことから、今回出土軒丸瓦III類の宝相花文軒丸瓦については、多賀城IV期か否か問題はあるものの、一応ここでは多賀城III期の時期に位置づけておくこととした。

以上のことからSO-1・2窯跡から出土した瓦の年代については、多賀城II期の単弧文軒平瓦片のほかはIII期に位置づけられ、おおむね8世紀末から9世紀後半の時期と考えられる。

(2) 遺構

・窯跡

調査により発見された窯跡は、東側斜面に2基が並んで検出され、いずれも地山を掘り下げてスサ入り粘土で天井・側壁を構築した半地下式無段窯で、多賀城III期の奈良時代末から平安時代前半頃に位置づけられる。

2基の窯跡は焼成部から奥壁にかけて残存し、燃焼部から灰原にかけてはすでに削平されている。窯跡の規模は残存長が約4.9m、幅が60~100cmであり、奥壁は72~80°の傾斜で立ち上がり煙道部となるものと考えられる。床面の傾斜角度はSO-1窯跡で17~18°、SO-2窯跡で20°である。床面の枚数は2基とも1枚であり、窯跡の操業期間は比較的短期間であると推定される。2基の窯跡からは、同じ種類の軒丸瓦・軒平瓦が出土しており、また平瓦には接合するものもあることから2基の窯跡は同時に操業したものと考えられる。

これまで台原・小田原窯跡群の中には、同様の構造をもつ窯跡が比較的多く調査されており、多賀城II期の瓦を焼成した杵江遺跡、多賀城III期の瓦を焼成した安養寺下窯跡、多賀城IV期の瓦を焼成した安養寺中囲窯跡・五本松窯跡などがある。

・その他の遺構

平坦部で2基の遺構が検出されたが、全体が調査されていないため不明な点が多い。平面形は隅丸方形・方形を呈するものと考えられ、白色粘土や焼土が多く入る堆積土で整地した層と考えられる。これらの遺構の性格については、瓦を製作する工房跡あるいは作業場として使用した施設と考えられる。SX-1 その他の遺構は出土した単弧文軒平瓦や須恵器壺より奈良時代後半の多賀城II期の時期に位置づけられる。

(3) まとめ

- ① 神明社窯跡は台原・小田原窯跡群の一支群であり、標高40~45mの斜面及び平坦面に立地する遺跡で、これまでの調査で神明社窯跡A地点に包括される蟹沢中窯跡から多賀城II期の半地下式ロストル付平窯、B地点の平

I 神明社窯跡（第2次調査）

坦部で多賀城II期からIII期の窯跡関連の瓦工人の工房跡あるいは住居とみられる堅穴住居跡、管理施設とみられる掘立柱建物跡等が検出されている。

- ② 今回の調査により、多賀城III期の半地下式無段窯2基、多賀城II期の工房跡あるいは作業場とみられるSX-1・2その他の遺構2基、時期不明の土坑1基、多賀城II～III期の溝跡1条が発見された。
- ③ 今回の調査により出土した遺物は、8葉重弁蓮華文軒丸瓦、12葉細弁蓮華文軒丸瓦、8葉宝相花文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、単弧文軒平瓦、均整唐草文軒平瓦2種類、偏行唐草文軒平瓦、平瓦、丸瓦、切断調整瓦、文字瓦などの瓦類の他、少量の須恵器、土師器がある。
- ④ 窯跡から出土した遺物は、多賀城II期の単弧文軒平瓦、多賀城III期の細弁蓮華文軒丸瓦311・重弧文軒平瓦710・均整唐草文軒平瓦720・721A、宝相花文軒丸瓦、平瓦、丸瓦、切断調整瓦、文字瓦、須恵器蓋があり、出土遺物より窯跡の年代は多賀城III期に位置づけられ、おおむね8世紀末から9世紀後半の時期と考えられる。
- ⑤ 軒丸瓦III類の宝相花文軒丸瓦はこれまで燕沢遺跡でしか出土していなかったが、今回窯跡から初めて出土し、共伴する遺物より多賀城III期に位置づけられると考えられる。
- ⑥ 今回の調査で発見された2基の窯跡で焼成された瓦類は、古代の多賀城や陸奥国分寺・尼寺に供給したものと考えられ、さらに本窯跡から東北東約3km離れた燕沢遺跡にも供給していることが明らかとなった。

引用・参考文献

- 伊東信雄 他 (1961) : 「陸奥国分寺跡」陸奥国分寺跡発掘調査委員会編 河北文化事業団
- 小川淳一 (1987) : 『五本松窯跡－都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第99集
- 木村浩二・青沼一民 (1983) : 「神明社窯跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第54集
- 工藤雅樹 (1965) : 「陸奥国分寺出土の宝相花文鏡瓦の製作年代について－東北地方における新羅系古瓦の出現－」『歴史考古』13
- 古窯跡研究会 (1972) : 「仙台市原町小田原蟹沢中瓦窯跡発掘調査報告書」研究報告第1冊
- 古窯跡研究会 (1973) : 「陸奥国宮窯跡群」研究報告第2冊
- 古窯跡研究会 (1976) : 「陸奥国宮窯跡群II」研究報告第4冊
- 古窯跡研究会 (1988) : 「陸奥国宮窯跡群V」研究報告第8冊
- 篠原信彦 (1993) : 「大蓮寺窯跡－第2・3次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第168集
- 仙台市教育委員会 (1973) : 「仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第6集
- 内藤政恒 (1939) : 「宮城県利府村春日瓦窯焼場大沢瓦窯址研究報告」東北帝国大学法学部奥羽史料調査部研究報告第1
- 内藤政恒 (1963～65) : 「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦（I）～(IV)」『歴史考古』9～13
- 長島榮一・熊谷裕行 (1995) : 「仙台平野の遺跡群 XIV－燕沢遺跡第8次調査－」仙台市文化財調査報告書第195集
- 原田良雄編 (1974) : 「内藤政恒先生蒐集－東北古瓦図録－」雄山閣
- 宮城県教育委員会・多賀城跡調査研究所 (1980) : 「多賀城跡 政府跡 図録編」
- 宮城県教育委員会・多賀城跡調査研究所 (1982) : 「多賀城跡 政府跡 本文編」
- 宮城県教育委員会・多賀城町 (1970) : 「多賀城跡調査報告 I－多賀城廃寺－」
- 結城慎一 (1981) : 「陸奥国宮窯跡群IV－仙台市安養寺下窯跡の検討」『研究報告書第6冊』古窯跡研究会
- 結城慎一・中富 洋 (1988) : 「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第116集
- 渡邊泰伸・結城慎一 (1980) : 「折江遺跡発掘調査報告書－造瓦所の調査－」仙台市文化財調査報告書第18集



1 調査前の状況（北から）



2 SO-1・2 窯跡検出状況（東から）



3 SO-1・2 窯跡遺物出土状況（東から）



4 SO-1・2 窯跡全景（東から）



5 SO-1 窯跡遺物出土状況（東から）



6 SO-1 窯跡遺物出土状況（西から）



7 SO-1 窯跡全景（東から）



8 SO-1 窯跡断面

図版1 調査前状況、SO-1・2 窯跡

I 神明社窯跡（第2次調査）



1 SO-2 窯跡遺物出土状況（東から）



2 SO-2 窯跡遺物出土状況（東から）



3 SO-2 窯跡全景（西から）



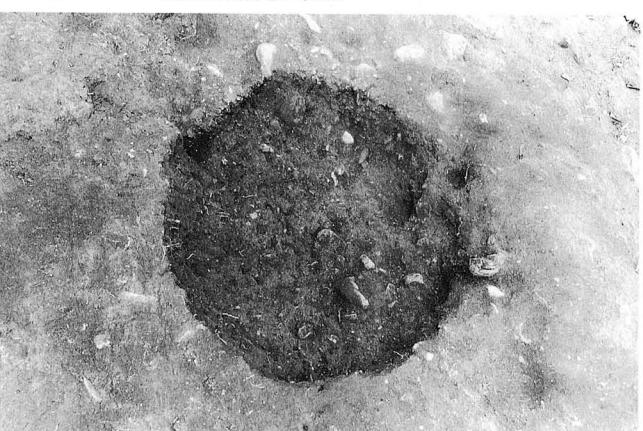
4 SO-2 窯跡断面



5 SO-2 窯跡遺物出土状況



6 SO-2 窯跡遺物出土状況

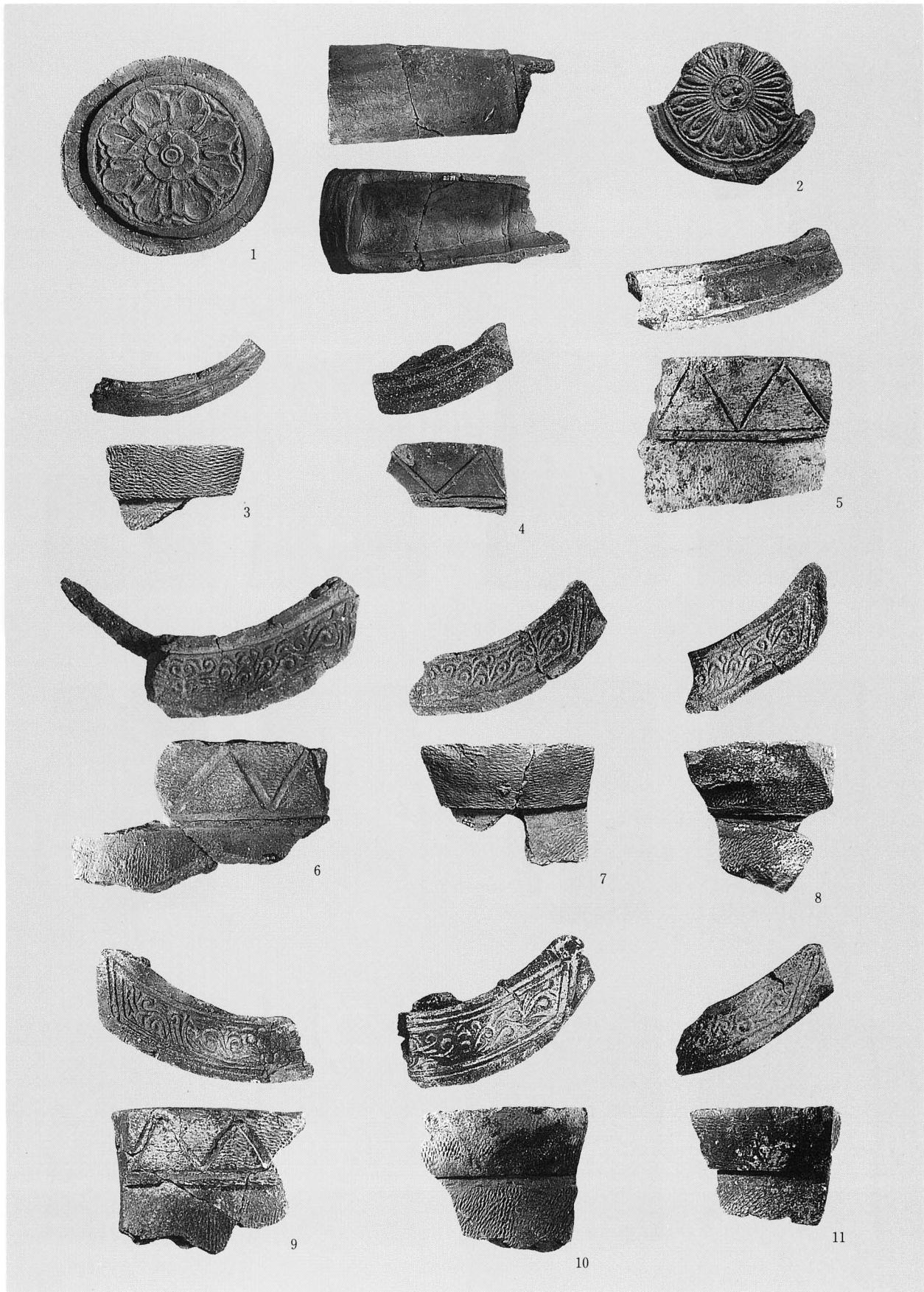


7 SK-1 土坑全景



8 SD-1 溝跡全景

図版2 SO-2 窯跡、SK-1 土坑、SD-1 溝跡



1：宝相花文軒丸瓦…SO-2
4・5：重弧文軒平瓦…SO-2

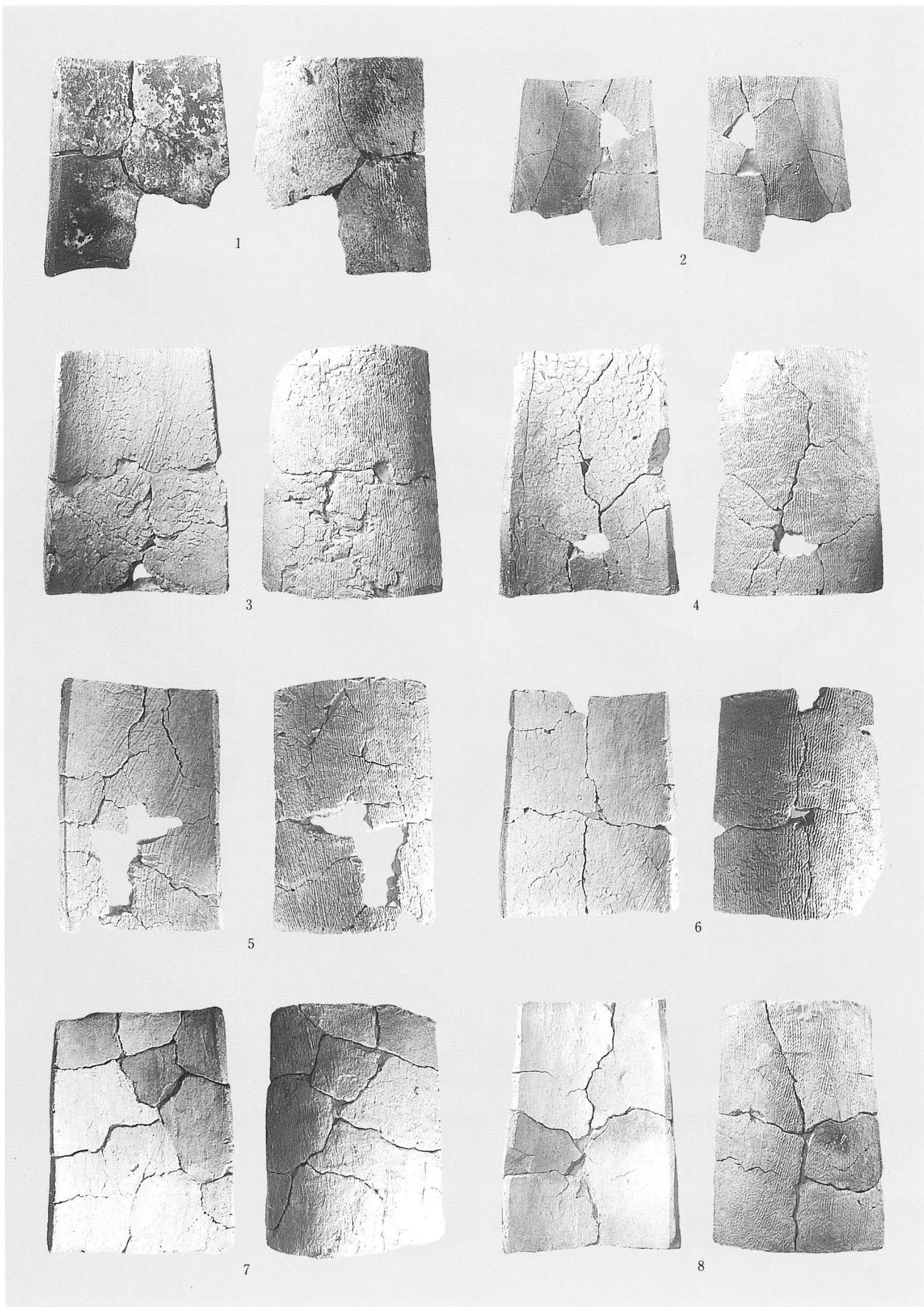
2：細弁蓮華文軒丸瓦…SO-2

6・7：均整唐草文軒平瓦…SO-1

3：単弧文軒平瓦…SO-2

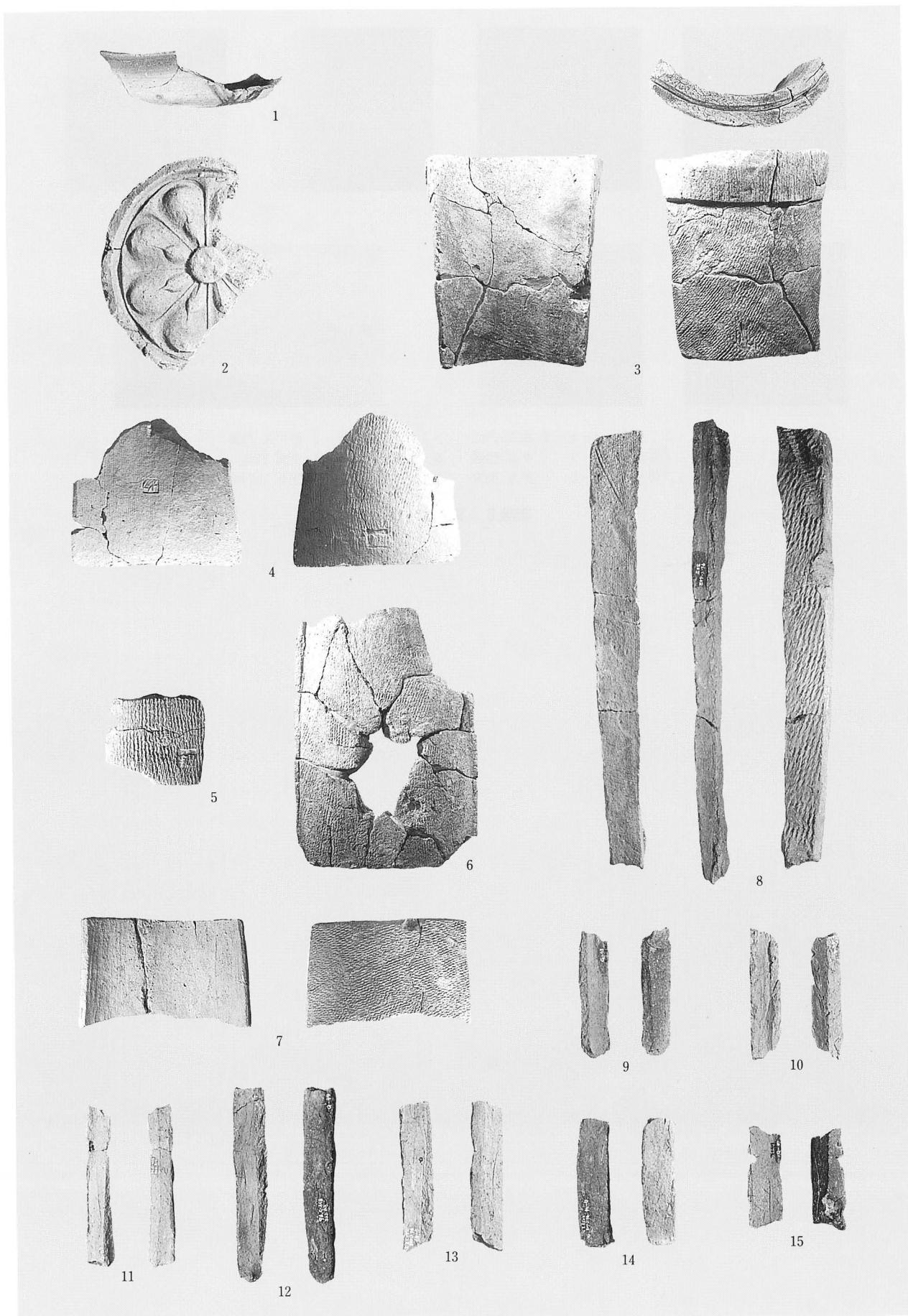
8～11：均整唐草文軒平瓦…SO-2

図版3 SO-1・2 窯跡出土遺物(1)



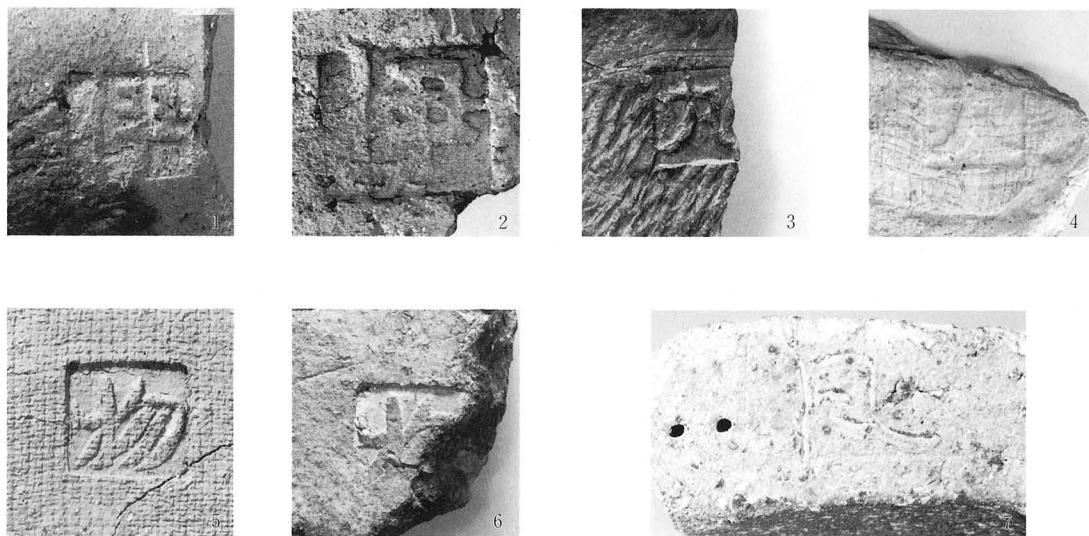
1・2：平瓦…SO-1 3～8：平瓦…SO-2

図版4 SO-1・2 窯跡出土遺物(2)



1：須恵器壊…SX-1 2：重弁蓮華文軒丸瓦…SX-1 3：単孤部文軒平瓦…SX-1 4：平瓦…SD-1
5：凹型台突出圧痕のある平瓦… 6：凹型台側面圧痕のある平瓦…SO-2 7：スジ状のある凸型台圧痕のある平瓦…SO-2
8～15：切断調整瓦…SO-2

図版5 SO-2 窯跡、SD-1 溝跡、SX-1 その他の遺構出土遺物



1・2：「伊」…SX-2 丸瓦 凸面
3：「丸」…SO-2 軒平瓦 凸面
4：「丸」…SX-1 平瓦 凹面
5：「物」…SD-1 平瓦 凹面
6：「物」…SO-2 平瓦 凹面
7：「瓦」…SO-1 平瓦 小口面

図版6 文字瓦

II 富沢遺跡（第105・107・108・109次調査）

I 調査要項

遺跡名 富沢遺跡（宮城県遺跡番号 01369）・泉崎浦遺跡（宮城県遺跡番号 01285）

調査地点・調査原因・調査対象面積・調査面積・調査期間

次数	調査地点	調査原因	調査対象面積	調査面積	調査期間	申請者
105	仙台市太白区長町南四丁目18	共同住宅建設	170m ²	40m ²	平成9年5月19日～5月20日	沼田修一
107	仙台市太白区長町南一丁目10-5	個人専用住宅建設	96m ²	54m ²	平成9年9月9日～9月11日	高橋正一
108	仙台市太白区長町七丁目21-23	事務所建設	98m ²	54m ²	平成9年10月6日～10月7日	木村孝文
109	仙台市太白区長町南三丁目地内	下水道立坑工事	185m ²	18m ²	平成9年12月15日～12月17日	仙台市長

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

担当職員 篠原信彦 根本光一

調査参加者 (105次) 秋葉泰徳 遠藤いな子 太田君子 小林国子 須賀栄子 菅井君子 土井 清

樋口より子 福山幸子 松野順子

(107次) 泉 美恵子 日下啓子 鈴木よしあ 千田タイ子 対馬悦子 山田やす子

(108次) 安達訓仁 泉 美恵子 伊藤房江 日下啓子 高橋勝恵 高橋美香 対馬悦子

山田やす子

(109次) 日下啓子 高橋勝恵 山田やす子



第21図 調査地点と周辺の地形

2 遺跡の位置と環境

富沢遺跡は仙台市の南東部、名取川と広瀬川に挟まれた沖積地（郡山低地）の西側に当たり、北西を丘陵（青葉山丘陵）、他を自然堤防で囲まれた後背湿地を中心に立地している。遺跡の総面積は約90haにもおよぶ。20年ほど前までは水田として利用されていたこの地域も、現在では大規模な土地区画整理事業が行われ、大部分は住宅地となっている。盛土以前の旧地形は、北西から南東に緩やかに傾斜して下がっており、標高は9～16mである。

昨年度までに101次にわたる調査が実施されており、弥生時代から近世までの各時代の水田跡が重複して検出されている。水田跡以外では、中世の居住地域や縄文時代の遺構・遺物なども発見されている。昭和63年に実施された第30次調査では、縄文時代の遺構面のさらに下層から富沢遺跡では初めて、後期旧石器時代の焚き火跡などの生活跡とそれをとりまく樹木群などが発見され、国内外の注目を集めた。その後もその周辺において、同様の遺物・樹木群などが発見されている。なお、第30次調査区は現状保存の処置が行われ、現在、富沢遺跡保存館（「地底の森ミュージアム」）として、市民に広く公開・活用されている。

3 調査概要

(1) 第105次調査（泉崎浦遺跡）（第22・23図）

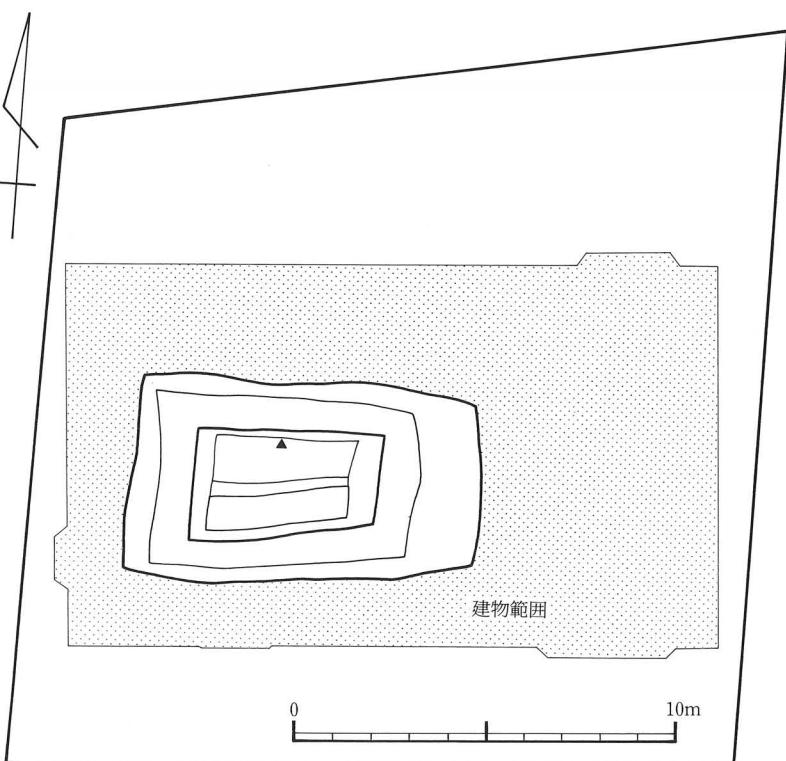
調査方法

平成8年9月19日付で、東京都北区王子六丁目2-23 沼田修一氏より、仙台市太白区長町南四丁目8-1にRC造3階建共同住宅建設に伴う発掘届が提出された。この場所は、富沢遺跡のほぼ中心部に位置し、近隣における過去の調査においても水田跡等の遺構等が発見されている。仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、建物部分について事前に発掘調査を行うこととした。なお、今回の調査地点は泉崎浦遺跡に含まれるが、泉崎浦遺跡については、富沢遺跡と遺跡構造の類似性が認められることから、平成3年度以降富沢遺跡に包括させて調査・報告を行っている。そこで今回の調査の名称も「富沢遺跡第105次調査」とした。調査は平成9年5月19日から20日まで行った。建物予定範囲に9m×5.5mの調査区を設定し、重機による掘り下げを行った。調査区が狭いことに加え盛土が厚いことから、調査は、土層観察による水田土層の確認を主眼として行い、層位ごとの平面的な精査は行わなかった。掘削深度は、現地表面から約2mである。

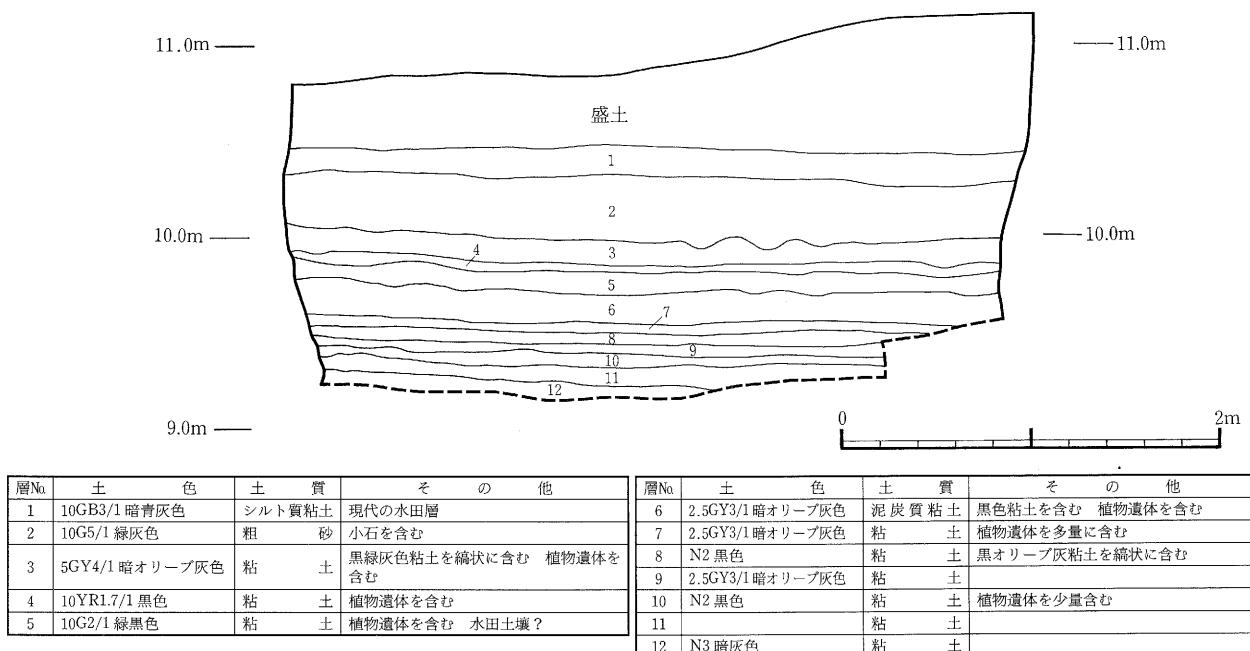
基本層序

今回の調査では、盛土下に12層確認された。各層の土質は、第1層がシルト質粘土で、第2層が粗砂、第3～5層が粘土で植物遺体を含んでいる。また、第5層の下面には凹凸が見られた。第6層は泥炭質粘土で黒色粘土・植物遺体を含んでいる。

7層以下は粘土である。第7層と第10層は植物遺体を含んでおり、特に第7層中には多量の植物遺体が観察



第22図 調査区配置図



第23図 調査区北壁断面図

されている。また、第8層中には暗オリーブ灰色粘土が縞状に堆積している。このうち現代の水田耕作土の第1層を除いて水田土壤の可能性が考えられるのは、第5層である。

まとめと考察

1) 水田土壤

断面の観察では、明瞭な畦畔状の高まりなどは確認されなかったが、現代の水田耕作土である1層を除いて、第5層の下面に凹凸が見られることから水田土壤の可能性が考えられる。しかし、下層からの巻き上げは見られないことで断定はできない。また、隣接する仙台市高速鉄道関係の泉崎浦II区と富沢遺跡第70次調査の層序と対応させてみても明確な対応関係は見られず年代は特定できない。ただし、第2層砂層が泉崎浦II区のV層、第70次調査の第4層と類似していることから、古墳時代以前の可能性が考えられる。

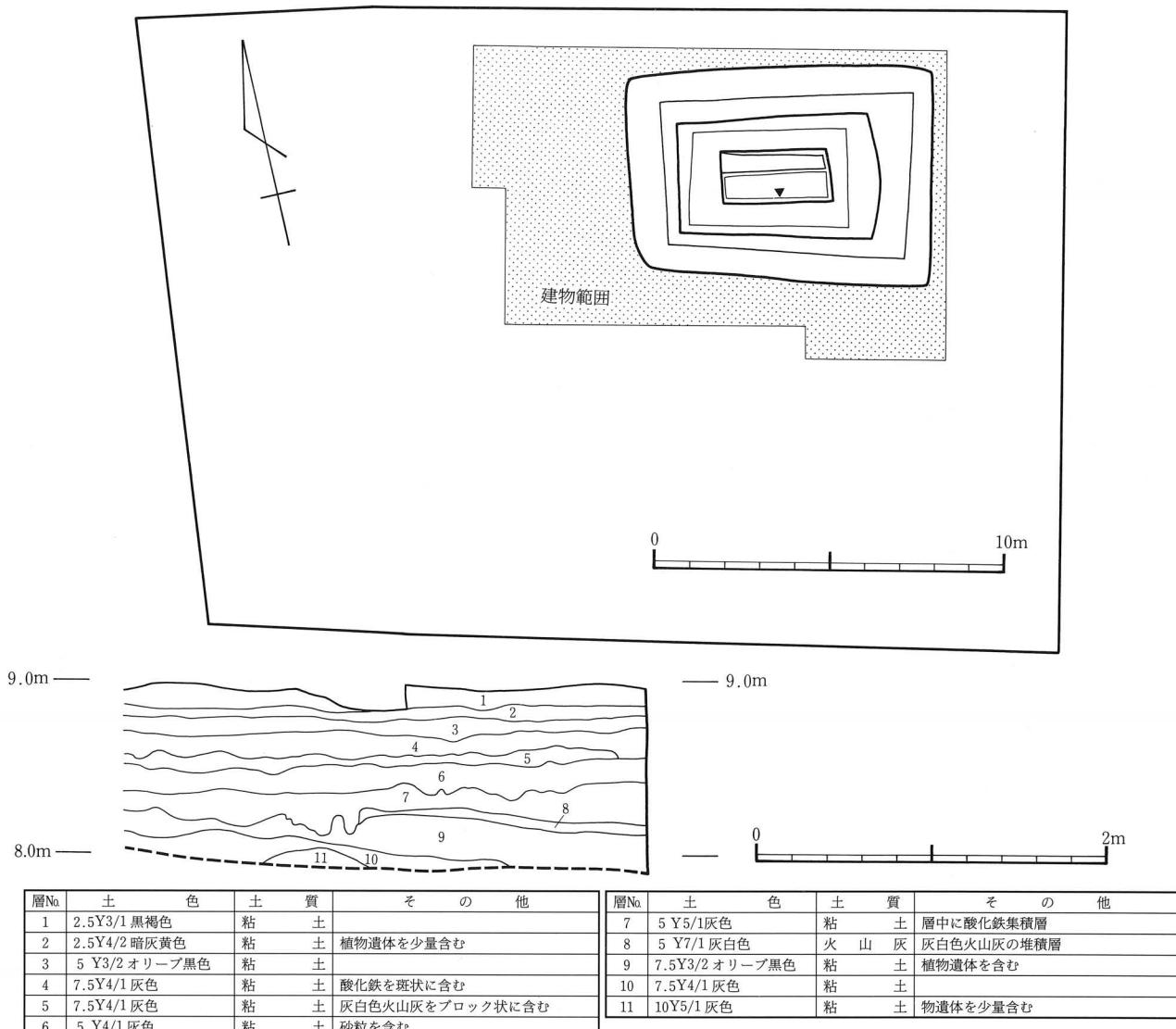
2) まとめ

- ① 今回の調査は、富沢遺跡のほぼ中心部の泉崎浦遺跡内で行われた。
- ② 盛土下の基本層序は、12層認められた。
- ③ 現代の水田を除き水田土壤の可能性が考えられる層は、第5層である。
- ④ 水田の年代は、古墳時代以前の可能性が考えられる。

(2) 第107次調査（第24図）

調査の方法

平成9年8月4日付で、仙台市太白区長町南一丁目10-5 高橋正一氏より、同地内にRC3階建個人専用住宅建設の発掘届が提出された。この場所は、富沢遺跡の南東端に位置し、近隣における過去の調査においても水田跡等の遺構が発見されている。仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、建物部分について事前に発掘調査を行うとした。建物予定範囲に6×9mの調査区を設定し、重機による掘り下げを行った。調査区が狭いことに加え約1.9



第24図 調査区配置図・南壁断面図

mの盛土がなされていたことから、調査は、土層観察による水田土層などの確認を主眼として行い、層位ごとの平面的な遺構精査は行わないこととした。掘削深度は、現地表面から約3mである。

基本層序

今回の調査では、盛土下に12層認められた。各層の土質は第8層を除き粘土であり、粘性が強い。そのうち、第2層と第9層、第11層には植物遺体が含まれる。また、第4層から第7層の各層は下面に凹凸が見られた。第5層中には、灰白色火山灰のブロックが混じる。第8層は、灰白色火山灰の集積層である。現代の水田である第1層を除き、水田土壤の可能性が考えられるのは、第4・5・6・7層である。

まとめと考察

1) 水田土壤

今回の調査は、断面観察を主眼としたものであるため、畦畔などを平面的に検出することはできなかった。また遺物の発見もなかった。層下面に凹凸が見られること、下層の土壤を巻き上げていることから、第4・5・6・7

層が水田土壌の可能性が考えられる。所属年代については、遺物の発見がなく、周辺調査の層位との明確な対応関係も見られないことから断定はできない。しかし、第8層において10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰の集積が見られることから、これらはすべて平安時代以降の水田土壌と考えられる。

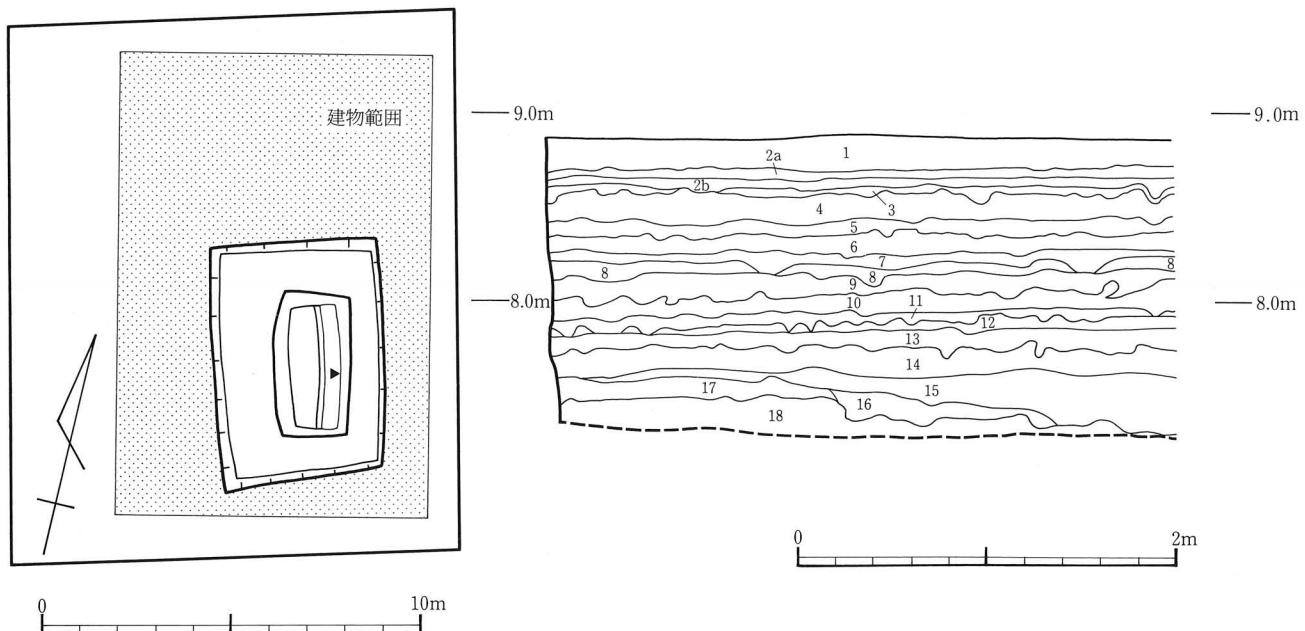
2) まとめ

- ① 今回の調査は、富沢遺跡の南東端で行われた。
- ② 盛土下の基本層序は、12層確認された。
- ③ 現代の水田耕作土を除き水田土壌の可能性が考えられる層は、第4・5・6・7層である。
- ④ 水田の年代は、灰白色火山灰の集積層より上層に当たることから、平安時代以降である。

(3) 第108次調査（第25図）

調査の方法

平成9年6月20日付で、仙台市太白区泉崎一丁目25-23 木村孝文氏より、仙台市太白区長町七丁目21-23にRC造3階建事務所建設の発掘届が提出された。この場所は、富沢遺跡の東側に位置し、近隣における過去の調査でも水田跡等の遺構が発見されている。仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、建物部分について事前に発掘調査を行うこととした。建物予定範囲内に6m×9mの調査区を設定し、重機による掘り下げを行った。調査区が狭く、約1mの盛土がなされていたため、層位ごとの平面的な精査は行わず、土層観察による水田土層等の確認に調査の主眼をおいた。掘削深度は、現地表面から約2.6mである。



層No.	土色	土質	その他の
1	10G3/1 暗緑灰色	粘土質シルト	現代の水田層
2a	10G4/1 暗緑灰色	粘 土	白色のバミス、小粒、砂を含む。酸化鉄・炭化物を含む。
2b	10G4/1 暗緑灰色	粘 土	炭化物を含む。緑黒色粘土粒子が混入（3層からの巻き上げ）。
3	10G2/1 緑黒色	粘 土	オリーブ灰色粘土を斑状に含む
4	2.5GY6/1 オリーブ灰色	粘土質シルト	暗緑灰色粘土を斑状に含む 1cm程の灰白色火山灰ブロックを含む
5	5 BG5/1 青灰色	粘 土	緑灰色砂を斑状に含む。
6	10G6/1 緑灰色	細 砂	灰色粘土（5層土）をブロック状に含む
7	10GY5/1 緑灰色	粘 土	明るいオリーブ灰粘土と灰白色粘土を斑状に含む
8	10Y7/1 灰白色	粘 土	10Y7/2 灰色粘土ブロック状に含む。粘性が非常に強い。
9	5 Y4/1 灰色	粘 土	上部に10Y7/2 灰色粘土、下部に黒色泥炭をブロック状に含む

層No.	土色	土質	その他の
10	5 Y7/2 灰白色 10YR1.7/1 黒色 2.5Y3/2 黒褐色	粘 土 泥炭	互層状に堆積
11	7.5Y3/1 オリーブ黒色	泥炭質粘土	植物遺体を含む
12	5 Y6/3 オリーブ黄色	粘 土	植物遺体を含む
13	7.5Y3/2 オリーブ黒色	泥炭質粘土	
14	2.5Y3/1 黒褐色 7.5Y3/2 オリーブ黒色 7.5Y7/2 灰白色	泥炭 粘土	互層状に堆積
15	5 Y3/1 オリーブ黒色	泥炭質粘土	灰白色粘土の小ブロックを含む。 植物遺体を含む。
16	7.5Y4/1 灰色	泥炭質粘土	黒色泥炭の小ブロックを含む
17	5 Y3/2 オリーブ黒色	泥炭質粘土	植物遺体を含む
18	7.5Y4/2 灰オリーブ色 10YR3/1 黒褐色 10YR1.7/1 黒色	泥炭質粘土 泥炭	互層状に堆積

第25図 調査区配置図・東壁断面図

基本層序

今回の調査では、盛土下に大別18層、細別19層の層が認められた。各層の土質は、第1層は粘土質シルトである。第2a・2b・3層は粘土である。第4層は粘土質シルトである。第5層から第9層は粘土を主体とするが、第6層は、細砂の中に第5層の粘土がブロック状に混じる。第10層は粘土と泥炭が互層状に堆積したものである。第11層は、泥炭質粘土である。第12層は粘土である。第13層は泥炭質粘土である。第14層は泥炭と粘土が互層状に堆積したものである。第15層から第17層は泥炭質粘土である。第18層は、泥炭質粘土と泥炭が互層状に堆積したものである。このうち、第4層中には1cm程度の灰白色火山灰がブロック状に混じる。また、第2・3・4・5・7・9・11・13・15・16の各層の下面には凹凸が見られ、下層からの巻き上げが認められたことから、水田土壤の可能性を考えられる。

調査成果のまとめと考察

1) 水田土壤

今回の調査で、現代の水田層である第1層を除き水田土壤の可能性が考えられるのは、第2～5・7・9・11・13・15・16の各層である。各層とも下面に凹凸が見られ、下層からの土壤の巻き上げが認められている。このうち、第4層中には10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰のブロックが混じり、第5層以下には見られないことから、第2～4層については平安時代以降近世以前、第5層以下には平安時代以前の年代幅が考えられる。

次に、周辺で行われた第15次調査V区と第73次調査の層位の対応から年代を考えてみると次のようになる。

第108次調査	第15次調査V区	第73次調査	年代
2層	2層	2層	近世以降
3層	3層		
4層	4 b層	5層	平安時代（灰白色火山灰降下以降）
5層	6層	6層	平安時代（灰白色火山灰降下以前）
7層	7 a層	7層	古墳時代
11層	8層	9層	
13層	9 a層	13層	弥生時代（十三塚式期）
16層	11 a層	16 a層	弥生時代（楕円形団式期）

第9層と第15層については、対応できる層がないため不明である。

2) まとめ

- ① 今回の調査は、富沢遺跡の東部で行われた。
- ② 盛土下の基本層序は、大別18層、細別19層である。
- ③ 現代の水田耕作土を除き水田土壤の可能性が考えられる層は、第2～5・7・9・11・13・15・16層である。
- ④ 水田の年代については、第2～4層が平安時代以降（灰白色火山灰降下以降）近世以前、第5層が平安時代（灰白色火山灰降下以前）、第7層が古墳時代、第9・11層が弥生時代以降古墳時代以前、第13層が弥生時代（十三塚式期）、第15層が弥生時代、第16層が弥生時代（楕円形団式期）と考えられる。

(4) 第109次調査（第26図）

調査の方法

平成9年7月18日付で、仙台市長より仙台市太白区長町南三丁目地内における公共下水道工事の発掘通知が提出

された。公共下水道工事は富沢遺跡を南北に貫く工事であるが、ほとんどシールド工法で開削される立坑部分が調査対象となった。この場所は富沢遺跡のほぼ中心に位置しており、近隣における過去の調査でも水田跡等の遺構が発見されている。仙台市教育委員会では、事業主体者と協議の上、工事用立坑部分について事前に発掘調査を行うこととした。道路部分に建設されるため、すでに上下水道・ガス等の埋設管が敷設されていることから、調査は限定せざるを得なく、 3×6 mの調査区を設定して重機による掘り下げを行った。調査区が狭い上に、アスファルト舗装面・碎石が約1.1mあったため、層ごとの平面的な精査は行わず、土層観察による水田土壤などの確認に調査の主眼をおいた。掘削深度は、路面から約2.8mである。

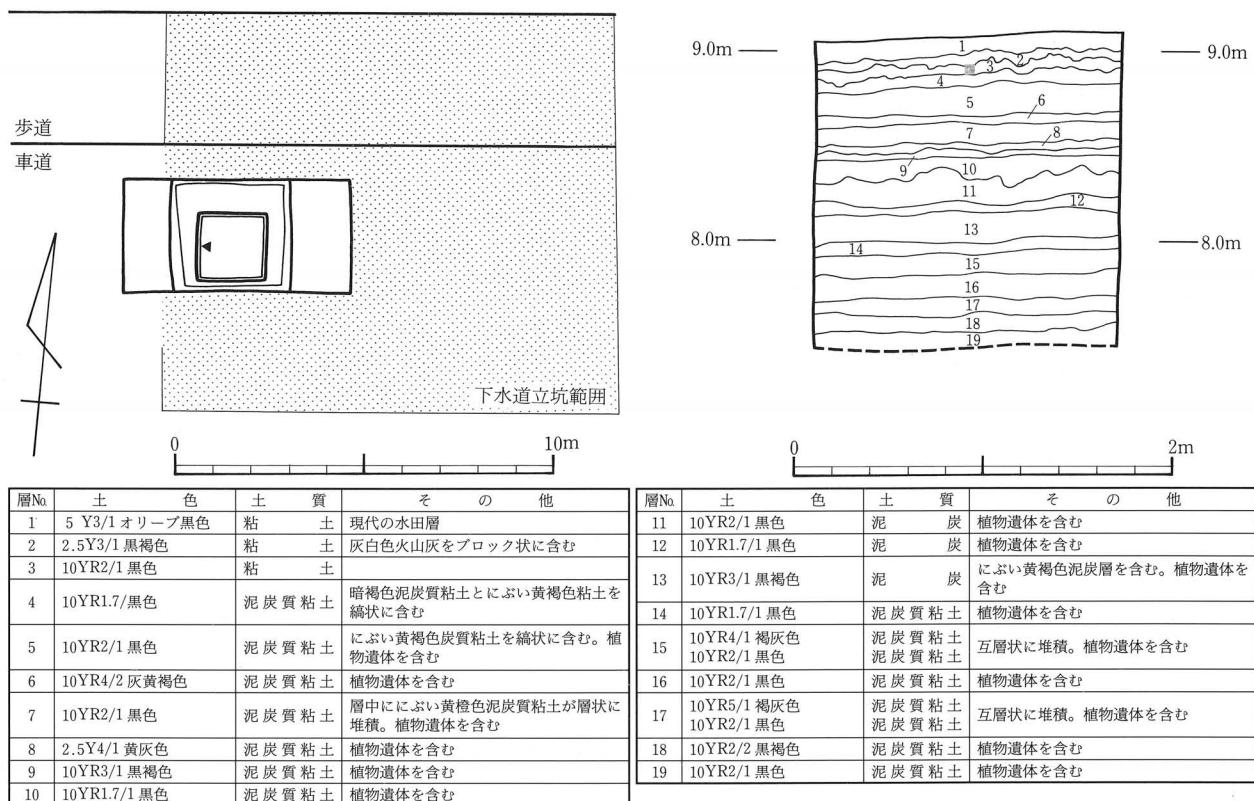
基本層序

今回の調査では、碎石下に19層認められた。土質は、第1層から第3層が粘土、第4層から第10層が泥炭質粘土、第11層から第13層が泥炭、第14層以下は泥炭質粘土である。第2層中には灰白色火山灰がブロック状に見られた。また、第5層以下の層には植物遺体が多く含まれている。第2・3・8・10層の下面には凹凸が見られること、下層からの巻き上げが見られることから、水田土壤の可能性が考えられる。

調査の成果のまとめと考察

1) 水田土壤

今回の調査では、畦畔状の高まりや遺物の発見はなかったが、下面に凹凸が見られること、下層からの巻き上げが見られることから、現代の水田耕作土の第1層を除き、第2・3・8・10層の各層に水田土壤の可能性が考えられる。ただし、第10層は下面の凹凸は見られるが下層からの巻き上げはほとんど見られない。第2層中には、灰白色火山灰がブロック状に混じることから、平安時代以降の年代が考えられる。さらに隣接地で行った第81次調査の基本層序との対応関係を見ると各層の年代は次のようになる。(基本層の分層および81次調査との対応関係については、当文化財課吉岡恭平氏の助言を得た。)



第26図 調査区配置図・西壁断面図

II 富沢遺跡（第105・107・108・109次調査）

第109次	第81次	年代
2層	4層	平安時代（灰白色火山灰降下以降）
3層	5層	古墳時代以降平安時代以前（灰白色火山灰降下以前）
8層	11層	弥生時代（楕円形団式期）
10層	13層	水田土壌？

2) まとめ

- ① 今回の調査は、富沢遺跡のほぼ中心で行われた。
- ② 基本層序は19層認められた。
- ③ 現代の水田耕作土を除き水田土壌の可能性が考えられる層は、2・3・8・10層である。
- ④ 水田の年代は、第2層が平安時代（灰白色火山灰降下以降）、第3層が古墳時代以降平安時代（灰白色火山灰降下以前）、第8層が弥生時代（楕円形団式期）である。

引用・参考文献

- 五十嵐康洋他（1992）：『富沢遺跡第70次調査』『富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)』仙台市文化財調査報告書第163集
- 五十嵐康洋（1992）：『富沢遺跡第73次調査』『富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)』仙台市文化財調査報告書第163集
- 五十嵐康洋他（1993）：『富沢遺跡第84次調査』『富沢・泉崎浦・山口遺跡(5)』仙台市文化財調査報告書第171集
- 斎野裕彦他（1987）：『富沢－富沢遺跡第15次調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第98集
- 佐藤甲二（1990）：『富沢遺跡第49次』『富沢遺跡第49次・東光寺遺跡第3次・青葉山A遺跡』仙台市文化財調査報告書第142集
- 佐藤甲二（1993）：『富沢遺跡第81次調査』『富沢・泉崎浦・山口遺跡(5)』仙台市文化財調査報告書第171集
- 篠原信彦・吉岡恭平（1989）：『富沢遺跡・泉崎浦遺跡－仙台市高速鉄道関係調査報告書I－』仙台市文化財調査報告書第126集
- 仙台農耕文化勉強会（1990）：『水田跡の基本的理－水田跡の検出と認定』『第3回 東日本の水田跡を考える会－資料集』
- 中富洋他（1989）：『富沢遺跡第39次調査』『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第128集



1 第105次調査区全景（東から）



2 第105次北壁土層断面（南から）



3 第107次調査区全景（東から）



4 第107次北壁土層断面（南から）



5 第108次調査区全景（北から）



6 第108次東壁土層断面（西から）



7 第109次調査区全景（西から）



8 第109次西壁土層断面（東から）

図版 7 調査状況・土層断面

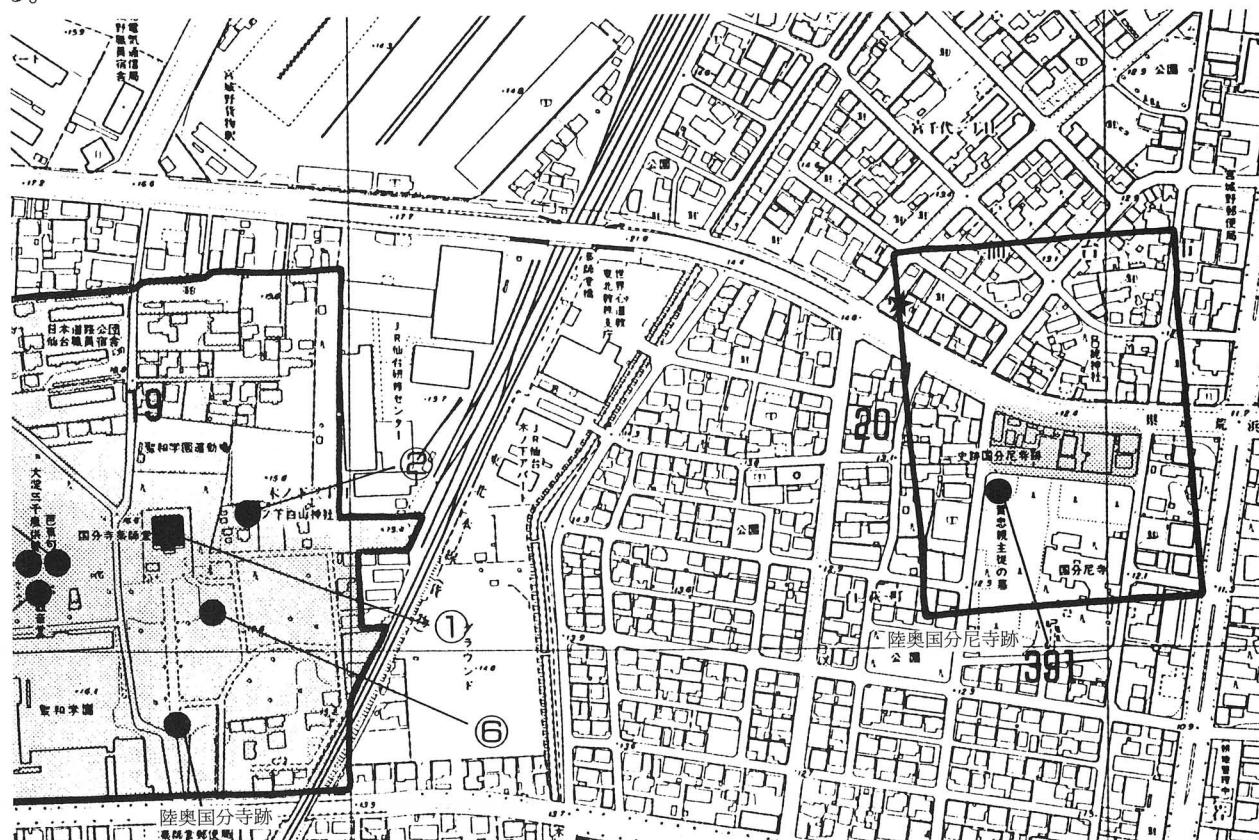
III 陸奥国分尼寺跡（第7次調査）

I 調査要項

遺跡名	陸奥国分尼寺跡（宮城県遺跡番号 01020）
調査地点	仙台市宮城野区宮千代一丁目 5-1、5-2、5-9
調査原因	地下タンク及び RC 4階建店舗兼住宅建設
調査対象面積	420m ²
調査面積	108m ²
調査期間	第1トレンチ 平成9年9月1日～3日 第2・3トレンチ 平成9年11月26日～12月12日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	篠原信彦 根本光一 伊東真文
調査参加者	赤間淳子 大内孝子 小野さよ子 菊地和江 鈴木喜美子
申請者	地権者 八島恒次 八島立男

2 遺跡の位置と環境

陸奥国分尼寺跡はJR仙台駅の東南東約2.5kmの若林区白萩町、宮城野区宮千代に位置し、市街地が広がる段丘から沖積平野へ移行する標高約11mの住宅地に立地している。遺跡の中央部を県道荒浜・原町線が東西に貫いており、遺跡の南側には曹洞宗国分尼寺がある。寺院中心部と考えられる県道南側部分は昭和23年に国史跡に指定されている。



第27図 調査地点と周辺の地形

陸奥国分尼寺跡の西方500mには、陸奥国分寺跡が位置している。また、南方約1.2kmには弥生時代から近世にかけての複合遺跡である南小泉遺跡が位置し、その中心部には、古墳時代前期末に築造された主軸長110mの前方後円墳である遠見塚古墳がある。東方500mには古代の志波遺跡、同約1kmには中世の谷地館跡がそれぞれ位置している。

陸奥国分尼寺跡は、史跡指定された中心部付近で過去6次にわたり発掘調査・確認調査が実施されている。昭和39年には、「観音塚」と呼ばれ、礎石が露出した土壇の一画で発掘調査が実施され、桁行5間、梁行4間の礎石建ちの建物跡が発見された。この建物は、金堂跡と考えられている。平成8年度の確認調査では、金堂跡から県道を挟んだ北側で、桁行5間以上、梁行3間の掘立柱建物跡の一部が発見されている。金堂中心を通る南北軸線と陸奥国分寺伽藍中軸線がほぼ同方向であることから、両寺は同時代に同一基準で造営されたものと考えられるが、陸奥国分尼寺全体の伽藍配置や寺域については不明である。陸奥国分寺跡の寺域が東西800尺、南北800尺以上と考えられていることから、陸奥国分尼寺跡の寺域はこれを超えることはなく、明治末年の古地図や航空写真の観察検討により東西600尺、南北800尺ほどと推定されている（木村：1986・1996）。今回の調査区は、この推定寺域の北西部西辺上に当たる。

3 調査方法と基本層序

第1トレンチ

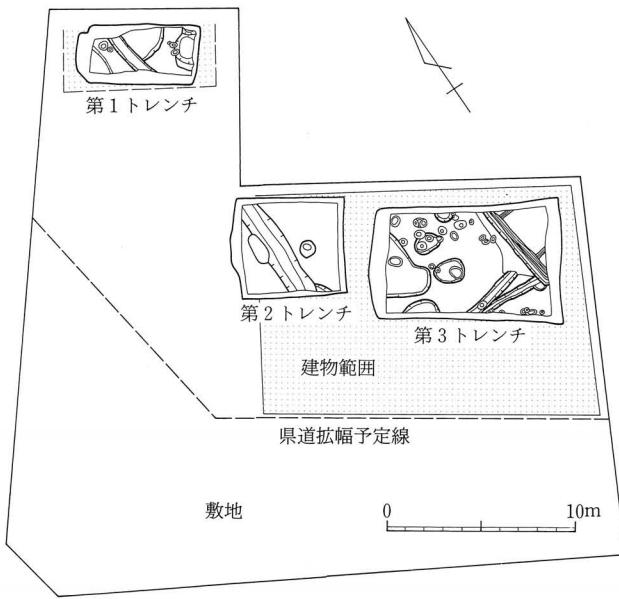
平成9年7月31日付で仙台市宮城野区宮千代一丁目5-2 八島恒治氏より同地内での地下タンク建設の発掘届が提出された。この場所は、陸奥国分尼寺跡の推定寺域の西端に位置することから、仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、地下タンク建設予定地域内において確認調査を行うこととした。

調査は、地下タンク建設予定地内に2.6m×5.6mの調査区を設定し、明黄褐色砂質シルトの地山まで約1.4m掘り下げて実施した。その結果、溝跡・竪穴遺構等を検出した。基本層は、大別5層、細別6層が認められた。I層は黒褐色砂質シルトで盛土以前の耕作土である。層の厚さは約60cmで、礫の混じり具合から2層に細別した。II層は暗褐色シルトで、層の厚さは約20cmである。III層は、暗褐色シルトで黄褐色砂質シルト粒を多量に含む。層の厚さは約20cmである。IV層は黄褐色細砂で、部分的に見られる。V層は明黄褐色砂質シルトの地山層である。遺構精査はV層上面で行った。

第2・3トレンチ

平成9年9月26日付で、前記住所 八島恒治・立男氏より同地内でのRC造4階建店舗兼住宅建設の発掘届が提出された。前述の確認調査によって遺構が発見されたことから、申請者と協議の上、事前に発掘調査を行うこととした。既存建物の解体の関係から2回に分けての調査になった。第2トレンチの調査は、建物予定範囲の西半部に5.5m×6mの調査区を設定し、明黄褐色粘土質シルトの地山まで、約80cm掘り下げて実施した。その結果、溝跡・土坑を検出した。

基本層は4層に分けられた。I層は暗褐色シルトで砂礫を含んでいる。層の厚さは約20cmである。II層は暗褐色粘土質シルトで層の厚さは約20cmであ



第28図 調査区配置図

III 陸奥国分尼寺跡（第7次調査）

る。III層は黒褐色粘土質シルトで層の厚さは約15cmである。IV層は明黄褐色粘土質シルトの地山層である。遺構精査はIV層上面で行った。

第3トレンチの調査は、建物予定範囲の東半部に6×10mの調査区を設定し、黄褐色粘土質シルトの地山まで約1m掘り下げて実施した。その結果、竪穴住居跡・土坑等を検出した。

基本層はVI層に分けられた。I層は、黒褐色粘土で層の厚さは20~30cmである。II層は褐色粘土質シルトであり、層の厚さは、約30cm程である。III層は暗褐色シルトであり、層の厚さは約20cm程である。IV層は褐色シルト質粘土であり、部分的に見られる。V層は黒褐色粘土であり、部分的に見られるものである。VI層は黄褐色粘土質シルトの地山層である。10~20cm程下がると礫層が見られる所もある。遺構精査はVI層で行った。

4 発見遺構と出土遺物

3トレンチ合計で竪穴住居跡1軒、竪穴遺構2基、溝跡4条、土坑5基、性格不明遺構1基が検出されたほか、ピット27基が検出された。遺構番号は第1トレンチから通し番号をつけた。

〔第1トレンチ〕（第29図）

SI-1 竪穴遺構 北半が調査区外に延びることとSD-1溝跡に切られるため、平面形は不明である。規模は、南辺で2m以上である。基本層III層を掘り込んで作られている。残存する壁高は約20cmである。底面は平坦であり、周溝などの施設は検出されなかつたため、住居跡かどうかは断定できない。堆積土は4層認められた。遺構検出面から偏行唐草文軒平瓦1点（第33図1）が出土している。

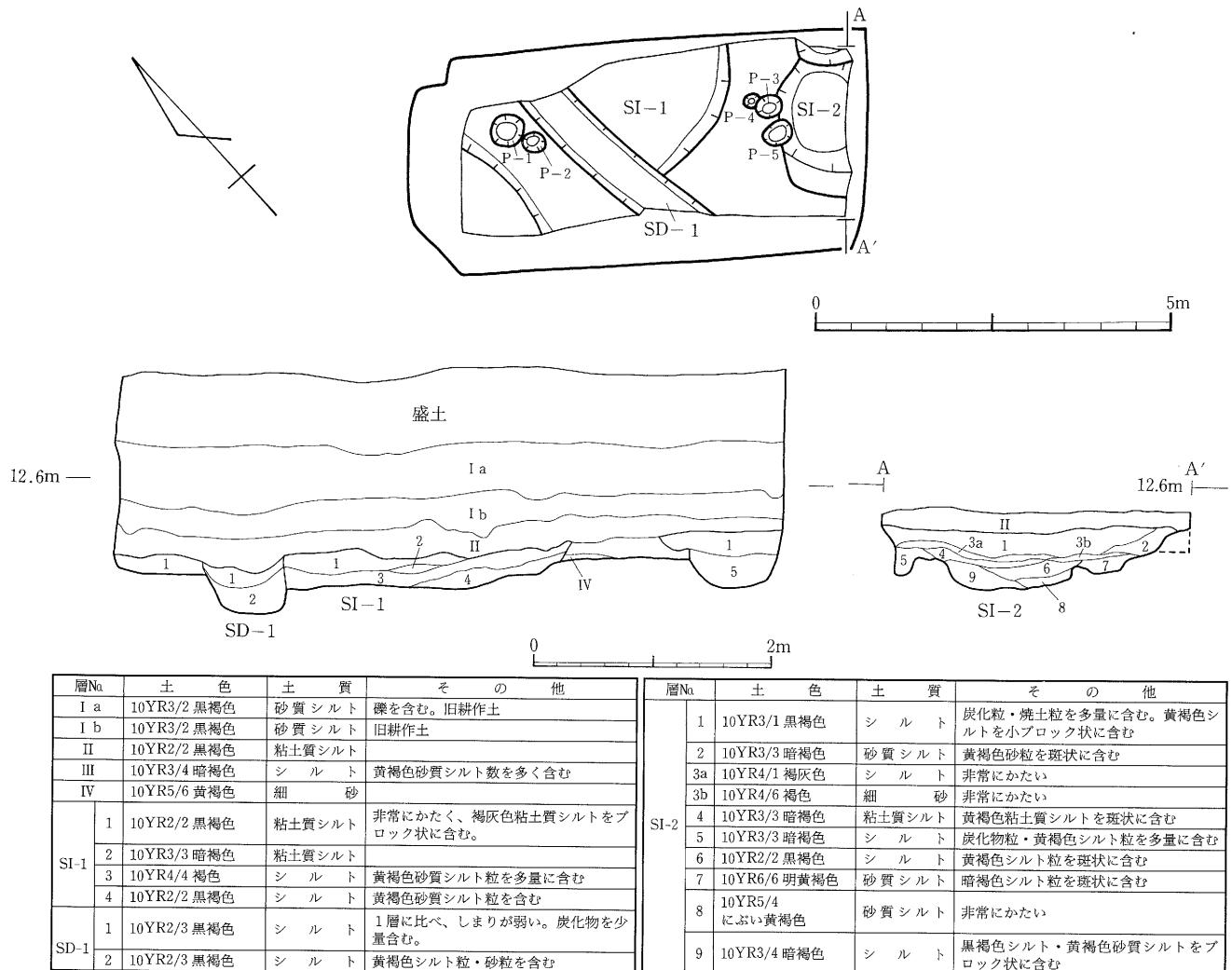
SI-2 竪穴遺構 東半が調査区外に延びるため平面形は不明であるが、円形を呈するものと推測される。規模は、調査区東壁で長軸2.1m以上を測る。残存する壁高は約25cmである。堆積土は大別9層、細別10層に分けられた。このうち、第3a・3b層は、非常に堅くしまっており、上面がほぼ平坦になることから、この面が何らかの形で利用された可能性が考えられる。また、底面は南半部が全体的に掘り込まれているのに対し、北側には炭化物粒を多量に含むピット状の落ち込みが見られる。堆積土の状況から見てこのピット状の落ち込みは、SI-2竪穴遺構に切られた別の遺構である可能性も考えられる。堆積土1層中からは、瓦片が数点出土しているが図示できるものはない。

SD-1 溝跡 調査区を南北に横断するように検出された。SI-1竪穴遺構と重複関係にありこれを切っている。主軸方向はN-7°-Wである。確認された溝跡は調査内で長さ2.2m、上端幅66cm、下端幅46cm、深さ約35cmを測る。断面形は逆台形を呈し、堆積土は3層に分けられた。底面はほぼ平坦であり、やや北に向かって傾斜が見られた。また、一部に拳大ほどの礫が見られた。堆積土中からは、瓦当面が剥離した軒丸瓦（第32図9）、丸瓦のほか、多数の瓦片、土師器・須恵器片が出土している。これらは、主に第2層から出土している。このうち、2点が図示された（第32図9・10）。

ピット ピットは4基検出された。堆積土はいずれも暗褐色シルトであり、基本層II層が堆積したものと思われる。柱痕跡が認められたものではなく、ピットからの出土遺物もなかった。

〔第2トレンチ〕（第30図）

SD-2 溝跡 調査区を南北に横断するように検出された。北西部の一部が1m×1m程の広さの攪乱を受けている。主軸方向はN-2°-Eである。確認された溝跡は長さ2.2m、上端幅約140cm、下端幅約54cmで、深さ約80cmを測る。断面形は逆台形を呈し、堆積土は6層に分けられた。底面はほぼ平坦で北に向かってやや傾斜している。SD-1溝跡の延長上にあり、方向も近いことから同一の溝跡と考えられる。堆積土中の主に第2層から瓦片、土師器片等が多量に出土している。このうち、平瓦4点が図示されている（第33図3・4・5・6）。

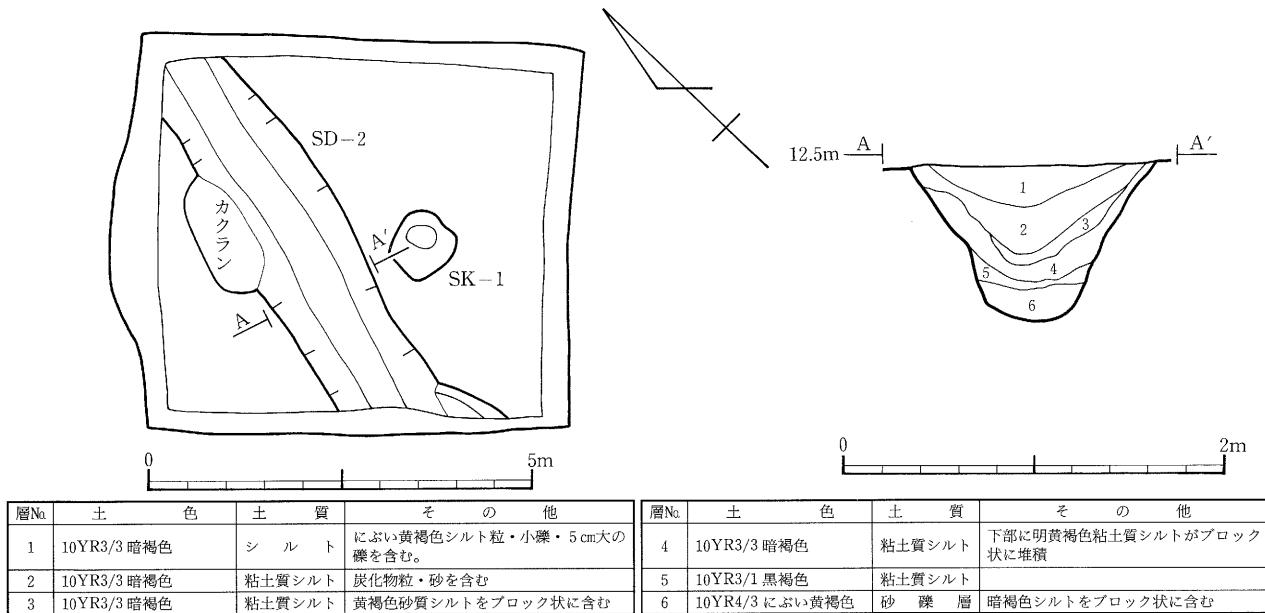


第29図 第1トレンチ遺構配置図・北壁断面図・SI-2断面図

SK-1 土坑 調査区のほぼ中央で検出された。平面形はやや不整形な円形を呈する。大きさは80×80cmで、深さは30cmを測る。堆積土は暗褐色砂質シルトの単層であり、遺物は出土しなかった。

〔第3トレンチ〕(第31図)

SI-3 竪穴住居跡 調査区東半部北側で確認され、住居跡西辺の一部と南西コーナーが検出されたのみで、その大部分は調査区外に延びている。SD-3・4溝跡と重複し、いずれも切られている。残存する規模は、西辺5.2m以上、東西2.78m以上で、平面形は方形を呈するものと考えられる。西辺を基準とする主軸方向はN-5°-Wである。壁は周溝底面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約45cmである。堆積土は6層に分けられ、第1・2層は暗褐色シルト・粘土質シルト、第3層は黒褐色粘土質シルト、第4・5層はにぶい黄褐色粘土質シルトである。第6層は黒褐色粘土質シルトで粘性が強く堅くしまっており、貼り床として使用されたものと考えられる。堆積状況はレンズ状の自然堆積を示している。カマド・柱穴などの施設は検出されなかったが、調査区北東隅付近の床面上で径30cmの範囲に焼土が見られた。周溝は西壁下の床面で重複する2時期の周溝と、それに直交する東西方向の周溝が2ヶ所で検出されている。重複関係より東西方向と南北方向東側の周溝が古く、壁直下の周溝が新しい時期のものである。住居跡の重複はみられないことから、住居の作り替え若しくは拡張が行われたものと考えられる。周溝の規模は、新しい時期のものが上幅約30cm、深さ約10cm、古い時期のものが上幅約20~30cm、深さ5~10cmを測る。出土遺物は、周溝から須恵器片が少量出土しているが、図示できるものはない。



第30図 第2トレンチ遺構配置図・SD-2断面図

SD-3溝跡 SI-3竪穴住居跡・SD-4溝跡と重複関係にあり、これらを切っている。確認された溝跡は長さ約4.0m、上端幅約40cm、下端幅約20cm、深さ約10cmを測る。断面形はU字形を呈し、堆積土は1層である。溝跡の主軸方向はE-5°-Sである。瓦片が数点出土しているが、図示できるものはない。

SD-4溝跡 重複関係よりSI-3竪穴住居跡を切り、SD-4溝跡に切られている。確認された溝跡は長さ約5.3m、上端幅約60cm、下端幅約30cm、深さ18cmを測る。断面形は逆台形を呈し、堆積土は2層に分けられる。溝跡の主軸方向はE-13°-Nである。瓦片が数点出土しているが、図示できるものはない。

SX-1性格不明遺構 調査区西半部で検出され調査区外に延びる。平面形は不整形を呈しており、その規模は東西2.2m以上、南北3.3m以上、深さは約12cmを測る。堆積土は5層に分けられ、第1層は褐色シルトであり、非常にかたく、版築状にたたき締められているようである。底面は礫を含む地山層を掘り込んでおり、やや凹凸が見られる。出土遺物は、平瓦、須恵器、ロクロ土師器、赤焼土器などが多数出土している。

このうち、土師器壊1点、須恵器甕口縁部1点、赤焼土器壊2点・高台付壊2点、平瓦1点が図示された。(第32・33図)

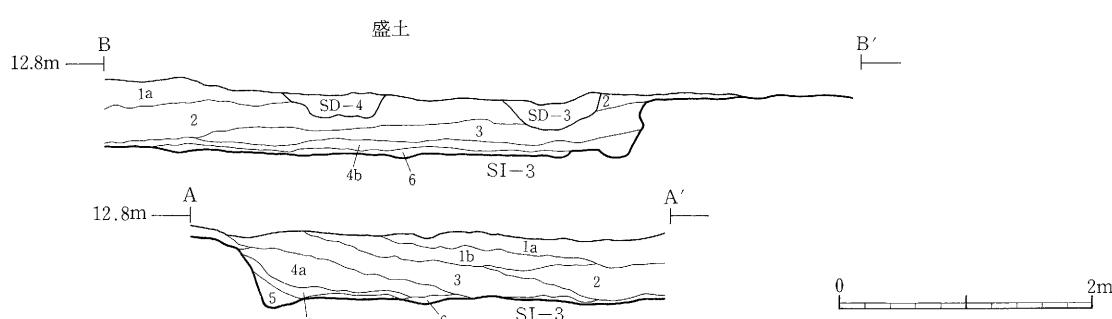
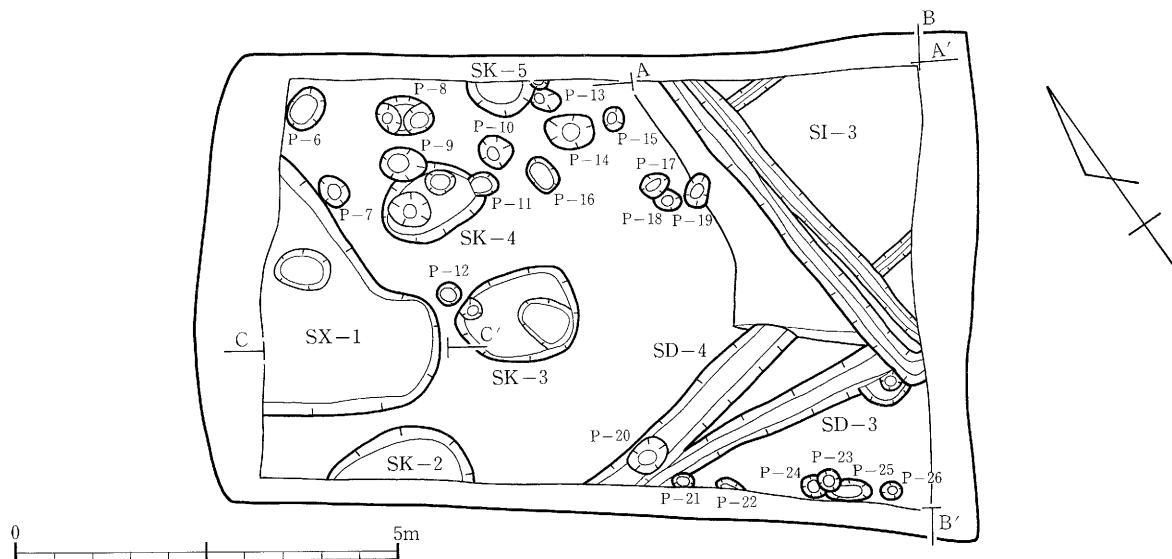
SK-2土坑 調査区南西部で検出され、南半部が調査区外に延びる。平面形は橢円形を呈するものと考えられ、大きさは190cm×80cm以上である。断面形は皿形を呈し、深さ約18cmを測る。堆積土は1層で黒褐色粘土である。

SK-3土坑 調査区のほぼ中央部で検出され、平面形は橢円形を呈する。大きさは160cm×120cmで、深さ約10cmを測る。断面形はU字形を呈し、底面にピット状の落ち込みが見られる。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。

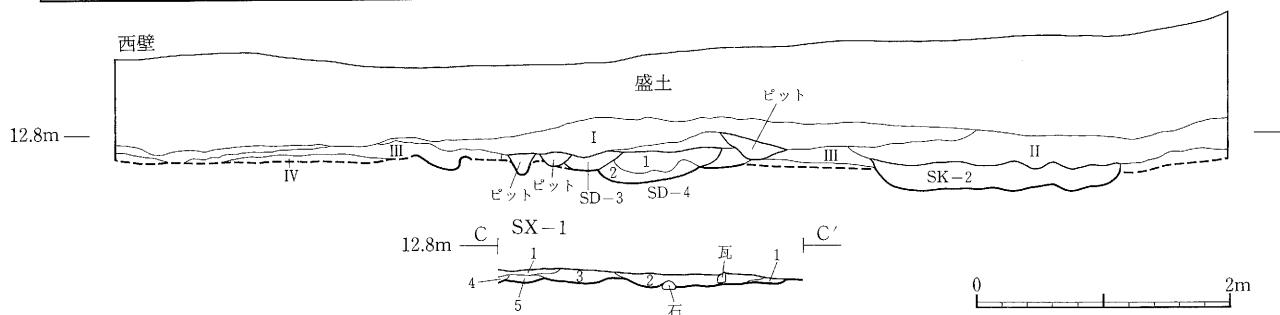
SK-4土坑 調査区の北西部で検出され、ピットと重複している。平面形は橢円形を呈し、大きさは140cm×100cm、深さは35cmを測る。堆積土は2層に分けられ、第1層は黒褐色粘土質シルトで、第2層はにぶい黄褐色粘土質シルトである。底面にはピット状の落ち込みが2ヶ所見られた。

SK-5土坑 調査区中央北部で検出され、北半が調査区外に延びる。平面形は円形を呈するものと考えられ、大きさは90cm×50cm以上である。断面形は皿形を呈し、深さ12cmを測る。堆積土は2層に分けられ、第1層は褐色粘土質シルト、第2層は褐色粘土質シルトである。底面は平坦である。

ピット ピットは21基検出された。明確に柱痕跡を持つものではなく、また調査区が狭いことから建物を組むかどうかは判断できない。



層No	土色	土質	その他の特徴	層No	土色	土質	その他の特徴
1a	10YR3/3 暗褐色	シルト	粘性が低くさらさらしている。炭化物粒子を少量含む	4b	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	5層より明黄褐色粒が少ない
1b	10YR3/3 暗褐色	シルト	1層よりしまりがよい	5	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	周溝から壁沿いに堆積
2	10YR3/2 暗褐色	粘土質シルト	粘性あり。炭化物・焼土を含む。小石を多く含む	6	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	粘性が強くかたい。炭化物・焼土粒を含む
3	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	粘性あり。3層よりもかたい。黒色粒・明黄褐色を多く含む	SD-3	10YR3/2 黑褐色	シルト	
4a	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒・黒色シルト・明黄褐色シルト粒を多量に含む	SD-4	10YR3/2 黑褐色	シルト	



層No	土色	土質	その他の特徴	層No	土色	土質	その他の特徴
I	10Y3/1 黒褐色	粘土	粘性が強く、しまりは弱い。部分的に小礫を少量含む	SD-3	10YR3/3 黒褐色		粘性がややあり、しまりもよい。層下部に褐色の粘土質シルトを少量含む
II	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	粘性が強く、しまりはややよい。上部に黒褐色粘土質シルト多量に含む。	SK-2	10YR2/3 黑褐色	粘土	粘性強く、しまりは弱い。にぶい黄褐色粘土質シルトを少量含む
III	10YR3/3 暗褐色	シルト	粘性ややあり。	ピット	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
IV	10YR4/4 黄褐色	シルト質粘土	粘性が強く、しまりは弱い。1層よりはしまりがある。	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	非常にかたい
V	10YR3/2 黑褐色	粘土	粘性強く、しまり弱い	2	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	粘性あり。黄褐色シルトをブロック状に含む
SD-4	1 10YR3/3 暗褐色 2 10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	粘性がややあり、しまりもよい。小礫を少量含む。 粘性あり。しまりあり。暗褐色粘土質シルトブロック状に含む。	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色シルト斑状に含む
				4	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	
				5	7.5YR4/3 黄褐色	シルト	

第31図 第3トレーニング構造配置図・西壁断面図・SI-3断面図・SX-1断面図

III 陸奥国分尼寺跡（第7次調査）

出土遺物

基本層中及び遺構から軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、土師器、須恵器、赤焼土器などが多数出土している。特に瓦片が多数出土している。

軒丸瓦（第32図9）

SD-1溝跡の堆積土中から1点が出土しているのみであり、瓦当面は剥離しており全容は不明である。周縁部の一部が残存しており、連弁の先端部がかろうじて確認できる。その形状から重弁蓮華文軒丸瓦と考えられる。丸瓦部は、粘土紐巻き作りの有段丸瓦であり、凸面はヘラナデ調整が施されている。凹面には粘土紐痕と布目痕が見られる。粘土紐の幅は、約4cm間隔に見られる。

軒平瓦（第33図1）

SI-1豎穴遺構から出土した偏行唐草文軒平瓦1点が出土しており、瓦当部と頸部の破片である。平瓦部と頸部を接合したのち、匏で製作された瓦当部を接合している。瓦当文様は左から右に展開する陽刻の偏行唐草文で、上下を画するように細い隆線で結ばれた珠文が見られる。凹面はナデ調整が施されている。頸部の断面形は三角形で、平瓦部に粘土板を2枚以上合わせて作られている。頸面は無文でかすかに平行叩きもしくはハケメ状の痕跡が見られるが、その後ナデ調整されているため不明瞭である。

丸瓦（第32図10）

基本層及び遺構堆積土中から大量に出土している。すべて粘土紐巻き作りの有段丸瓦である。凸面は縄叩き後ほぼ全面にナデ調整が施されている。凹面は布目痕、粘土紐の痕跡が見られる。粘土紐の幅は3～6cm間隔に見られる。また、布の合わせ目の痕跡が見られるものもある。第32図10は、SD-1溝跡第2層から出土したものである。

平瓦（第33図）

基本層及び遺構堆積土中から大量に出土しており、出土遺物の中では最も多い。そのほとんどはSD-1・2溝跡の堆積土中からの出土である。すべて一枚作りのものである。しかし、すべて破片のみであり大きさなどは不明である。凹面には、布目痕や糸切り痕がみられ、部分的にナデ調整を行っているものもある。量的には後者の方が多い。凸面には、叩き目が見られ、そのほとんどは縦方向の縄叩きである。凹面がナデ調整されているものでは、叩き目がつぶれ気味になっている。また、幅2cm程度の平行叩きのものも数点ある（第33図2）。平行叩き目のものはすべて内面がナデ調整されている。さらに両面がナデ調整されているものも少数出土している（第33図5）。多賀城跡の分類・編年を参考にすると、今回出土している平瓦はII B類タイプa2・a3（凸面縄叩き目 凹面ナデ調整）、II C類（凸面縄叩き目 凹面無調整）に含まれるするものが多く、これらの制作年代は8世紀末～10世紀初頭とされている。

土師器

基本層及びSD-1・2溝跡、SX-1性格不明遺構などから出土している。出土量は少なく、図示できたのはSX-1出土の1点のみで、壺の底部から体部下間にかけての破片である（第32図1）。外面はロクロ調整が施され、底部の切り離しは回転糸切り無調整である。内面はヘラミガキが施され、黒色処理されている。

須恵器

基本層及びSX-1性格不明遺構、SK-2土坑等から少數出土しており、そのうち2点が図示された。第32図8は、SX-1出土の甕の口縁部である。第32図4は、調査区東壁II層から出土した壺である。底部の切り離しは、ヘラ切り後手持ちヘラケズリ調整が施されている。底部には、「香？」という墨書（註1）が見られる。陸奥国分尼寺跡で墨書き土器が出土したのはこれが初めてである。

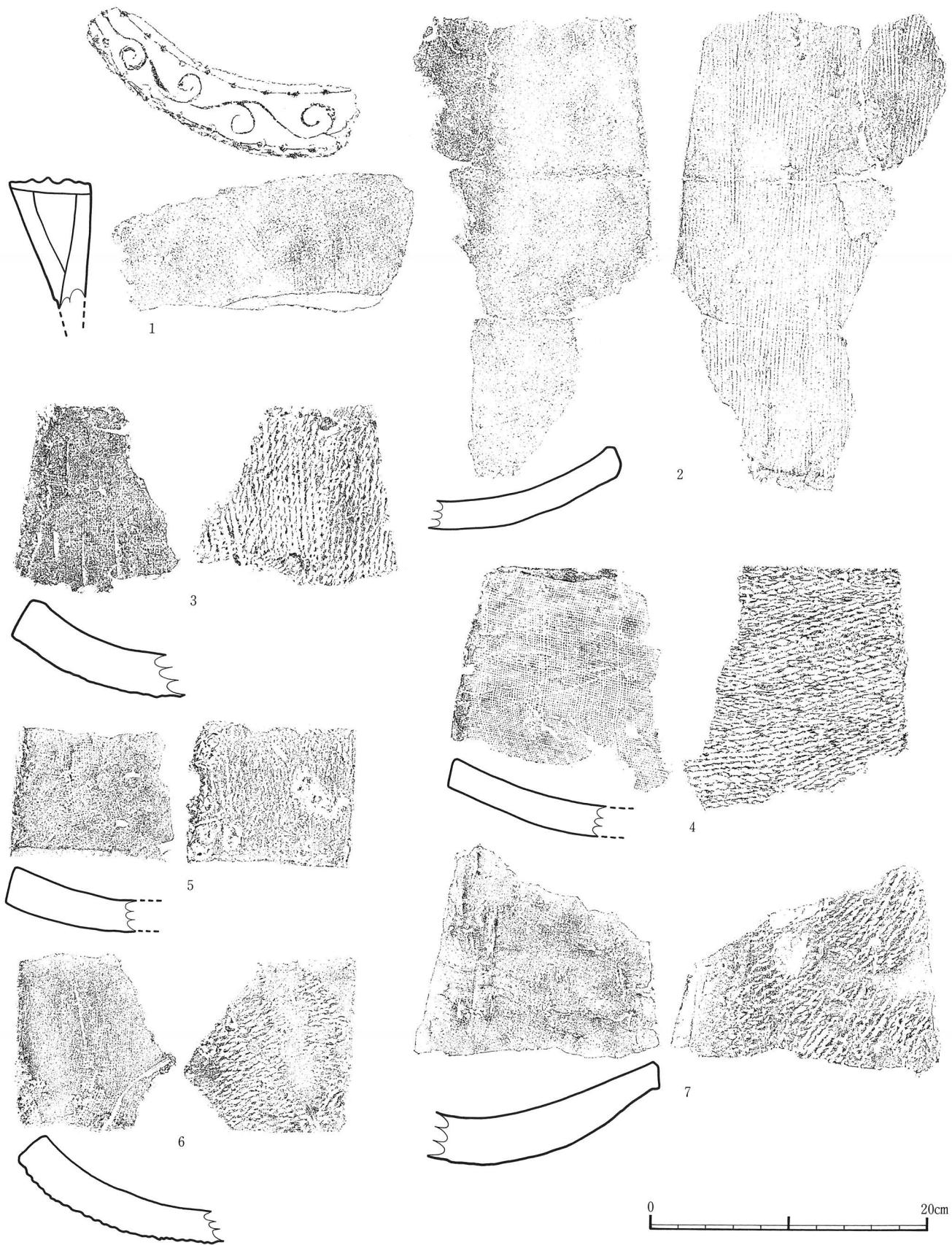
（註1）東北大学今泉先生のご教示をいただいた。



番号	登録番号	出土地点・層位	種別・器種	器高・長	口径・幅	底径・厚	特徴	写真図版
1	D-1	SX-1	土師器坏			4.0	内面：ヘラミガキ・黒色処理 外面：ロクロナデ 底部回転糸切り	10-1
2	D-2	SX-1	赤焼土器坏	3.8	12.5	5.2	内外面：ロクロナデ 内面漆付着 底部回転糸切り	10-2
3	D-3	SX-1	赤焼土器坏	3.2	12.1	5.3	内外面：ロクロナデ 底部回転糸切り	10-3
4	E-2	3トレンチII層	須恵器坏	3.2	12.9	7.4	内外面：ロクロナデ 内面一部漆付着 底部ヘラ切り 墨書「香」	10-4
5	D-4	SX-1	赤焼高台坏			8.6	内外面：ロクロナデ	10-5
6	D-5	SX-1	高台(坏)			8.4	内外面：ロクロナデ	10-6
7	D-6	SX-1	赤焼土器坏		15.1		内外面：ロクロナデ	10-7
8	E-1	SX-1	須恵器甕		23.2		外面：タタキ→ロクロナデ	10-8
番号	登録番号	出土地点・層位	種別・器種	最大長	広端幅	狭端厚	厚さ	特徴
9	F-1	SD-1	軒丸瓦	34.2 (19.2)	12.7	2.4		重弁蓮華文軒丸瓦? 凹面：粘土紐痕・布目 凸面：ヘラナデ 瓦当面剥離
10	F-2	SD-1	丸瓦	(29.3)	17.1		1.9	凹面：粘土紐痕・布目 凸面：繩叩き→ロクロナデ

第32図 出土遺物(1)

III 陸奥国分尼寺跡（第7次調査）



番号	登録番号	出土地点・層位	種別・器種	最大長	広端幅	狭端厚	厚さ	特徴	写真図版
1	G-1	SI-1・1層	軒平瓦					偏行唐草文軒平瓦 凹面：ナデ 凸面(額部)：平行叩き（ハケメ？）→ナデ	11-1
2	G-2	SX-1	平瓦	(36.1)				凹面：糸切り痕・布目・ナデ 凸面：繩叩き？→平行叩き	11-2
3	G-6	SD-2・2層	平瓦					凹面：布目・ナデ 凸面：繩叩き	11-3
4	G-5	SD-2・2層	平瓦					凹面：布目・ナデ 凸面：繩叩き	11-4
5	G-7	SD-2・2層	平瓦					凹面：布目・ナデ 凸面：繩叩き・ナデ	11-5
6	G-4	SD-2・2層	平瓦					凹面：糸切り痕・布目 凸面：繩叩き	11-6
7	G-3	SX-1	平瓦					凹面：ナデ 凸面：繩叩き・凹型台圧痕？	11-7

第33図 出土遺物 (2)

赤焼土器

基本層及びSX-1性格不明遺構から壺・高台付壺が少数出土している。製作にはロクロが用いられており、底部切り離しはすべて回転糸切り無調整である。このうちSX-1から出土した4点が図示されている。第32図2は、体部から緩やかに立ち上がり口縁部はやや外傾する壺である。内面には全面に漆が塗られている。3は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する壺である。2に比べてやや器高が低い。5・6は、高さ3cm程の高台付壺であり、高台端部は5がやや開き気味になっているのに対し、6は直線的である。5の底部切り離しは回転糸切りされている。7は、口縁部がやや外湾し、内部に明瞭な稜を持つ壺の口縁部破片である。

5. 調査成果のまとめと考察

(1) SD-1・2溝跡の性格について

今回の調査区は推定寺域の西辺に当たる。陸奥国分尼寺跡の西方約500mに位置する陸奥国分寺跡の外郭線上では、これまでの調査で築地塀跡や掘立柱列が確認されている。また、その内外にこれと平行する溝跡も発見されており、寺域の区画の様相が明らかになってきている。また、陸奥国分寺・国分尼寺の中軸線は真北から約5度西偏しており、SD-1・2溝跡もこれらとほぼ同様の方位である。さらにSD-1・2溝跡からは大量の瓦片が出土しており、これらの製作年代は奈良時代末から平安時代にかけてのものであることから、SD-1・2溝跡は陸奥国分尼寺の西辺を区画する施設であった可能性が高いと考えられる。遺物の出土状況を見ると溝の底部にはほとんど遺物が含まれておらず、堆積土中2層に大量の瓦片が混入している。このことから、寺院の機能が失われ、溝がある程度埋まった段階で瓦片が混入あるいは投げ込まれたものと思われる。しかし今回の調査では、溝以外に区画施設と思われる遺構の発見されなかつたため、今後の調査によって、寺域の範囲の特定と区画施設の様相が明らかにされることが期待される。

(2) まとめ

- ① 今回の調査は、陸奥国分尼寺跡の推定寺域の西辺で行われた。
- ② 今回の調査では、溝跡4条・竪穴住居跡1軒・竪穴遺構2基・性格不明遺構1基・土坑・ビットなどが発見され、瓦片を主とする遺物も多数出土した。
- ③ SD-1・2溝跡は、陸奥国分尼寺の寺域を区画する施設であると考えられるが、築地跡などその他の区画施設は発見されなかつた。

引用・参考文献

- 岡田茂弘・桑原滋郎（1974）「多賀城周辺における古代壺形土器の変遷」『研究紀要I』宮城県多賀城調査研究所
木村浩二（1986）：「〔5〕陸奥国分尼寺跡—陸奥国分寺・国分尼寺跡周辺の地割と寺城推定についてー」『仙台平野の遺跡群V—昭和60年度発掘調査報告書ー』仙台市文化財調査報告書第87集
木村浩二（1996）：「陸奥国分寺・尼寺と周辺条理」『論集しのぶ考古—目黒吉明先生頌寿記念ー』論集しのぶ考古刊行会
工藤哲司（1981）：『史跡陸奥国分寺跡』仙台市文化財調査報告書第27集
小井川和夫（1981）：『上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集
斎野裕彦・渡邊誠（1985）：「〔4〕陸奥国分尼寺跡」『仙台平野の遺跡群IV』仙台市文化財調査報告書第75集
篠原信彦（1997）：「陸奥国分尼寺跡確認調査報告書」「高屋敷遺跡ほか調査報告書」仙台市文化財調査報告書第223集
主浜光朗（1989）：「〔1〕陸奥国分尼寺跡」『仙台平野の遺跡群VIII』仙台市文化財調査報告書第125集
白鳥良一（1980）：「多賀城出土時の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城調査研究所
仙台市教育委員会（1969）：『史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書』仙台市文化財調査報告書第4集

III 陸奥国分尼寺跡（第7次調査）

- 仙台市教育委員会（1987）：「陸奥国分尼寺跡」『仙台平野の遺跡群VI』仙台市文化財調査報告書
- 仙台市教育委員会（1989）：『史跡陸奥国分寺・陸奥国分尼寺保存管理計画書』
- 宮城県教育委員会・多賀城調査研究所（1982）『多賀城跡－政庁跡－』
- 陸奥国分寺跡発掘調査委員会（1959）：『陸奥国分寺跡』河北文化事業団
- 渡邊誠・木村浩二（1986）：「〔5〕陸奥国分尼寺跡」『仙台平野の遺跡群V』仙台市文化財調査報告書第87集



1 第1トレンチ調査区近景（西から）



2 第1トレンチ遺構検出状況（南から）



3 第1トレンチ SD-1・SI-1（南から）



4 第1トレンチ SI-2（西から）



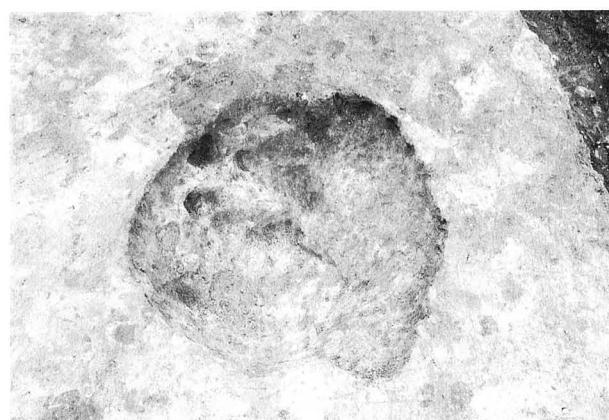
5 第2トレンチ調査区近景（東から）



6 第2トレンチ遺構検出状況（東から）



7 第2トレンチ SD-2（北から）



8 第2トレンチ SK-1（西から）

図版8 第1・第2トレンチ調査状況

III 陸奥国分尼寺跡（第7次調査）



1 第3トレンチ調査区近景（南から）



2 第3トレンチ全景（南から）



3 第3トレンチSI-3・SD-3・4（南から）



4 第3トレンチSI-3（北から）



5 第3トレンチ西半部（北から）



6 第3トレンチSX-1検出状況（東から）

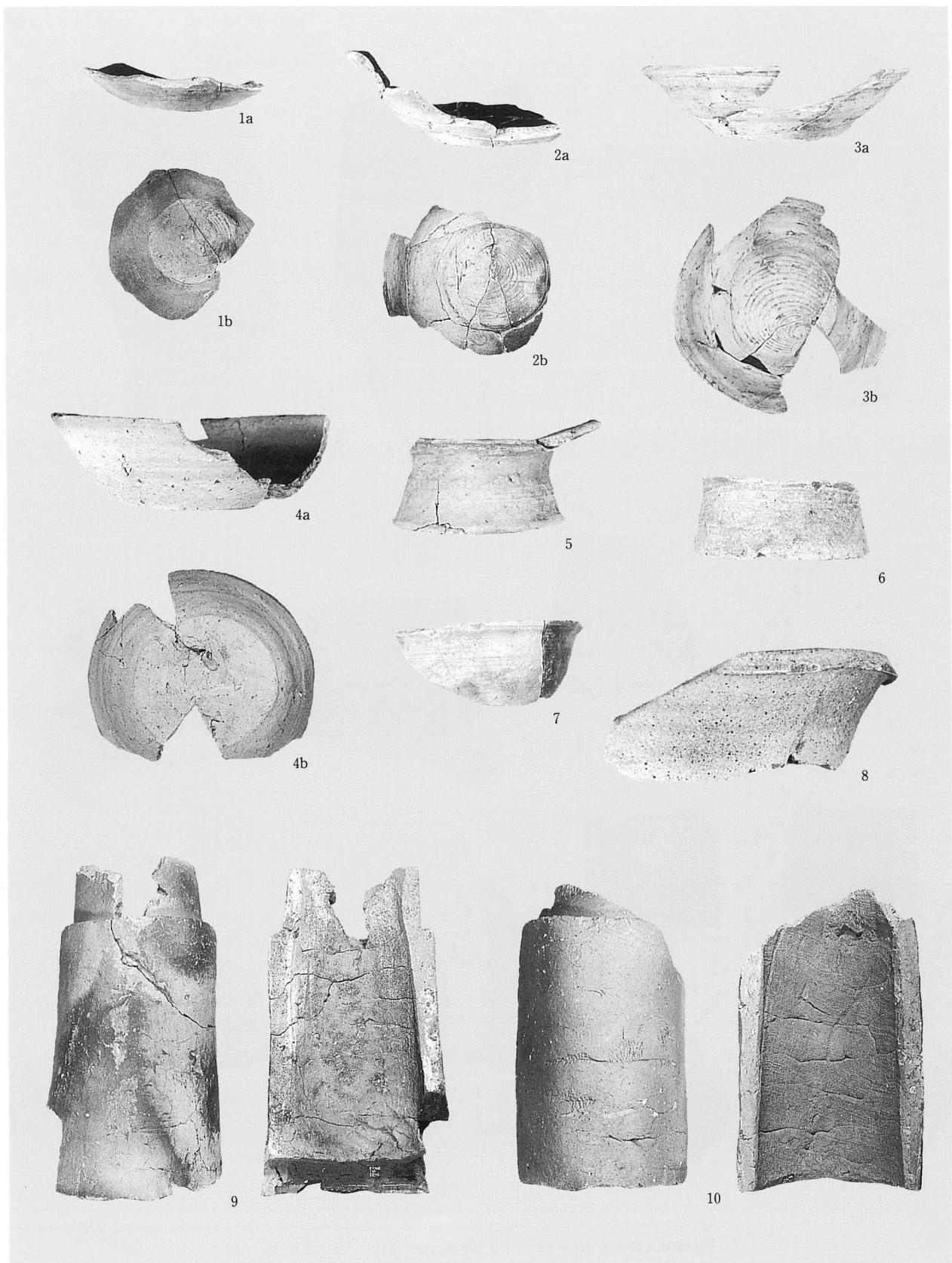


7 第3トレンチSX-1全景（東から）



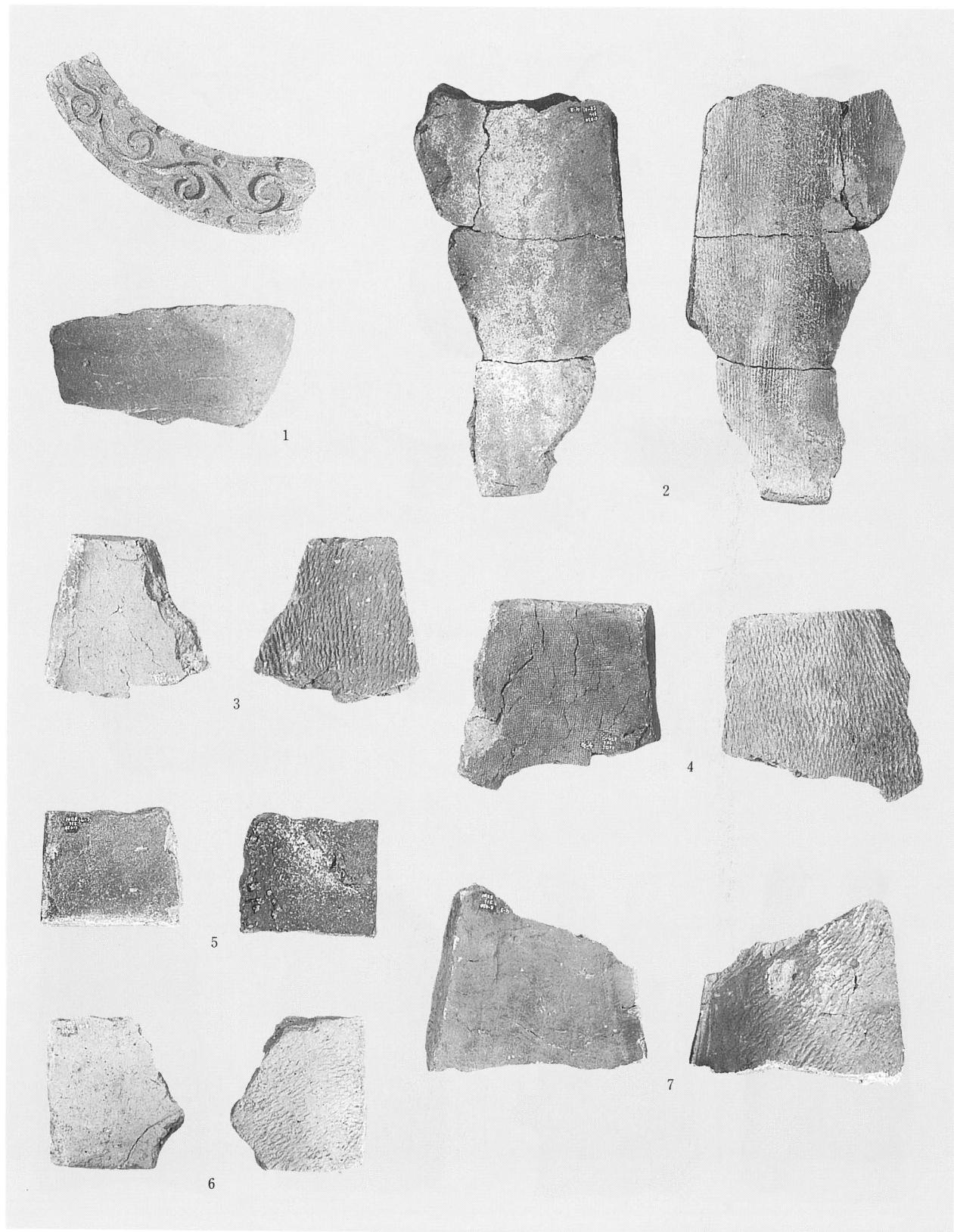
8 第3トレンチSK-2（北から）

図版9 第3トレンチ調査状況



1 : 土師器坏 (D-1)	2 : 赤燒土器坏 (D-2)	3 : 赤燒土器坏 (D-3)
4 : 須恵器坏 (E-2)	5 : 赤燒土器高台付坏 (D-4)	6 : 赤燒土器高台 (D-5)
7 : 赤燒土器坏 (D-6)	8 : 須恵器甕 (E-1)	9 : 軒丸瓦 (重弁蓮華文?) (F-1)
10 : 丸瓦 (F-2)		

図版10 出土遺物(1)



1：偏行唐草文軒平瓦（G-1） 2：平瓦（G-2） 3：平瓦（G-5）
4：平瓦（G-4） 5：平瓦（G-7） 6：平瓦（G-3）
7：平瓦（G-6）

図版11 出土遺物(2)

IV 愛宕山横穴墓群（第4次調査）

I 調査要項

遺跡名	愛宕山横穴墓群B・C地点（宮城県遺跡番号 01196）
調査地点	仙台市太白区向山四丁目70-23
調査原因	切土による宅地造成
調査対象面積	80m ²
調査面積	6 m ²
調査期間	平成9年10月22日～24日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	篠原信彦 根本光一
調査協力	福仙興業株式会社

2 遺跡の位置と環境

愛宕山横穴墓群地点は、JR 仙台駅の南南西約2kmの青葉山丘陵の北東縁にあたる愛宕山に位置する。この北側には北西から広瀬川が蛇行しながら流れしており、この愛宕山をすぎて南東方向に流れ名取川と合流する。また、愛宕山の南には、これと平行するように大年寺山が張り出しており、両者に挟まされるわずかな隙間が沢状に形成されている。この付近一帯は、旧地名で「大窪谷地」と称されていることからも地形の一端を伺い知ることができる。

本横穴墓群は、この沢に面した愛宕山の南西斜面に立地している。また愛宕山の北麓・広瀬川の段丘崖にも横穴墓が構築されている（A地点）。

愛宕山横穴墓群では、1973年以来これまで3次にわたる調査が実施され、29基の横穴墓が発見されている。第1次調査はB地点で、10基の横穴墓を確認、そのうちの9基を調査した。第2次調査はB地点より一段低位にあるC地点で装飾横穴墓の調査を行っている。1991年にB地点で実施した第3次調査では、18基の横穴墓を確認、そのうち15基について調査を行っている。平面形は、方形・隅丸方形・台形などがあり、立面形は、アーチ形・家形・ドーム形と様々である。それらはおおむね5基を1グループとしたまとまりを持って分布しており、そのグループは5つ以上あるとされている。遺物は直刀・ガラス玉・須恵器片が数点出土しただけであったが、形態や周辺の調査からおおむね6世紀末～8世紀頃のものとされている。今回の調査は、この第3次調査区の西側に隣接して行った。



第34図 調査地点と周辺の地形

3 調査の方法

平成9年9月10日付で仙台市若林区石名坂7 福仙興業株式会社代表取締役 加藤正文氏より仙台市太白区向山四丁目70-23における宅地造成工事の発掘届が提出された。この場所は愛宕山横穴墓B地点の西側に位置しており、第3次調査区の西隣に当たる。このことから、仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、確認調査を実施することとした。調査は切土される部分を対象として、重機によって既存の擁壁を取り除いた後、斜面を掘り下げて実施した。その結果、横穴墓1基が検出されたため、申請者とさらに協議を重ね、引き続き本調査を実施した。基本層はにぶい黄色の砂岩である。

4 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、横穴墓1基が発見された。調査区の東端に位置し、階段として利用されていた斜面での検出であり標高は奥壁床面で約27.3mである。玄室天井から玄門にかけてはすでに削平されており、床面と奥壁の1/2ほどを残すのみである。また、調査区西半部の擁壁を撤去した際にも確認調査を実施したが、すでに削平を受けているためか遺構・遺物の発見はなかった。なお、今回の調査区と第3次調査区は隣接しており、一連の遺構と考えられることから、遺構番号は第3次調査からの継続番号とした。

19号横穴墓（第35図）

〔玄室〕 平面形は一辺2mの方形を呈する。玄門側の中心点と奥壁側の中心線を結んだ玄室の中軸線の方向は、N-53°-Eである。立面形は、天井部が削平されているため明らかではない。しかし、奥壁が内傾しながら立ち上がり、奥壁と側壁との境にも明瞭な稜線が見られないことから、ドーム形を呈するものと考えられる。床面はほぼ平坦で玄門方向にやや傾斜している。排水溝、台床などの施設は見られなかった。奥壁側に工具痕が認められた。奥壁、側壁ともに装飾等は認められなかった。

〔出土遺物〕 出土遺物はなかった。

5 調査成果のまとめと考察

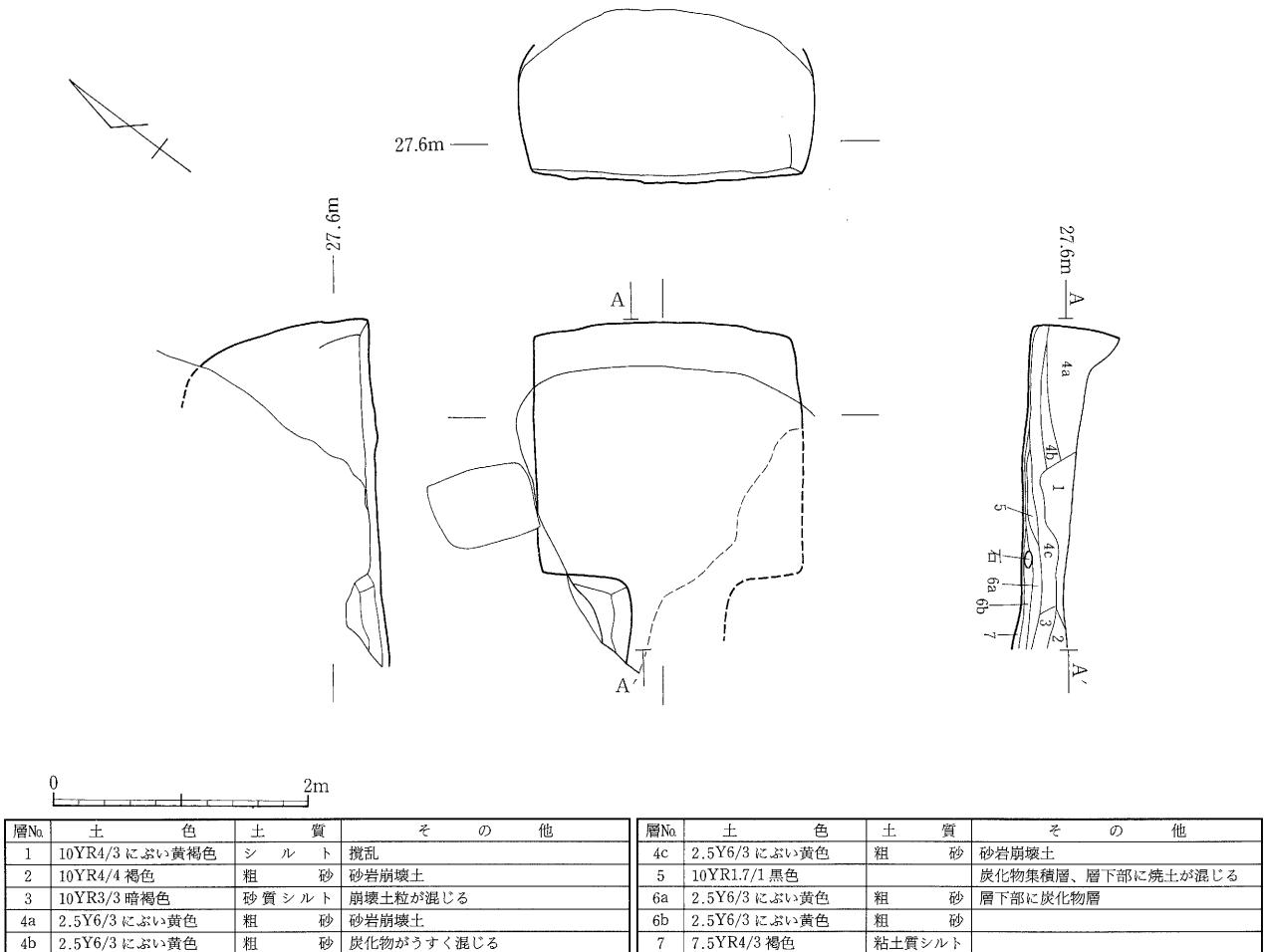
(I) 19号横穴墓の年代について

今回の調査地点は、1991年に行われた第3次調査区の西隣に当たる。第3次調査では18基の横穴墓が発見されており、そのうち15基について調査を行っている。そこで、ここでは第3次調査の成果と比較しながら19号横穴墓の検討を行いたい。今回の調査では国家座標を計測していないため正確な位置ではないが、19号横穴墓は、12号横穴墓から北西に約5mの位置に当たる。

第3次調査では、調査を行った15基について玄室の形状から8つのタイプに分類している。19号横穴墓をそれにはめてみるとタイプ1（平面形：方形、立面形：変形ドーム形）に相当する。第3次調査では、10号墓がタイプ1に分類されている。19号横穴墓と10号横穴墓は床面積もほぼ同じである。しかし10号横穴墓には石敷きの台床が見られたのに対し、19号横穴墓にはそれが見られないこと、また主軸方位も10号横穴墓よりも大きく東傾しているという点で相違している。

次に玄室の主軸方位を見てみると、第3次調査の中でもN-9°-EからN-50°-Eまでかなりの幅があり、丘陵崖面がかなり複雑な凹凸を持った傾斜であったことが指摘されている。また、床面標高についても、25mから28m程までの間にランダムに分布しており、3段位に分類がなされているが、同レベルでの並立する傾向は強くは認められないとしている。19号横穴墓の床面標高はやや高段に位置する。

また、羨道入口の配置関係についても推定がなされており、その結果5つのグループに分類した上で、低段位か



第35図 19号横穴墓実測図

ら高段位への斜行築造順が推定されている。19号横穴墓はこのうち第5グループに属するものと考えられる。第5グループは12号横穴墓と13号横穴墓から構成されており、さらに分割される可能性が指摘されている。19号横穴墓と12号横穴墓は床面標高がほぼ同レベルであり、斜行構築順が低段位から高段位へと向かうことを考慮すれば、19号横穴墓は13号横穴墓とより結びつく可能性が考えられる。また、平面形・立面形のタイプごとの変遷を比べてみても、19号横穴墓のタイプ1は、13号横穴墓のタイプ8（平面形台形、立面形変形アーチ形）よりも新しいとされており、その点でも矛盾は見られない。

これらのことから、19号横穴墓は一連の横穴墓群の変遷中で中間段階に位置するものと思われる。年代については、出土遺物がないことから判断できないが、第3次調査では概ね6世紀末～8世紀という年代が推定されており、19号横穴墓もこの年代の範疇にあてはまるものと考えられる。

(2) まとめ

- ① 今回の調査地点は愛宕山横穴墓群B地点の西部に位置しており、第3次調査区の西側に隣接する場所に当たる。
- ② これまでB地点では、28基の横穴墓の存在が知られており、今回発見された1基を含め合計29基の横穴墓が発見された。
- ③ 調査区西半は、すでに削平されているためか横穴墓は発見されなかった。
- ④ 今回発見された横穴墓は、第3次調査横穴墓群と連続するものである。

IV 愛宕山横穴墓群（第4次調査）

⑤ 19号横穴墓の年代については、第3次調査同様6世紀末～8世紀と考えられるが、出土遺物がないため断定はできない。

引用・参考文献

木村浩二（1989）：『仙台市茂ヶ崎横穴墓群発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第130集

熊谷裕行（1994）：『仙台市愛宕山横穴墓群－第3次調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第187集

結城慎一（1985）：『愛宕山装飾横穴古墳発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第85集

1 19号横穴墓検出状況（西から）



2 19号横穴墓全景（西から）



3 19号横穴墓堆積土断面（西から）



図版12 19号横穴墓調査状況

V 荒井館跡・押口遺跡確認調査

I 調査要項

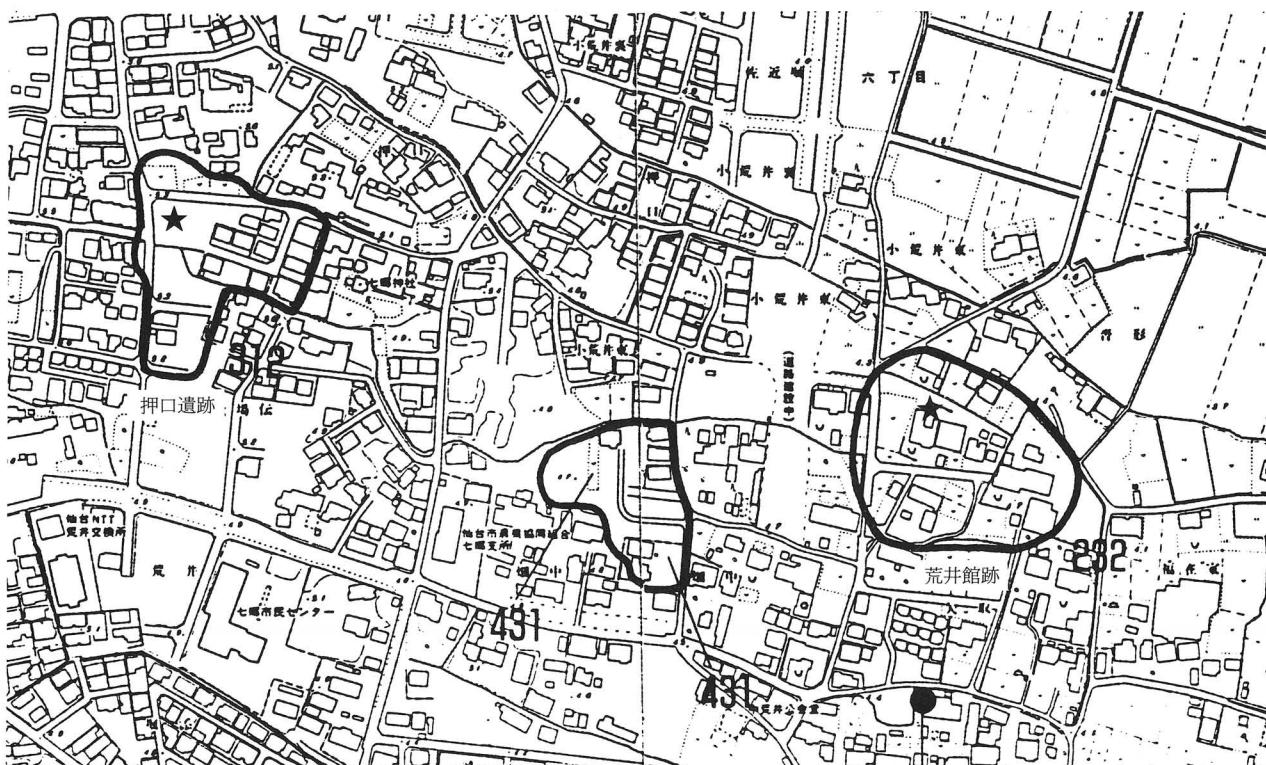
遺跡名	荒井館跡（宮城県遺跡番号 01232） 押口遺跡（宮城県遺跡番号 01312）
所在地	仙台市若林区荒井字矢取59（荒井館跡） 仙台市若林区荒井字押口34（押口遺跡）
調査原因	荒井土地区画整理事業
調査対象面積	350m ² （荒井館跡） 635m ² （押口遺跡）
調査面積	59m ² （荒井館跡） 66m ² （押口遺跡）
調査期間	平成9年8月4日～5日（荒井館跡） 平成9年8月6日～7日（押口遺跡）
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	篠原信彦 根本光一
調査参加者	赤間淳子 大内孝子 大友泰子 菊田親男 酒井正雄 柴田明 柴田徳郎 針生せつ子 武藤季鷹

2 遺跡の位置と環境

荒井館跡・押口遺跡を含む荒井地区は、仙台市の東部、若林区に所在しJR仙台駅からは東南東5～6kmに位置し、沖積平野に立地している。北方約3.5kmの所を梅田・七北田川が、南方約4.5kmの所には広瀬・名取川が流れる。それぞれの川の流域には自然堤防が発達しており、荒井地区は、広瀬川から派生した自然堤防の末端付近に当たる。荒井付近での標高は、自然堤防上で西側が5m前後、東側が3m前後である。後背湿地などでは、これより50cm程度低くなっている。荒井地区一帯は、昭和20年代までは仙台市東部の田園地帯として自然堤防上には「居久根」と呼ばれる屋敷林と堀に囲まれた屋敷と畠地が、後背湿地と旧河道には水田が広がっていたが、昭和30年代以降になると自然堤防上の畠地は次第に宅地化され、水田も耕地整理された。さらに昭和60年代からは広範囲の土地区画整理が行われ、その景観を一変させつつある。

荒井館跡は、荒井地区に東西方向に形成された自然堤防の東端付近に当たり、この付近から自然堤防は南東方向に折れて数百mのび、末端は後背湿地の中に没する。区画整理事業に伴って発掘調査が実施されているが、城館跡に伴うような遺構は発見されていない。また、出土遺物も古墳時代あるいは古代の土師器がほとんどであった。ただし、遺跡範囲の南方で行われた試掘調査では、溝跡や土坑が検出されたほか、陶器や磁器を中心とした遺物が出土している。

押口遺跡は、荒井館跡の西方約500mの所にあり、標高約4.9m～4.7mの自然堤防と考えられる微高地に立地する。荒井館跡と同じく区画整理事業に伴って発掘調査が実施され、河川跡、溝跡、水田跡、土坑などが発見されている。河川跡からは、弥生時代中期から古墳時代前・中期を主とする木製品が出土したほか、弥生土器、土師器など多量の遺物が出土している。



第36図 調査地点と周辺の地形

3 調査の方法

今回の調査は、荒井土地区画整理事業に伴う確認調査である。荒井館跡の調査地点は、仙台市若林区荒井字矢取59に所在し、荒井館跡の南側に位置する。同地内に3.3m×18mの調査区を設定し、重機でにぶい黄褐色シルトの地山面まで約60cm掘り下げ、精査を行った。その結果、攪乱が著しかったものの溝跡・ピット等を検出したため、事業主体者と協議の上、検出遺構の精査を行った。

基本層は2層認められた。I層は暗褐色シルトであり、ごく薄く分布している。II層はにぶい黄褐色粘土質シルトの地山層である。

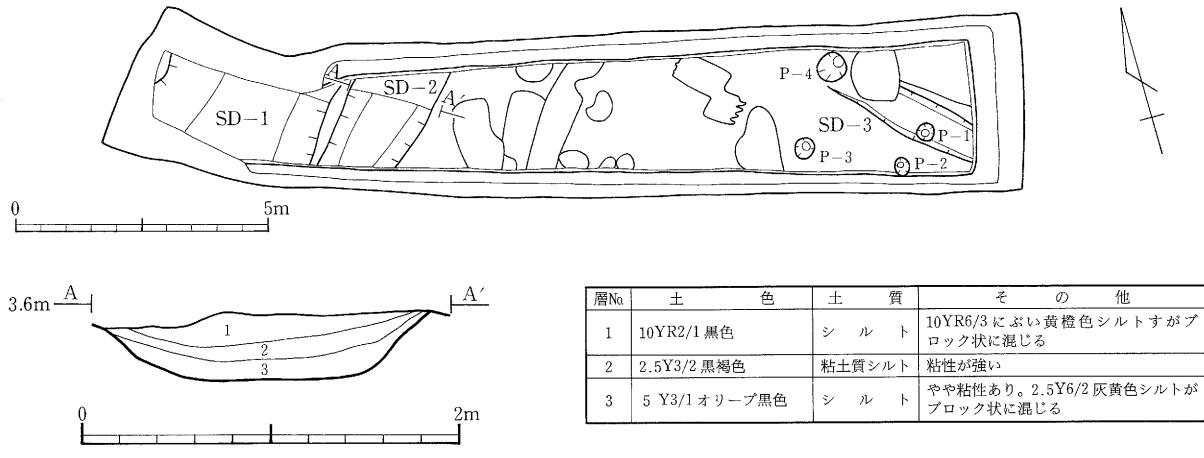
押口遺跡の調査地点は、仙台市若林区荒井字押口34に所在し、2区画に分けられている。この場所は、押口遺跡の北西部に当たる。第1次調査では、弥生時代から平安時代の河川跡が検出され、今回の調査地点はその推定流路上に当たる。南側の区画に3×12mの調査区を設定し、重機で約1m掘り下げ、II層上面で精査を行った(第1トレンチ)。その結果、推定流路上で河川跡のプランを確認した。北側の区画には、2.5m×12mの調査区を設定し同様に精査を行った(第2トレンチ)。

第1トレンチの基本層は2層認められた。I層は、灰色シルトで、層の厚さは約30cmである。II層はにぶい黄橙色シルトの地山層である。第2トレンチの基本層も2層認められた。I層は暗褐色シルトで、層の厚さは約30cmである。II層はにぶい黄橙色砂質シルトの地山層である。

4 発見遺構と出土遺物

荒井館跡 (第37図)

溝跡3条、ピットが検出された。このうち、SD-1として登録した溝は、区画整理前の水路であるためこれについて省略する。



第37図 荒井館跡遺構配置図・SD-2断面図

SD-2溝跡 調査区西側で検出された。主軸方向はN-37°-Eである。確認できた長さは2.1m、上端幅は約185cm、下端幅は約90cm、深さは約45cmである。断面形は舟底形を呈し、堆積土は3層に分けられた。底面はほぼ平坦である。出土遺物はなかった。

SD-3溝跡 調査区の東端で検出された。北側を攪乱によって切られる。主軸方向はN-50°-Wである。確認できた長さは約3.2m、上端幅は約90cm、下端幅は60cm、深さは約12cmを測る。断面形は皿形を呈し、堆積土は単層である。底面はほぼ平坦である。堆積土中から土師器片が数点出土しているがいずれも小破片であり図示できるものはない。

ピット ピットは4基検出された。いずれも調査区の東側で検出された。このうち、ピット3・4には、それぞれ直径10cm程の柱痕跡が見られた。

P-3 平面形は円形を呈し、大きさは40cm×50cmで、深さは約20cmを測る。堆積土は2層に分けられた。ピットのほぼ中心に直径10cmほどの炭化物を少量含む黒褐色シルト柱痕跡が認められた。

P-4 SD-3溝跡と重複関係にあり、これを切っている。平面形は円形を呈し、大きさは60cm×60cmである。断面形は逆台形を呈し、深さは約50cmを測る。堆積土は2層に分けられた。ピットの北東端に直径10cmほどの暗褐色シルト柱痕跡が認められた。

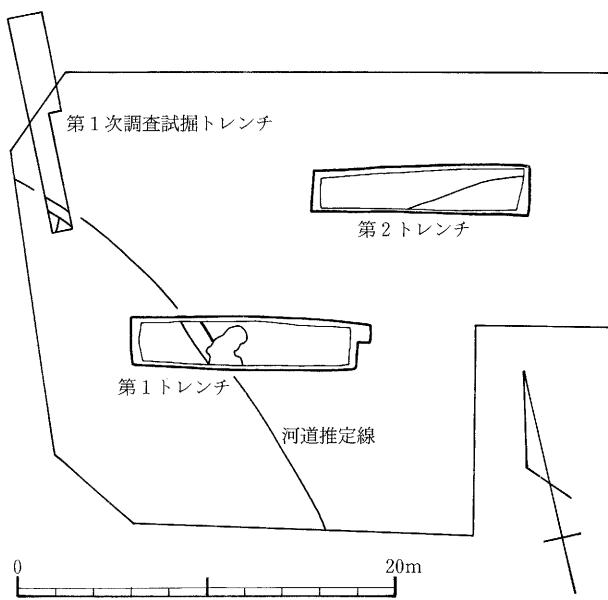
柱痕跡が確認されたのはこの2基のみであり、深さが全く異なることから建物跡などを構成するものかどうかは判断できない。ピットからの出土遺物はなかった。

押口遺跡（第38図）

〔第1トレンチ〕

盛土上から約1m掘り下げて精査した結果、河川跡1条、土坑1基を検出したが、プランの確認のみで掘り込みは行っていない。

SR-1河川跡 調査区西端の河川跡の推定流路上で検出した。西側は調査区外にかかるため規模は不明である。方向は、N-24°-Wである。遺構検出面から



第38図 押口遺跡調査区配置図

土師器片が数点出土しているが図示できるものはない。

SK-1 土坑 調査区の西部に位置し、一部攪乱を受けている。平面形は不整形な円形を呈し、大きさは1m×1m以上である。検出面より土師器片が数点出土しているが図示できるものはない。

〔第2トレンチ〕

盛土から約50~100cm掘り下げてII層上面で精査したが、遺構・遺物は発見されなかった。

5 調査成果のまとめ

〔荒井館跡〕

- ① 荒井館跡の北西部の地点で調査を行った結果、現代の水路を除き溝跡2条、ピット4基を検出した。
- ② SD-2溝跡からは、遺物の出土もなく年代は不明である。
- ③ SD-3溝跡からは、土師器片が数点出土していることから古代のものである可能性も考えられるが、いずれも小破片であり断定はできない。

〔押口遺跡〕

- ① 第1トレンチからは、河川跡1条、土坑1基のプランを検出した。第2トレンチでは遺構・遺物の発見はなかった。
- ② 第1トレンチで検出された河川跡は、これまで押口遺跡で発見されている弥生時代から平安時代にかけての河川跡の一部を検出したものである。

引用・参考文献

工藤哲司他 (1996) : 「中在家南遺跡他－仙台市荒井地区区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第213集

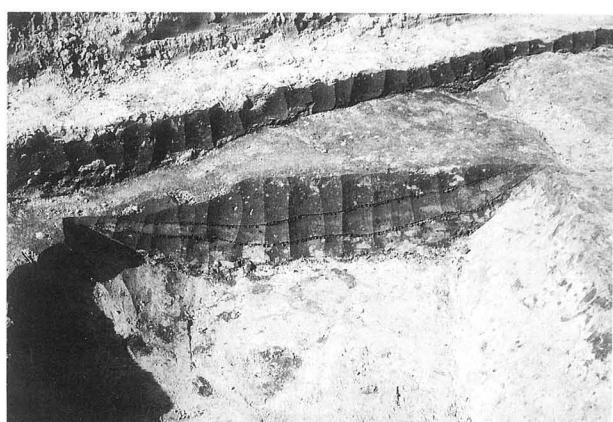
V 荒井館跡・押口遺跡確認調査



1 荒井館跡調査近景（東から）



2 荒井館跡 SD-2 (南から)



3 荒井館跡 SD-2 断面（南から）



4 荒井館跡 SD-3 断面（東から）



5 荒井館跡調査区東半部全景（西から）



6 荒井館跡調査区西半部全景（北から）



7 押口遺跡調査区近景（南から）



8 押口遺跡 SR-1 検出状況（西から）

図版13 荒井館跡・押口遺跡調査状況

VI 仙台東郊条里跡確認調査

1 調査要項

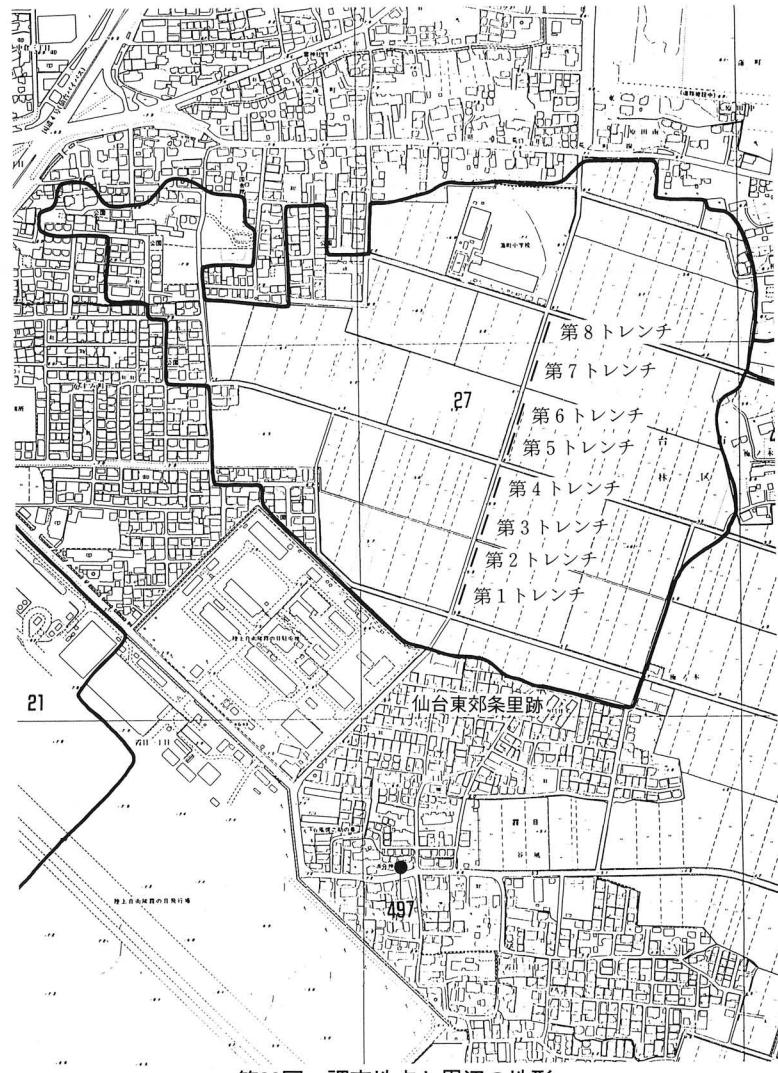
遺跡名	仙台東郊条里跡（宮城県遺跡番号　）
調査地点	仙台市若林区蒲町字南7-1外
調査原因	市道「蒲町南・梅の木線」拡幅工事
調査対象面積	3,500m ²
調査面積	240m ²
調査期間	平成9年11月4日～13日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	篠原信彦 根本光一
調査参加者	上野美子 中里とわ子 三浦市子 山並明夫

2 遺跡の位置と環境

仙台東郊条里跡は、JR 仙台駅から南東に約4.6kmの仙台市若林区南小泉・蒲町南・梅の木に位置し、仙台市東部の沖積平野（宮城野海岸平野）の中の名取川と七北田川に挟まれた後背湿地に立地する。標高は5～8 m、面積は約780,000m²である。

周辺の自然堤防上には、弥生時代の木製品を大量に出土した中在家南遺跡をはじめ、古墳時代・奈良時代を中心に弥生時代から近世まで数多くの遺構・遺物が発見されている南小泉遺跡などがあり、弥生時代以降、この地域では活発な活動が営まれてきたことを示している。

本遺跡を含む仙台市東部地区は、市内でも有数の田園地帯であり、現在でも一面に広がる水田をのぞむことができるが、昭和40年代以降、大規模な圃場整備が実施され、古い地割りなどはすでに失われている。また、近年宅地化が進み、その景観を変貌しつつある。



3 調査の方法と基本層序

平成6年8月30日付で仙台市長より仙台市若林区蒲町字南7-1外における市道「蒲町南・梅の木線」拡幅工事の発掘通知が提出された。予定地区は仙台東郊条里跡のほぼ中央部を縦断しており、仙台市教育委員会では、事業主体者と協議の上、確認調査を実施することとした。調査は、道路拡幅予定地に3×10mのトレンチを8本設定し、重機によって表土を排除し、一部を約1m掘り下げて土層の観察を行った。南側を第1トレンチとし北進しながら調査した。(第39図)

基本層序は、南半のトレンチ(第1~4トレンチ)と北半のトレンチ(第5~8トレンチ)で違いが見られる。南半に共通してみられた基本層序は以下の9層である。

第1層 現代の水田耕作土

第2層 黒褐色粘土・黒色泥炭の互層(植物遺体を含む)

第3層 灰色粘土(粘性が非常に強い。部分的に酸化鉄の小ブロックが混じる。下面に凹凸が見られる)

第4層 にぶい黄色粘土(黄灰色粘土の薄い層との互層)

第5層 黄色灰色粘土(にぶい黄色粘土の薄い層との互層)

第6層 にぶい黄色粘土(黄灰色粘土の薄い層との互層)

第7層 オリーブ黒色粘土(にぶい黄色粘土の薄い層との互層)

第8層 灰オリーブ色粘土(黒色泥炭との互層)

第9層 オリーブ黒色粘土(にぶい黄色粘土との互層、植物遺体を含む)

このうち、現代の水田耕作土を除き水田土壤の可能性が考えられるのは3層である。また、第4層以下は、ほぼ水平に堆積した自然堆積層である。第1トレンチの南端では、3層下に畦畔状の盛り上がりを検出している。

北半のトレンチに共通してみられる層は以下の8層である。

第1層 現代の水田耕作土及び圃場整備時の攪乱層

第2層 明黄褐色シルト(黒色粘土との互層)

第3層 黑褐色粘土(黄灰色粘土との互層)

第4層 黄灰色粘土(灰オリーブ色粘土・黒褐色粘土との互層)

第5層 黑褐色粘土(赤灰粘土との互層)

第6層 灰色粘土(暗赤褐色粘土との互層)

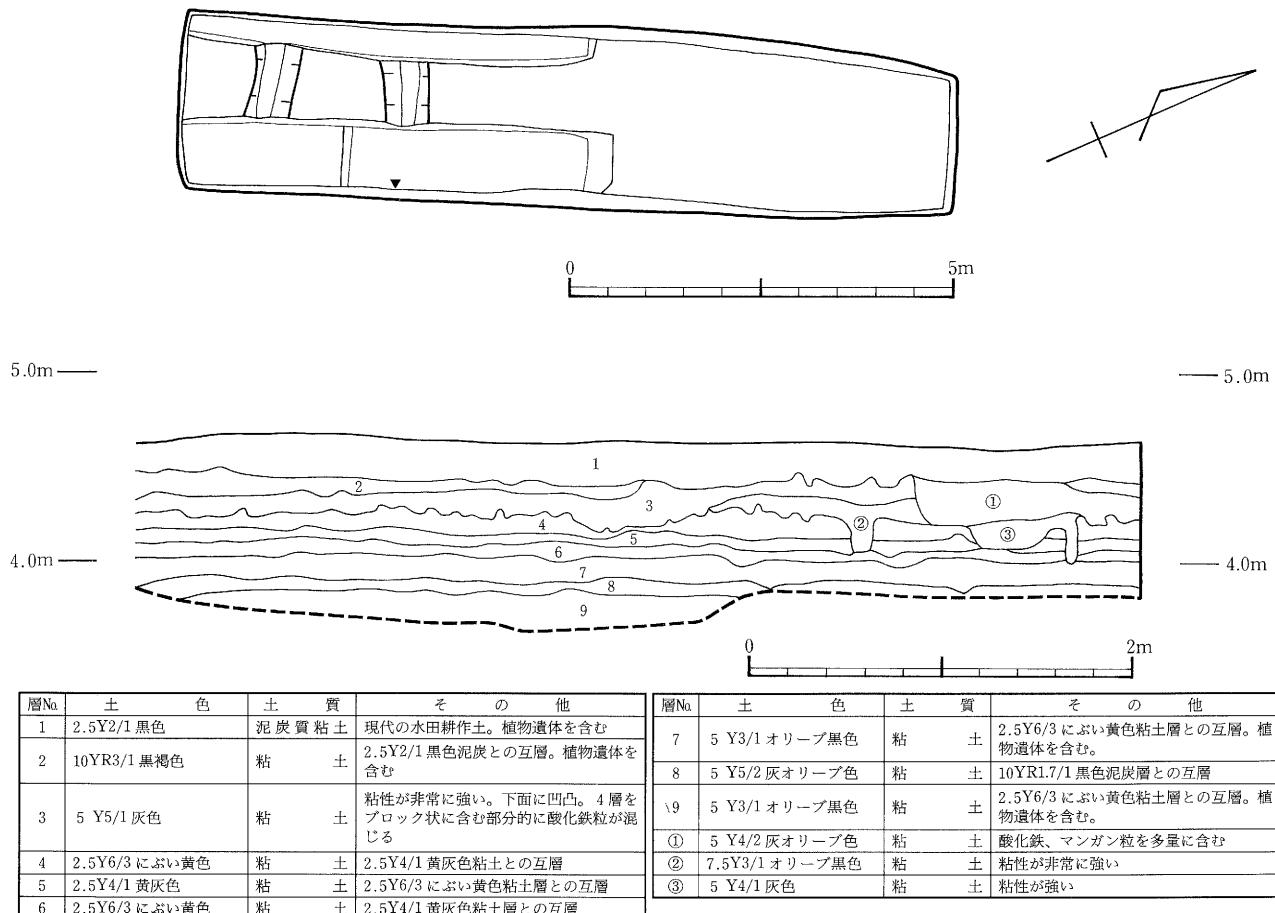
第7層 黒色粘土(黄色粘土との互層)

第8層 灰色シルト質粘土

第2層以下は、ほぼ水平に堆積した自然堆積層であり、現代の水田耕作土を除き水田土壤と考えられる層は発見されなかった。

4 発見遺構と出土遺物(第40図)

現代の水田耕作土を除き水田耕作土の可能性が考えられるのは、南半トレンチの共通層第3層である。層の下面に凹凸が見られ、下層からの巻き上げも確認されている。また、第1トレンチ南端では、第3層下層の高まり(②層)と溝状の落ち込み(③層)を検出している。この②層と③層は第1トレンチでのみ見られる層である。②層の下面にも凹凸と第4層からの巻き上げが確認されており、第3層耕作土以前の水田耕作土と考えられる。さらに第4層上面で精査した結果、両側に溝状の落ち込みを伴う②層と第4層の高まりを検出した(第42図)。方向は、南側でN-74°-W、北側でN-54°-Wであり西側に行くに従って間隔が狭くなる。しかし、検出範囲が非常に狭いことから全体的な傾向を示すものかどうかは判断できない。この部分で第3層も高まりを見せる傾向が見られること



第40図 第1トレンチ調査区・東壁断面図

から第3層の疑似畦畔と考えられる。しかし、②層直下の第4層にも高まりが見られることから、②層水田の畦畔の影響を受けている可能性も考えられる。出土遺物はなかった。

5 調査成果のまとめと今後の課題

今回の調査で現代の水田耕作土を除き水田耕作土の可能性が考えられるのは、南半トレンチの第3層である。また、第1トレンチでは、第3層に伴うと考えられる疑似畦畔の一部を検出している。しかし、出土遺物がないことから年代については不明であり、条里制地割りとの関係も不明である。これまで、仙台東郊条里跡では、2地点において調査が実施されているが、16世紀から17世紀の水田跡が検出されているのみで、古代にさかのぼる水田跡は発見されていない。また、これまで条里制地割りについても復元が試みられており(工藤:1994他)、今回の調査の第2トレンチは、その推定地割り線上にあたるが、条里制地割りを示すような遺構等は認められなかった。仙台東郊条里跡では、古代以来同一土壤での連続的な耕作が行われてきた可能性や近世水田による下層水田の破壊の可能性も指摘されている(平間:1995)。さらに、この地区では昭和40年代に大規模な圃場整備が行われており、北半トレンチでは、現代水田の他に水田土壤は全く検出されなかった。このため、条里制地割りの検出は非常に困難な状況にある。今後の課題としては、これまで行われてきた航空写真や地籍図からの条里制地割りのさらなる検討と、より広範囲の調査区を設定しての調査によるデータの集積が必要であろう。

まとめ

- ① 今回の調査は、仙台東郊条里跡のほぼ中心部を南北に縦断する地点で行われた。
- ② 基本層は南半トレンチで9層、北半トレンチで8層検出された。

- ③ 現代の水田耕作土を除き水田土壤の可能性が考えられるのは、南半トレンチの第3層と第1トレンチの②層である。
- ④ 水田の年代は、遺物の出土がなかったため不明である。

引用・参考文献

- 工藤哲司 (1994) : 『仙台東郊条里跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第183集
渡邊 誠 (1986) : 「仙台東郊条里跡」『仙台平野の遺跡群V』仙台市文化財調査報告書第87集
平間亮輔 (1995) : 「仙台市における埋没条里」条里制研究第11号

1 調査区遠景（南から）



2 第1トレンチ全景（南から）



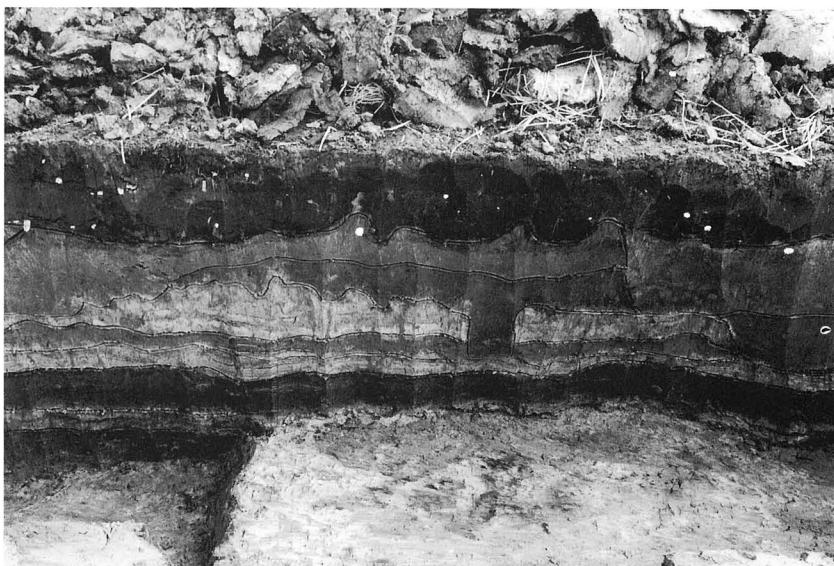
3 第1トレンチ東壁土層断面（西から）



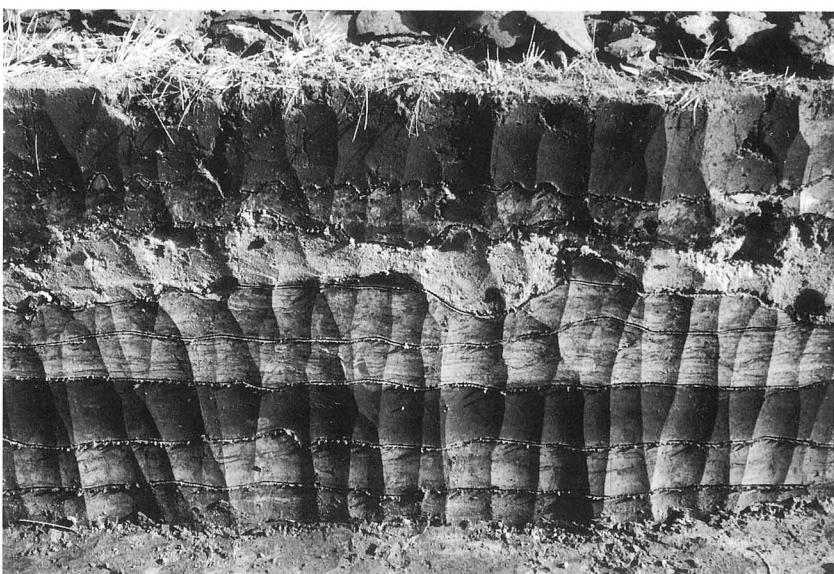
図版14 第1トレンチ調査状況



1 第1トレンチIII層疑似畦畔（東から）



2 第1トレンチIII層 疑似畦畔土層断面
(西から)



3 第5トレンチ東壁土層断面（西から）

図版15 第1トレンチ疑似畦畔・第5トレンチ土層断面

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しんめいしゃようし ほか はつくつちょうさほうこくしょ							
書名	神明社窯跡ほか発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番	第232集							
編著者名	結城慎一・篠原信彦・根本光一							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 TEL022-214-8893~8894							
発行年月日	1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんめいしゃようし 神明社窯跡	せんだいし みやぎのくまますえ 仙台市宮城野区折江	04100	01044	39°14'20"	140°56'31"	19960724 ↓ 19960820	104m ²	小規模な 宅地造成
むつざわひやせき 富沢遺跡105次 〃 107次 〃 108次 〃 109次	せんだいし たいはくくながまちみなみ 仙台市太白区長町南・ ながまち ちない 長町地内	04100	01369	38°13'04" 38°13'09" 38°13'20" 38°13'15"	140°52'34" 140°52'55" 140°52'59" 140°52'46"	19970519~20 19970909~11 19971006~07 19971215~17	40m ² 54m ² 54m ² 18m ²	個人専用 住宅・店舗・公共 下水道
むつこくぶんにじあと 陸奥国分尼寺跡	せんだいし みやぎのくみやちよ 仙台市宮城野区宮千代	04100	01020	39°14'59"	140°54'43"	19970909~03 19971125~1212	108m ²	店舗付住 宅
あたごやまよこあなぼぐん 愛宕山横穴墓群 えーちてん A地点	せんだいし たいはくくわかいやま 仙台市太白区向山	04100	01196	38°14'28"	140°52'54"	19971022 ↓ 19971024	6 m ²	小規模な 宅地造成
あらいいたあと 荒井館跡 おきあぐちいせき 押口遺跡	せんだいし わかばやしくやとり 仙台市若林区矢取 せんだいし わかばやしくおきあぐち 仙台市若林区押口	04100	01232 01312	38°14'25" 38°14'31"	140°56'59" 140°56'39"	19970804 ↓ 19970807	59m ² 66m ²	宅地の地 盤改良
せんだいとうこうじょうよりあと 仙台東郊条里跡	せんだいし わかばやしくかばのまち 仙台市若林区蒲町・ みなみこいざみちない 南小泉地内	041001	01027	38°14'07" 38°14'20"	140°55'55" 140°56'00"	19971104 ↓ 19971113	240m ²	市道拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
神明社窯跡	窯跡	奈良・平安		半地下式窯窯・土坑・ 溝跡・その他の遺跡		瓦・須恵器		
富沢遺跡	水田跡	弥生～近世		水田耕作土				
陸奥国分尼寺跡	寺院跡	奈良・平安		竪穴住居跡・溝跡・ 土坑・その他の遺跡		瓦・土師器・須恵 器・赤焼土器		
愛宕山横穴墓群	横穴墓	古墳・奈良		横穴墓		土師器		
荒井館跡 押口遺跡	城館跡 集落跡	中世 弥生～中世		溝跡・河川跡		土師器		
仙台東郊条里跡	水田跡・条里跡	古代		水田耕作土				

仙台市文化財調査報告書第232集

神明社 窯跡 ほか

発掘調査報告書

1998年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1
文化財課 022(214)8893

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24
TEL 263-1166
